看守はすぐ吉藏を引立て、巡査は廷丁と共にお源を場外に運び出した。

腦溢血

お源の身體は取敢ず證人控所に運び込まれたが、誰も附添人のなかつた事と取引人の有無さへ不明な事が裁判所を當惑させた。併し捨置く事は素より出來ぬので、一方醫師を招き診察せしむると、腦溢血のため全身麻痺を來して居るので、差當り危篤の徵候はないが、多少なりとも身體の自由を恢復し口も利けるやうになるかどうかは疑問であるとの事であつた。

かくて取引人のないお源は、その場から警察の手に引渡され、警察の手から取敢ず此地の醫學校病院へ交渉し、そこへ收容されることになつた。

お源が同病院の施療患者室の寢臺に寢せられた時は、殆ど死人と擇ぶところが無かつた。四肢は硬ばり、唇は半ば開き、兩方の眼だけが義眼のやうに開いて少しも動かず、その上瞳孔の散大して居る有樣は、誰が眼にも死骸のやうに見られたが、なほその生命のある事を示して居るのは、心臟の鼓動と不規則な苦しさうな呼吸とであつた。

注射や電氣療法の試みられた結果、呼吸は次第に順調に復して來て、知覺狀態も多少づゝ改まつて

行くやうに見えた。その中身體をいくらか動かしながら、恐ろしい不安と驚愕の眼色をして、自分の周圍を注意し始めたが、だんだん自分の頭の中で過去つた記憶を喚起して來るらしく、その眼には忽ち恐怖の色が宿つて、何か非常に努力の結果唇が動くと見ると、二言三言何とも聞取り難い言葉が出たが、たゞそれだけで疲れたやうに眼を閉ぢると、すぐまた不覺の眠に落ちて了つた。

お仙が警察から通知を受けたのは、その日の正午過間もない事であつた。それは今朝法廷で吉藏の死刑の言渡しがあつて、その時傍聽席にゐてそれを聞いたお源は、その場で卒倒し、腦溢血のため人事不省に陷つたので、醫學校病院に收容されて居るとの事を通じて來たのであつた。

言渡しと母親の身の上を案じて居たお仙に取つて、それは實に戰慄すべき報知であつた。兄はとうとう死刑の宣告を受けて了つたし、兄を救ふだらうかと期待してゐた母親は、兄も救はずにその場で卒倒して了つたのだ。此上母が恢復しなければ萬事休すと思はれるので、お仙はもう居ても立つても居られない氣がした。早速常吉を迎へにやつて紫山に來て貰つたが、紫山も譯を聞くと、その驚きは一通りではなかつた。

「吉さんが死刑で、お母さんが腦溢血……どうも大變な事になつたね。」

「腦溢血と云つたら、中風ですの？」

「ウム、中風だよ。まだ詳しい事は分らんのかい。」

「たゞ公判廷で人事不省に陷つたので、醫學校病院に收容されたといふだけなんですの。……どうでせう、母の生命に係はるやうな事はないでせうか。」

「さア、そんな事はあるまい、大抵半身不隨とか、全身不隨とかいふ事になるだらうと思ふが……。」

「口は利けるでせうか。」

「どの道舌は縺れるだらうが……中道の勘さんのやうに口が利けなくなるのもあるからね。」

「口でも利けなくなつたら大變よ。」と、お仙は顏色を變へた。

「さア、そんな事もあるまい。……どうもお母さんの樣子がこの三四日變だつたが、やつぱりその下地だつたんだね。」

「えゝ、さうなんでした。手足が麻痺ると云てたり、よく轉んだりして……やつぱりその氣があつたんですね。千葉へ行かなければよかつたのに……。」

「自分でも身體の惡いのを承知で、なぜ千葉へ出かけたのだらうね。それはやつぱり吉さんの言渡が氣になつたんだらうが……。」

「何か母は犯人の手がゝりを知つて居て、それを申出るつもりぢやア無かつたかと思ひますの。」
「併しお仙ちやんがそんな想像をするには、何か根據があるのかね。」
「えゝ、……だけども母が卒倒して了つてはどうにもならないわ。」
「卒倒しても口が利ければ、差支へないぢやないか。」
「口が利ければいゝんですけれども、口が利けなくなつたらほんとに大變なんですの。母でなければ兄を助ける人がないんですもの……。」と、お仙は戰慄した。
「兎に角千葉へ行かなければなるまい。お仙ちやんなり、また誰か人を賴んでやるなり……そしてお母さんを連れて歸る事にするかどうか、それも問題だね。」
「そりやア連れて來なけりやアならないわ。……兎に角、私これから千葉へ行つて來ようと思ひますの。どうでせう。」
「そりやアいゝだらう。……が、常吉でも伴に連れて行くとして、後はどうする？　二三日歸れないやうになるかも知れないぢやアないか。」
「えゝ、いつそとゝを締めて行きませうか。どうせもう商賣なんかないんですから……またかうなつては商賣の事なんか考へても居られないわ。」

「それもさうだが……。」と、紫山は考へて「兎に角誰か留守番を賴まう。お末さんにでも來て貰へば、留守居は出來るよ。お母さんが居ないんだから却つて事が仕善い。また病人のお母さんを連れて歸る事にでもなれば、いよ〳〵勝手働きが入る譯だからね。兎も角お末さんに來て貰ふ事にして置かう。どの道あとは己がどうにでも引受けて置くから、心配せずに千葉へ行つて來るが善からう。己も翌日行つて吉さんに逢はうと思ふ。死刑の言渡しがあつたとすれば、此上はいづれ控訴の必要があるから……。」
「えゝ、どうぞさうお願ひ申します。控訴をして置けばその間にお母さんも癒るでせうから……。ちやア私、すぐ仕度をします。常吉は連れて行かなくつても大丈夫です。今度はまづ從兄の家を賴つて行くつもりですから。」
從兄といふのは千葉に乾物屋を出して居る伯母お幾の實子で、小さい時には親しくした間柄でもあり、今でもこちらからさへ便つて行けば、親切に世話をしてくれる事は分つて居るのだ。
そこでお仙は家の事は萬事紫山に託した上、そこ〳〵に仕度を整へ自分一人で停車場へ出かけて行つた。やがてお仙を乘せた列車が千葉の停車場へ着くと、お仙は醫學校病院には向はずに、取敢ず俥で從兄の營む乾物店を尋ねた。

従兄の重吉もその嫁のお信も、お仙の豫期した通り親切にもてなしてくれた。今度の事件は素より
よく知つて居るので、お仙の一方ならぬ氣苦勞に對しては、少なからず同情もするのであつた。お仙
が今日突然に尋ねて來た譯を話すと、重吉夫婦の驚きも一方ならず、早速お信がお仙について病院に
行く事になり、二人は俥ですぐ病院に出かけた。お信は緣の叔母ではありながら、平素の事情から、
まだ一度もお源の顏を見た事がないのだ。でお源が知覺を失つて居る事は、お信に取つて寧ろ好都合
であつた。

お源の收容された病室には二臺の寢臺が並んで居たが、その一臺が空いて居たのは、お仙のため願
うてもない事だつた。その上お源に今附添つて居た看護婦が、偶然にもお信の知る人であつた事も幸
ひの一ツであつた。

お源は寢臺の上に仰向に寢せられたまゝ、少しも動かずに、眼は半眼に開いたまゝ天井の方を見つ
めて居た。母が無事で居たと思ふと、お仙はほツとして寢臺に近づき、

「お母さん！　お母さん！」と、呼はつたが、母の顏にはわが子を認めた何等の徵候も表はれない。

「お母さん、私ですよ。分りませんか。」と、一生懸命母の顏を熟視しながら母を揺ぶつて見たが、相
變らず少しも通ずる樣子は無かつた。

お信に挨拶をして居た看護婦が近づいて來て、

「まだ誰もお分りになりません。何と仰しやつても無駄でございます。」

お仙は失望しながら、よろ〳〵と後の椅子に倒れるやうに腰を落した。母がこの通り知覺を失つて
居れば、果していつ兄を救ふ事が出來るだらうと思ふと、胸を抉られるばかりの傷を覺ゆるのだ。

その時看護婦は、今日法廷で起つた一切の事をもう知つて居て、それをお仙とお信に話した。それ
によるとお源は傍聽席に入込んだ時から、餘程亢奮して居て、人ががや〳〵笑ひ話をして居るのを咎
めては、自分の息子が今言渡しを受けるのだと公言し、吉藏が看守に引立てられて法廷へ入つて來た
のを見ては、聲をかけてあはや退去を命ぜられようとし、最後に言渡しのあつた際には、柵に縋つて
立上りざま、吉藏は犯人ではない、犯人は別にあると叫んだまゝ知覺を失つて倒れて了ひ、その儘こ
の病院へ運び込まれたのだ。

お仙はこの話を聞くと一方ならず亢奮した。前後の母の樣子で察すると、母は決して吉藏を見殺し
にするつもりでは居なかつたらしい、最後の判決を聞いて立上つた時には、犯人の兄でなくて、他に
ある事を――それは自分である事を白白しようとしたに違ひなかつた。どうしてもさう解釋しなけれ
ばこの場合の母の心理を說明する事は出來ないと思ふのだ。――お仙は今日までその日の來るのを待

つて居たのだ。その日は來たにも拘らず、母の卒倒のために、機會は空しく逸せられたのだ！　あゝ何たる遺憾の極みだらう。この上その機會は再び來ようとも思はれない。……けれども兄を救ふには是非ともその機會を作らなければならない。母の知覺を恢復せしめなければならない！

お仙は看護婦に向つて、

「母はこのまゝ正氣づかないやうな事は有りますまいか。」

「そんな事もございますまい。ですけれども先生の仰しやるには、善くなつても全身不隨で、口を利く事は難かしからうとのことでございました。」

「えッ、ぢやアロが利けなくなるんですか。」と、お仙の顏にはまたしても絕望の色が浮ぶのだ。

「それも翌日にならなければ、確とした判斷はつかないらしうございます。」

「翌日になつていよ〳〵口が利けぬと極まつたら……。」と、獨呟いたお仙の顏色は母親のやうに蒼ざめて了つた。

看護婦がお信と語るべく患者をお仙にまかして、お信を室外に連れ出した機會を利用し、お仙は一度母親に近づいた。自分の姿がよく母親の目に入り、自分の聲が母親の耳に通じたら、母親の知覺が目覺めぬ筈はなささうな氣がするので、懸命にそれを試さうとしたのだ。

お仙は母親の上にじッと屈んで、暫らくその眼を見つめた後、耳元に口をあて低いけれども力の籠つた聲で、

「お母さん、私ですよ。お仙ですよ。……分つて？」

母親の眼には依然としてお仙を認めた何の徵候も表れないのだ。けれどもお仙はひるまず、母親の眼を見つめたまゝ繰返した。

「お母さん、私のいふ事が分つて下さらないと大變よ。……今日までの事を思出して下さい。お品さんが殺されて、兄さんがその嫌疑を受けて、今日は死刑の言渡しがあつたのですよ。お母さんはその場に居て、言渡しを聞いたでせう。……兄さんは殺されて了ふのよ。罪もないのに、ほんとの罪人でもないのに、無實の罪を被て兄さんは殺されて了ふのよ。……それは誰の罪です。……兄さんに罪のない事は、お母さんが云解かなければ、誰も云解く人がないでせう。……お母さん！　兄さんを助ける事の出來る人は、此の世の中にお母さんばかりです。お母さんは今日兄さんを助けるつもりだつたんでせう。……ですけれども兄さんはまだ助からない中にお母さんは卒倒して了つたんです。何といふ恐ろしい事でせう。……だから一生懸命モ一度正氣づいて下さい。そして兄さんを助けて下さい。お母さんがこのまゝ口が利けなくなつたら大變です。兄さんは殺されて了ひます。お母

さん、分りましたか。早く正氣づいて下さい。そして兄さんを助けて下さい。公判廷で今日お母さんが云ひかけたやうに、犯人は兄さんではない、犯人はお母さん――」と、云ひさして慌てゝ聲を落し

「ほんとの犯人を知つてるのはお母さんばかりだと申出て下さい。」

何とも云知れぬ感動のためにお仙の聲は震ひ、眼は熱のために輝き、お仙の全精神はこれ等の詞に打込まれたかと思ふばかり、非情のものもその誠に動かされずには止むまいと思はれるのに、お源は只木の如く石の如く默々として、その顏には何等感情の表示も認識する事が出來ないのだ。

お仙は泣き出しさうになつて、

「お母さん、これほど云つても通じないんですか、私が分らないんですか。私の顏が分らないですか。……兄さんは死刑に極つて……お母さん、あなたは……私の顏も分らない！　あゝ情ない事になつちまつた。」

お仙はたまらず顏を蔽うて泣伏した。

面會

お仙は係りの醫員にも逢つて、母の容體を聞いて見たが、既に看護婦から聞いたところと左したる相違はなかつた。鄕里に連れ歸りたいとの希望に對しては、なほ四五日經過を見、安靜狀態に復した上でなければ絕對に許されぬとの事に、お仙は止むなく、それまで自分も病院に留まり、母の看護に從事する事に極めた。

お仙はすぐ端書を紫山に出して、母が知覺を失つて居ることゝ、四五日動かす事が出來ぬので、自分もそれまで病院に留つて居ることを報した。お仙は看護の間幾度か母の知覺を喚覺さうと試みたが、それは皆無效であつた。

翌日になると正午少し過に紫山が病院へ尋ねて來て、お仙から一切の模樣を聞取つた。紫山は吉藏に面會を求めて、控訴させる事を主なる目的として千葉へ出て來たのである。

「お仙ちやん、家の方は少しも案じるに及ばないよ。丁度お末さんが遊んで居るので、すぐ昨夜から來て貰つて居る、常吉も足りない代り、逃げ出さうともせず、一生懸命親方がどうなるかつて心配し

ながら、よく留守してるから、まあどうやら遣つて行ける仕掛だ。……安心してお母さんの看護をするがいゝよ。」

お仙は涙ぐみながら、

「何から何まで御厄介になつて有難うございます。ほんとにお禮の申上げやうも有りませんわ。」

「何も改まつて禮など云はずともいゝぢやアないか。これもみんな吉さんのためだよ。……ところで遲くなるから、すぐ己は監獄署へ吉さんを尋ねに行くが、お仙ちやんも一緒に行かないか。」

「えゝ、さう願へればこんな都合のいゝ事はありません。」

「ぢやアすぐ出かけよう。病人はこのまゝ置いてつてもいゝんだらう。」

「えゝ。看護婦が居ますから……。」と、云つたが、お仙の頭には急にまた違つた考へが閃いた。

「先生、私は私で別に兄を尋ねた方がいゝと思ひますの。」

「なぜ？」

「ひよツと兄さんが控訴を承知しないかも知れませんから……。」

「併しその心配があるなら、却つて二人で行つて兄さんを動かした方がよかアないか。」

「ですけども先生が行つても承知しなかつた時に、また私が行つて勸める方がいゝと思ひますの。」

紫山は考へて、

「それもさうだね。己が行つても承知しない時、新手の仙ちやんが行く。……ぢやアさうするか。」

「えゝ。」

お仙はその實たゞその事だけの案じよりも、たつた一人で兄に逢ふ事を必要としたのだ。紫山と一緒に行つては、云へる事と云へない事とがあると思つたのだ。

「それぢやア己はすぐ行つて來る。」

紫山は直に病院を辭して行つたが、二時間ほどすると、失望した樣子をして歸つて來た。

「お仙ちやん、やつぱりいけない。實は判決があるとすぐ、辯護人から控訴するかどうかと相談があつたさうで、それを一言の下に拒絶して了つて、控訴は一切しない。刑にはいつでも服すると云切つたんださうだよ。それで己が何と勸めて見ても聞かないんだ。……あの調子ぢやアお仙ちやんが行つても難かしさうに思ふが困つたもんだな。」

お仙は溜息を吐いて、

「ぢやア私が行つても駄目かも知れませんね。」

「併しどうしても控訴させなけりやア駄目だよ。控訴をして置けば、その結果はどうでも、このまゝで二三ケ月間延して置く事が出來るが、それでなければすぐ刑を執行される外はないんだから……。」

「控訴しないで居ると、いつ刑を執行されるんでせう。」と、お仙はそれが何よりも心配になつた。

「今看守に聞いて來たが、大抵一ケ月目位に執行されるさうだ。尤も早いのは十五日位で執行されるといふから、控訴しないで居ると、こゝ二三週間の餘裕ほかない事になるんだ。」

「それ迄にお母さんが癒つて、口が利けるやうにならなければ大變だ！」と、呟やいたお仙は形勢の切迫しつゝある事を知つたのである。

「お母さんは言渡のあつた時に、やつぱり犯人を云はうとしたのだらうか。」

「えゝ、それに相違ないと思ひます。だからもしか二三週間の中に、お母さんが快くなつてくれなければ……取返しがつかなくなるぢやアありませんか。」

紫山も萬更お源を疑はない事はないのだ。たゞそんな事はお仙の前でも口にすべき事ではなく、まだお仙に對し、少しも悟つて居ない樣子を見せて置く方がいゝと思ふため、何にも知らぬ顏をして居るだけで、お源がこんな容體になつて了つた事については、お仙に劣らず心配をして居るのだ。

「兎に角お母さんを癒す事が肝腎だね。」

「癒らなかつたらどうしませう。そして兄さんも控訴を承知しなかつたら？」

「だから兄さんにはどうしても控訴させるんだよ。」

「今日はもう遲いでせうね。」

「もう遲いから逢はしてくれまい。明朝早く逢つて來るがいゝ。」

「えゝ、さうしませう。」

お仙は面會の手續をよく聞いて居たので、翌朝格別まごつかずに兄に逢ふ事が出來た。これまで未決に居る間は、お仙が心盡しの暖い布子を着て居られたものが、哀れ昨日に變る今日の身の上、重罪囚の肌寒い獄衣に着せかへられ、看守に連れられて、手錠を卸されたまゝ、嚴重な獄房そのまゝの、格子で仕切つた恐ろしげな重罪囚面會所に、兄の姿の表れた時は、お仙は何とも知れぬ淺ましさに打たれ、思はず熱い涙を浮べた。が吉藏の顏はこの前法廷で見た時に比べて、別段窶れても居ず、またその覺悟した面色には、却つて消極的の沈着と安心の樣子が見えるので、お仙はほツとするにつけ、兄の心が察せられ、胸は搔むしられるやうに湧返つて來るのだ。

「兄さん！」と、思はず鼻をつまらせると、

「お仙、よく來た。……昨日謙さんが來たので知つたが、お前は病院に來て居るさうだな。お母さんはどうした。」

「え、、やつぱしおなじことです。お醫者の話では、癒つても口が利けなくなるだらうつて云ふんです。」

「さうけ。……それがいゝだ。お母さんは口が利けなくなる方がいゝだ。」

お仙は眼を睜つて、

「さうなつたら大變よ。お母さんは言渡しの日に何もかも云つて了ふつもりだつたんです。それがまだ何にも云はない中に卒倒して了つて……。」

「これ何をいふだ。お母さんが云ふ事は何もねえだ。……お母さんが卒倒したのなら、さうしていつまでも安々眠らして置くがいゝだ。何にも今更お母さんを喚覺すには當らねえだ。」

「でもお母さんがそのつもりなら、何もかもお母さんの心の儘にさしたらいいぢやア有りませんか。……私はお母さんをきツと癒して見せます。そしてきツとお母さんの思ひを遂げさせます。たゞそれには日日がかゝりますから、兄さん、どうぞ控訴して下さい。本人から辯護人に賴めばいつでもすぐ手つづきをして呉れるさうですから。……まだ三日日限があります。どうぞ私の一生のお願ですから、控訴の事を承知して下さい。」

「お仙。」と、鋭く云つて、兄はじツと妹の顏を見つめながら腸を絞るやうな聲で、「己、自分が活きてお母さんを殺す事出來ねえだ。……この一言がお前への返事だ。金輪際己は控訴はせぬからさう思つてくろ。」と、辭色共に勵しく、動かすべからざる決意を見せた。

お仙はその時どうしても兄の心の動かぬ事を見拔いた。もうその上兄に迫つても無駄だと知ると、よろ〳〵倒れかゝつた身體を僅に柵に縋りながら、

「ぢやア兄さん、どうあつても……。」

「己は屑よく刑を受けて、お品の後を追つてくだ。……どうかお母さんを無事に終らしてくろ。それが己の最後の賴みだ。」

「兄さん！」

「お仙！」

「もう時間だぞ。」と、看守の聲。

お仙の決心

お仙は全く失望して監獄から病院まで歸つて來た。母親は只一人病室に寢せられて居て、傍には看護婦もついて居ない。施療患者であるばかりか、病氣の性質もよく知れて居て、別に研究材料になるほどの事もなければ、また患者に附ききつて居る必要もないので、醫員も看護婦もあまりこの病室は見舞はぬらしい。併し看護婦や醫員が附切つて居ないのは、お仙のためには寧ろ望ましい事だつた。

お仙は監獄から歸つて來ると、まづ母の枕頭に寄添つて、母の樣子を覗つた。相變らず、母の知覺が目醒めて來た樣子は少しもない。

「お母さん！　お母さん！　まだ正氣つきませんか。だけどもお母さん、私のいふことをよく聞いて下さい。」と、自分の魂を吹込むやうに母の顏をじッと見詰めながら「今私は兄さんに逢つて來たんです。兄さんに控訴を勸めて來ましたけれども、兄さんはどうしても承知しません。どこまでもお母さんの罪を被て、死刑を受る覺悟で居るんです……。兄さんが控訴しなければ、兄さんはすぐ殺されて了ひます。……だからお母さん、早く癒つて頂戴ね、お母さんが癒らなければ、誰が兄さんを助けるんです。……お母さん、私のいふ事はやつぱり分りませんか。私が分りませんか。分つたら眼で知らして下さい。」

お仙は神を念じながら、一生懸命母の眼を見つめるのであるが、依然として奇蹟も表はれなければ、母の眼に何の印も見えないのだ。

「お母さん、やッぱり分らないんですか。通じないんですか。……あゝ駄目だ！　お母さんは癒らない！　お母さん！　お母さん！」と、悲痛の聲を絞りながら、母の胸に倒れてお仙は泣入るのである。

お仙が泣いて居るところへ靜かに入つて來た看護婦は、その時慌てたやうに顏を擧げて身を引いたお仙を氣の毒さうに見て、

「まだお分りになりますまい。何だかよつぽど難かしさうでございますね。生命を取止めたのが不思議だと申して居る位ですから……。」

「それぢやア迚も口を利くやうにはなりますまいか。」

「先生は難かしいやうに仰しやつて居らつしやいました。」

「もうどうしても癒りますまいか。せめて一時間でも口を利けたら……。」

深い苦痛に襲はれるお仙の様子を見ると、看護婦も憐れに打たれて、

「ほんとにお氣の毒でございますね。お兄さんが死刑の宣告を受けて居らつしやるのに、お母さんがこんなで……。」

看護婦は此事件のやはり女主人公であるお仙に對しての好奇心もあれば、お仙が相知るお信の從妹であるための好意もあつて、少しも侮るやうな様子をせず、親切にもてなしてくれるのが、お仙には頼母しい感じを持たせた。

看護婦はお信からもいろ〳〵話を聞いたためか、吉藏がその眞實の犯人ではないと信じて了つて居るらしく、お仙に向つては、きツと刑の執行日までに、吉藏の救はれるやうな事柄が起るに違ひないと、頻に小説的空想を凝しながら、慰めをいふのであつた。

お仙が母親の枕元に附ききつて、少しでも知覺の曙光が見えたらと、刻々待設けて居る傍へ、この看護婦はちよい〳〵姿を表はしてはお仙の相手になつた。

翌朝お仙は醫員の巡廻を待つて、

「母はもうこのま〻癒らないんでございませうか。せめて口だけでも利けるやうになつてくれたらと思ひますが、夫も見込はありますまいか。どうかハツキリした事を仰しやつて頂きたうございます。」

と、思ひ込んで尋ねて見た。

醫員は只氣の毒さうに、

「麻痺は殆どあらゆる機關に及んで居るから、まづ恢復は難かしいな。知覺は多少取戻せるだらうが、到底口を利く事は覺束ない。それだけは斷言して置かう。」

お仙は最後の絶望を喫しながら、

「それでは迚も口の利ける見込はないんでございますか。」

「まづ無い。」

「いつになつたら母を連れて歸る事が出來るんでございませう。」

「まだ一週間は動かせない。その中出血部の血が固まつて、危險が去ればよいが……今はこの通り知覺喪失といふ重態に陷つて、食物でも何でも咽喉から通せば非常に危險な場合だから、今動かすといふやうな事は絶對に出來ないのだ。」

「さうでございますか。ぢやアまだ七日位はどうする事も出來ないんでございますね。」と、お仙は泣きさうになつた。

醫員が立去るとお仙はフラ〳〵と椅子の上に倒れて顔を蔽うた。四邊が眞闇になつて來る中に、斷

頭臺へ上される兄の姿が見えた。お仙は無意識に手先で幻影を拂ひ退けながら、その兄を助けるのは、今は自分一人になつた事を思つた。そして自分一人が兄のため盡す日の、つひに來つた事を切實に感じた。

最早あてのない母の恢復を待つては居られない。母に口を利く見込がないとすれば、よし知覺が舊に返つて來ても、どうして兄を救ふ事が出來よう。折角最後の法廷で兄を救はうとした母の志は、水の泡になつて了つたのだ。母に潔よく自白させようとした今迄のお仙の苦心は、皆畫餅に歸して了つたのだ。

この上は自分が斷然母の志を行ふ外はない。それは決して母の意に反くのでも母の心を傷けるのでもない。又母を賣るのでも母を裏切るのでもない。……私がさうして母の志を繼ぎ行へば、母は始めて安らかな眠に入る事が出來るのだ。殊に到底恢復する事の出來ぬ重患に陷つて了つた事は、如何なる場合にも母を牢獄の恥辱から救つて呉れるに違ない。……私はさうして兄を救ひ、また母をも救ふのだ。その外に最早私の取る途はない——さうだ、この上徒らに母の恢復を待つて、時機を失する事は出來ない。私は人の子として忍び難いこの使命を果さなければならないのだ！

——さうしてお仙の頭には、母を訴へようとする最後の恐ろしい計畫が浮んだ。

この決意の閃いたお仙は、直にこの事件の裁判長を思ひ出した。公判の最後の日傍聽に來て、その溫厚な風采と、同情のある訊問振を見たお仙は、その時から裁判長に好感情を有つて居た。裁判の結果は何等の同情もない、死刑の宣告に終つたけれども、左りとてお仙の裁判長に對する感情にはあまりの變化は無かつた。自分が今母を訴へようとするには、まづこの人を措いて他になささうに思はれるのだ。

裁判長の名が山田康民である事も、お仙はその時に知つて居た。この人ならば相當の理解と同情を以て、自分のいふ事を聞いてくれさうな氣がした。そして第一この人には恐れ氣もなく愬へる事が出來さうな心持もした。……お仙はさま〴〵に考へて見た上、やはりどうしてもこの人に愬へて見る外ないと決心した。

それには裁判長の邸を知つて置く必要があつた。また出勤と退廷の時間も聞いて置かなければならなかつた。……が朝の出勤前には無論逢つてくれる餘裕もあるまいし、またそれだけの短い時間では、要點を摘んで話すさへ難かしいのだ。つまり退廷後尋ねて行く外ないが、普通の官署の通り四時の退廷とすれば、程なくもう暗くなる、さうすれば夜分に尋ねる外ないかも知れぬ。夜分に逢つてくれるかどうか、また被告に關係のものに私宅で逢つてくれるかどうか、それも疑はれるが、併しこち

らはどんな事をしても逢つて貰はなければならないのだ。

お仙には誰にも尋ねて見る人がなかつたので、午後病院を出ると裁判所まで出かけて行き、そこで受附から康民の住所と、退廷の普通の時間を聽取つて歸つて來たが、その途々明後日が日曜日なので、夜分行くよりは或はその日に尋ねて行くがよからうと思案をしても見た。

お仙は病院へ歸つて來ても、たゞその事ばかりに考へ耽つた。

土手の福

千葉監獄の門を、汚ない乞食が入つて行つたと思つたのは土手の福だつた。彼は受附の前へ表れると、

「己、四五日前死刑の言渡しを受けた田淵吉藏に逢ひに來たゞが、逢はして貰へべえか。」

受附はじろ〳〵福の蓬のやうな頭から、足の爪先までを見下して、

「お前は全體何ものだ。」

「己け。土手の福といふ吉藏の友達だよ。」

「土手の福？」と、受附はモ一遍福を見返したが、だん〴〵顏色を柔らげて、

「お前が土手の福か、一寸待つてろ。」

土手の福はこゝまでも有名になつて居るのだつた。少くもこの受附には有名であつたらしい。彼は福を待たして置いて、引込んで行つたが、程なく出て來ると、

「逢はしてやるから面會人控所の方へ廻つて行け。」

福は控所へ來て暫らく待つて居る中、やがて面會所へ導かれた。

看守に引立てられて吉藏が面會所へ入つて來た刹那、互に顏を見合つた二人の眼には、思はず涙が湧いた。

「おゝ、吉つァん、えれえ事になつたな。」

「福、よく尋ねてくれたな。もうお前に逢ふのもこれきりだ。」

「なァに、また逢ふだよ。……己、お前に逢ひにわざ〳〵かうして千葉さ來たゞよ。お仙さんが病院に居るちうから逢ふべえと思つて、二時間ばかり病院の前に居たゞが、顏も出さなければ、出ても來ねえだから、まづお前とこへ來たゞよ。まさかこの風で病院へも尋ねていけねえだかんな。」

「さうけ。……お仙も可愛さうな女よ。己がお處刑になつたらどうするだか……。」

「なァに、お前はお處刑になんねえだよ。……吉つァん、若旦那とお仙さんがお前に控訴を勸めても聞かなかつたさうだな。もう今日で日限が切れるでねえか、どうしても控訴しねえと極めたのけ。」

「己、控訴なんぞしねえだよ。」

「さうけ、しなければしなくてもいゝだよ。たゞお處刑までに助かればいゝだ。……だがお母さんが卒中では始末にいけねえだな。定めてお仙さんが一人で氣を揉んでるだんべえ。」

福は看守が傍に居るので當惑の樣子だつたが、思案しながら詞を次いで、

「吉つァん、不思議な事があるもんでねえか。昨夜聖天樣が己の夢枕に立つてなィ、森の五郎助が——梟がよ、三本杉の丑の時まゐりから何もかも見て居るだ、お品さんの死骸が牧場の納家へ運ばれる時も、死骸を守つて傍について飛んでたゞから、五郎助が證人に出れば何もかも一遍に分つちまふだ、今は五郎助が出る時だ、早く出ろ〳〵と聖天樣が仰しやると思ふと夢が覺めたゞよ。己、何の事だか知ンねえだが、森の五郎助が何もかも知つてるなら、どの五郎助か知ンねえけんど、一羽捕まいてつて警察さ突出すべえと思ふだ……。己、それで斷りに來たゞよ。」

吉藏は面色を變へて、

「福、お前の志は嬉しいが、どうかその五郎助は放つといてくろ。己、もう覺悟してるだから……。」

「だけんどなイ、吉つァん、己、聖天樣のお告の通りにしべえと思ふだよ。犯人もそれを願つてるらしいでねえか。己、たしかにさう思ふだ。……お仙さんには出來なかんべえから、五郎助が出ればいゝだよ。畜生の事だから、お前、何をしようと放つといたらいゝでねえか。」

「己を殺すつもりなら五郎助を出すがいゝだ。己、そんな事して助かつたら生きてねえだからさう思つてくろ。」と、吉藏は或決心を見せて怨むやうに福を睨めた。

福は吉藏の眼に射られると、思はず身震ひが出たが、

「だけんどお前を殺して了へば世の中は闇だ。……それでお前の孝行にはなんねえだぞ。お母さんが快くなつて、それを聞いたら、やつぱり生きては居なかんべえ。」

吉藏は俯むいたが返事がなかつた。

看守が腕時計を見て口を入れる。

「もう時間だぞ。一分過ぎて居る。」

「五郎助を出せは、お前と己絶交だ。」と、吉藏は顏を擧げて云つた。

「さうけ、それぢやア出す譯にはいかねえだな。……併し吉つアん、お前はどんな事しても助けずに置かねえだよ。」

「これ時間だといふに！」

「ぢやア吉つアん、また逢ふだ。先は長えだから……。」

「いや、これが長の訣だ。……福、決して餘計な事してくれるな。」

福は本意なく吉藏に別れて了つた。やがて監獄の門を出ようとする時、向ふから松葉杖に縋つて歩いて來るお仙とバツタリ行逢つた。

「やア、お仙さんけ。いゝところで逢つたな。己、今吉つアんに逢つて來たとこだよ。」

「まア、福！」

喜びと恐れと相半ばした不思議な感じが、今お仙の胸を捕へた。

「己、吉つアんとお前に逢ひに出て來たゞよ。お前、これから吉つアんに逢ふだな。……逢つて來うよ、己、こゝらに待つてツから……。」

「いゝえ、兄さんに逢ひに來たんだけども、まづお前に樣子を聞いてからにするわ。まだ時間は早いから……。」

「さうけ。……ぢやア暫らくお前と話すべえ。どつか暖いところがあるといいだな。」

福はお仙を導いて、監獄の横手の日當りのいゝ煉瓦塀のところへ出ると、

「どれ、こゝらで話すとしべえ。己なイ、吉つアんよりもお前に先に逢ふべえと思つて、さつき二時聞ばかり、病院の前に立つて居たゞ。」

「あら、さうだつたの。……でもお前が來て居るとはちつとも知らなかつたから……。いつ千葉へ來たの？」

「今朝來たゞよ。」

「ビヤボンでも鳴してくれたら、出て見るのに……。」
「ビヤボンをうつかり忘れて來たゞよ。……看護婦でも出て來たら言傳しべえと思つて居ただが、生憎の時には看護婦も出て來ねえだ。仕方がねえから後で寄らうと思つて、先へ監獄さ來たゞよ。……併しこゝで逢つて善かつたな。お前、お母さんが飛んだ事になつちまつたでねえか。」
「えゝ、飛んだ事が出來たのよ。お母さんは折角何もかも云つて了はうとして、卒倒したらしいのよ。」
「ウム、さうらしいな。……何だか迚も癒りさうもねえでねえか。癒つても口が利けねえでは仕方があんめえ。已、若旦那にお前の手紙を見せて貰つて來たゞよ。」
「えゝ、迚も難かしいかも知れないの……。だけどもまだほんとのところは分らないわ。四五日立たなければ……。」
「そこで相談だが、お仙さん、もういよ〳〵五郎助を出すより仕方がなかんべえ。吉つアんが控訴しねえだから……。」
「私、今日はモ一度勸めて見ようと思つて來たのよ、」
「迚も駄目なこつた。吉つアんはすつかり覺悟を極めてるだよ。」

福は吉藏との會見の模樣を一々語つて聞かせた。
お仙も兄が控訴を承知しようと思つて來た譯では無かつた。併しモ一度兄に逢つて勸めて見るだけは勸めて見、母の容態も話して聞かせた上、場合によつては、自分の最後の決意をも仄めかして置かうと思つて來たのだ。
「ちやア兄さんは迚も控訴を承知しさうもないわね。」
「吉つアんが控訴しねえ上に、お母さんの癒るあてがねえだから、ぐづ〳〵して居たら、吉つアんの生命がねえでねえか。今が覺悟の仕時だぞ。お仙さん。」
「えゝ……それは覺悟をして居るわ。」
「どう覺悟してるだね。」
お仙は默つて了つた。何だか自分の決心を福に云つて了ひたく無かつた。
「併しお前ではお母さんの事だから、云ひつらかんべえ。已が出れば一遍に事が片づくだと思つて來たゞよ。」
「福、一寸待つておくれ。」と、お仙は今更驚いたやうに福の顏を見上げた。
土手の福が母を訴へるとして、自分が知らない顏をして居れば、それは何よりも兄を救ふ捷徑で、

また自分に責任もなく、一番世話のない事かも知れぬ。けれどもお仙はどうしても福にそれをさせたくなかつた。福に母を訴へさせるといふそんな卑怯な、狡い事は斷じて出來ないと思ふのだ。自分から母を訴へて、すべての責任を自分が持ち、兄が首尾よく許された日を待つて潔よく死を以て償なへばいゝのだ。福の力を借りる事は第二段である――と考へたお仙は、詞を次いで、

「福、この事についてはね、どうせ一度お前の手を借りなければなるまいと思ふけれども、私がお前の手を借りに行く迄は、決して自分一人でお母さんを訴へたり何かしないでおくれ。……福が訴へるつもりなら翌日が死刑と極つた日にでも、兄さんを助ける事が出來るぢやアないの……。お母さんだつてほんとのところはまだ癒るとも癒らないとも極らないんだもの……。だから福、まだ早まつたことをしないでおくれ、私の一生の願だから……。」と、涙と共に云つた。

福は腕を拱いて居たが、

「さうけ……それは翌日死刑といふ日でも己ならきツと吉つアんを助けて見せるだよ。……それでは暫らくお前の云ひなりになつて居べえ。その代り己の力が入るときは、いつでも出て來てやるだよ。」

「えゝ、さうしておくれ。私もお母さんが動かせるやうになつたら、すぐ連れて歸るから……。」

「それぢや己、このまゝ歸るとしべえよ。」

お仙は土手の福と分れて監獄に再び兄を尋ねた。兄にまた控訴の事を勸めて見たけれども、それは矢張無效であつた。

兄と妹とが短い時間の間に換した談話の中には次のやうな一節があつた。

「福は聖天山の五郎助を捕めへて證人に出すといふから、己を殺すつもりならさうするがいゝ、そんな事して助かつたら、己、生きて居ねえから、そのつもりで居ろと云つてやつたど。……お前も福にそんな事させたら、もう兄妹でねえだぞ。いゝか。」

「……えゝ、よござんす。私も今、福にさう云つたところなんです。そんな事したら私も決して承知しないつて……。福も得心しましたから、兄さん、安心ますつて下さい。」

さう答へたお仙はもう自分の決意を兄に語る事も仄めかす事も出來なかつた。……自分は自分で兄に内緒で兄を救ふ外に途がないと思ひ定めたのだ。

お仙はまだ知覺を失つて居る母の現狀と、醫者から聞いた容體とを兄に話したゞけで、本意ない別れを告げた。

がつかりして監獄から歸つて來たお仙は、病院へ入ると、そこに自分を待つて居たお信と伯母のお

幾を見出した。お幾はお仙の上が案じられるのと、一度吉藏にも逢ひたく、わざ〳〵千葉へ來たのであつた。

伯母と姪の間にはつきぬ物語があり、盡きぬ涙があつた。監獄へはお仙も案内旁々一緒に連立たうと云つたが、お仙は今行つて來たばかりなのと、足の惡いのにまた出かけるには及ぶまい、お信に案内させるからと伯母がいふので、お仙は行かぬ事とし、時間のきれぬ中にと、伯母はお信と連立つて監獄へ面會に出かけた。伯母と兄の悲しい會見にお仙が立合はずに濟んだのはお仙のためには寧ろ仕合せであつたかも知れない。

夕方お仙はお信方へ呼れる約束なので、時間になると病院を出て行つた。伯母や從兄と姉と暖かい食事を共にし、悲しみの中の樂しい團欒をとつた後、お仙は獨り淋しく病院へ歸つて來た。伯母は明日の朝故郷へ歸る筈なのである。

いよ〳〵日曜日となつた。吉藏の控訴期限は空しく過ぎて了つた。今日はお仙が裁判長に逢つて、一切を告白しようと覺悟した日である。

玄關先

母親お源の容體には何の變化もなく、依然として知覺喪失の狀態を持續して居た。今朝看護婦が滋養灌腸をして行つた後、早く巡回して來た醫員に尋ねて見ると、兎に角順調の經過を取つて居るから、三四日の中には動かし得る狀態になるかも知れぬとの事であつた。併し恢復するにしても、それは要するに知覺の恢復で迚も手足を動かし、口も利けるといふやうにはならぬと云ひ聞かされた。いづれにしてもお仙には絶望で、この上空しく母の恢復を待つて居られぬ事はいよ〳〵明かだつた。

昨夜は今日の事を考へて亢奮して居たため、お仙は殆ど眠られなかつた。今朝になつてもその亢奮は續いて居て、眠くもなければまた疲れをも感じなかつた。日曜日に早く先方へ尋ねて行くのもいかがと、丁度九時ごろ裁判長の宅へ行着けるやうに測つて病院を出ようとしたが、流石に母を訴へるのだと思ふと足が鉛のやうに重いのだ。今迄とても心も亂れ氣も狂はしく、何度この計畫を中止しようとしたかも知れなかつた。……が決して母を賣るのではない、たゞ母の意志を代つて行ふまでだと、自ら道理をつけると同時に、よし母は知覺を失つて居ても、母にはちやんと自分の意志を告げて出な

ければならぬ、自分は母を密告するのではないと、咄嗟に心づくと母の枕元に近づいて、

「お母さん、勘忍して下さい、最早兄さんの控訴の日限は切れて了つたし、お母さんはこの始末で一日でもぐづ〳〵して居れば、兄さんは死刑に處せられるばかりですから、私は兄さんを助けるため今から裁判長を尋ねて、何もかも云つて了ひます。お母さん、あなたも言渡しの日には何もかも云つて了ふつもりだつたんでせう。私はお母さんが兄さんを見殺しにするものと邪推して居て濟みませんでした……。お母さんは折角兄さんを助けるため言渡しの日まで待つて居ながら、肝腎の時にこんな病氣が出て、お母さんの志は無になつて了つたんです。お母さんは斯うと知つたら、どんなに殘念に思ふでせう。だから私がお母さんの代りに、何もかも裁判長に云つて了ひます。……ね、お母さん、それでい〳〵でせう。私はお母さんを裏切するんぢやアありませんね。お母さんはきッと私のした事を許して下さるでせう。よくしたと云つて下さるでせう。……兄さんを助けるためにはさうする外ありません。ひょッとすると兄さんだけは私を許さないかも知れません。だけどもお母さん、あなたは許して下さるでせう。……それでい〳〵んです。兄さんが許さないからつて、私は兄さんを助けずには居られません。……兄さんを助けて了へば私はどんなお詫でもします。この身體一つで濟む事なら、死んでお詫をします。……ね、お母さん、許して頂戴ね。……私は行つてまゐります。」

お仙は次第に亢奮し、はては母の床の上に泣倒れ、暫く顏を埋めて居たが廊下に跫音がしたので、驚きながら我破と身を起した。が跫音はそのまゝ廊下を行過ぎて了つたので、お仙はほッとして涙を拭ひ、また母に寄添つて、

「それぢやアお母さん、行つてまゐります。……勘忍して下さい！」

さう云捨てると思ひ切つて母の病室を出た。

進まぬ足を松葉杖に縋りながら、漸く敎へられたトある士族町へ來ると、その中程に求める家を見出した。黑塗の冠木門に從六位山田康民の標札のかかつて居るのはそれと首肯かれた。

お仙はこゝまで來は來ながらも、何だかまた空恐ろしく、二三度門前を行つたり來たりしたが、これではならぬと僅に心を勵まし、思ひ切つて門を入ると、玄關へ來て、

「御免下さいまし。」

大きくいふつもりでも、つい小さくほか出ないので中へ通ぜぬらしく、暫らく待つて見ても何の返事もない。で思ひ切つて少し聲高に、

「お願ひ申します。……御免下さいまし。」

お仙の聲は震ひを帶びて聞えたが、今度は通じたと見え、ガラリと玄關の障子が開くと、二十二三

の紺飛白を着た書生が表れ、お仙の姿をじろりと見ると、何と思つたか、聲荒く、

「おい、勝手へ廻れ。」

お仙はもじ〳〵しながら、

「いゝえ、私は旦那様にお目にかゝりたくつて、あがつたものでございます。」

「何だ、旦那様にお目にかゝりたい？」と、書生はまたじろ〳〵お仙を睨め廻した。

「はい、是非お目にかゝつて、申上げなければならない事がございまして……。」

「おい〳〵、お前は何だな、先生に無心を言ひに來たんだらう。小娘の癖に何だ。先生はお前なぞに逢つては居られないのだ。歸れ〳〵。」

「いゝえ、決して無心なぞにあがつたものではございません。全く旦那様にお目にかゝらなければならない事がございまして……。」

「先生はお前のやうなものには逢はんと云つてゐるでないか。それに今日は日曜で、會からお出かけになるんだ。さつさと歸れ。」

「お出かけのところを濟みませんでございますけれども、一寸お目にかゝればよろしいんでございます。どうぞお願ひでございますから、お取次下さいまし。容易ならぬ事で上がりましたのでございますから……。」

書生はまたじッとお仙を見て、

「生意氣な口を利く女だな。全體お前は子供か大人か。……容易ならぬ事なら、まづ僕が聞いてやる。何だ。」

「いゝえ、旦那様にお目にかゝつた上でなければ申上げられない大事な事でございます。」

「先生でなければ云へない？　全體貴様は何ものだ。」

「私は田淵吉藏の――今度旦那様のお係で死刑の言渡しを受けました田淵吉藏の妹でございます。」

書生はやゝ驚き顏に三たびお仙を熟視して、

「田淵吉藏の妹だ？……吉藏の妹が何しに來たんだ。兄を許してくれろとでも歎願に來たんだらう。それなら先生のところへ來たつて間違つてるぞ。」

「いゝえ、兄を許して頂きにあがつたのではございません、犯人の事について、容易ならぬ事を申上げにまゐつたのでございます。どうぞお取次下さいまして……。」と、一生懸命に云つた。

書生は不信の眼を光らせて、

「いや、それはいかん。よくこれまでも被告の家族がいろ〳〵の事を云つて來るが、先生はお取上が

ないのだ。被告の家族とは私宅で一切逢はん事になつて居るから……。」

お仙はハツと胸を突かれて、

「それではお役所ならば、旦那様にお目にかゝれるのでございますか。」

「裁判所ではなほ逢はん。……いゝ加減に歸るがよからう。」

「でも一度だけどうぞお取次を……お目にかゝれないと、ほんとに大變でございますから、全くほんとの犯人を申上げにまゐつたんでございます。」

お仙が一生懸命なので書生も手古摺つたらしく、

「何だ、ほんとの犯人をいふ？……それなら僕が取次いでやるから云つて見ろ。」

「いゝえ、旦那様でなければ申上げられません。」

「困つた奴だな。……先生は今お出かけなのだ。」

途端に玄關まで空俥を挽込んで來た俥夫が、

「お俥がまゐりました。」

「それ見ろ、今お出かけなんだ。」と、書生は云つたが、お仙の絶望に打たれた樣子がいくらか氣の毒になり、「併し一寸待て、先生に取次いで見てやるから……。」

書生は急がはしく入つて行つたが、すぐ出て來て、

「やつぱりいかん。犯人の事で申立てるなら警察へ行けと仰しやるんだ。……さア歸れ。」

「それではお逢ひ下さらないんでございますね。」と、お仙は聲を震はせ、血の氣もなく蒼ざめてそこに佇んだ。

「犯人が分つたのなら警察に行つたらよからう。今先生がお出ましになるから、こゝに居つては邪魔だ。」

「はい……。」と、云つたがお仙は立去りかねて居た。何だか康民が玄關へ出て來るのを待つて直接に愬へたいやうな氣がした。

「これ、歸れと云つたら歸らんか。」

お仙は書生が叩き出しも仕兼まじき權幕に、

「はい、……どうもお邪魔を致しました。」と、すご〳〵玄關を離れて門を出た。門を出ながら去りも得やらず、悄然と佇んで居るところへ、護謨輪の俥が靜かに門を出て來た。主人公の康民はそこに臆病らしく涙一杯ためて自分を見上げるお仙を見ると、一種の哀れに打たれ、言葉をかけたいやうな氣になつたが、その間に俥は委細構はず過去つて了つた。

お仙は怨めしげにやゝ暫し俥の後を見送つて居たが、軈てとぼ〳〵と歩き出した。裁判長が自分に逢つてくれない事を思ふと折角張詰めた心も折れ、もう何もかもすべてが絶望に終つたやうな氣がするのだ。犯人が知れたのなら、警察へ訴へろと云はれた事は道理のある事ながら、自分は冷たい警察署で一切の事を告白したくはない。同情のある裁判長に親しく愬へようとした企てが、一空に歸したとすると、自分の行手にはたゞ暗黑があるばかりだ。このまゝ門前に康民の歸りを待つて居て、モ一度懇願して見ようか。……それとも斷念して警察へ行かなければならないだらうか。お仙はとつおいつ思案しながら、歩みを運んで居る中、いつか士族町を離れて、知らぬ町の辻に來て居た。

思案に迷つたお仙が殆んどわが身の町中にある事をも忘れ、うつかり立留つてなほ考へて居るところへ、突然自動車の喇叭の音が耳元に起つたので、お仙は始めてわれに返り、慌てゝそれを避けようとする途端、今度は辻の一方から勢ひよく駈けて來た人力車に危ふく觸れようとし、いきなり俥夫に突飛ばされた。

「危ない！」と、俥夫が叫んだ時は、お仙はもう倒れて居る時だつた。そればかりか騎虎の勢、止めようとしても止まらぬ人力車が、倒れたお仙の足を轢いたので、お仙はたまらず、「きやツ！」と、悲鳴の聲を擧げた。

自動車は自分の關係した事ではないと云はぬ計、臭い瓦斯の臭氣を後に殘して過去つて了つた。

「おい、氣をつけろ！　お前が惡いんだ。」と、俥夫が梶棒を止めてお仙を見た時、

「これ、そんな事をいふものではない。ちよつとお待ち……。早く起してあげておくれよ。」と、俥上の人は俥夫をたしなめた。

年のころは二十二三、令嬢か若婦人か、房々とした髪を束髪にし、ショールを襟に卷いて、金紗縮緬のコートを着た、色の白い、姿のすらりとした優しさうな女が、梶棒を下すと同時に俥を下りた。

俥夫がお仙を抱起さうとするところへ、女は近づいて心配さうに、

「どうなの？　お怪我は無かつたかへ。」

「なアに……怪我はしてなささうです。轢いたつて護謨輪ですからね。」

「もし、あなた、どうかなさいましたか。」

俥夫が抱起さうとすると、お仙は苦痛に堪へず、嚙しばつた唇からまたしても悲鳴が漏れる。

女はハラ〳〵して、

「どこか怪我をなすつたのよ。……傷でも出來たんぢやなくつて？」

「なアに、この人は足が惡いんですよ。」

「兎も角、お前俥へ乘せて家までお連れ申しておくれ、私は歩いて附いて行くから……。もしあなた、きつくお痛みなさいますか。宅がつい近所ですからお連れ申します。その上で手當をして差上げますから……。」

お仙は顏をしかめ悚へながら、

「いゝえ、有難うございます。足が惡いところへこんな目に逢つたものですから……。これも災難で致し方がございません。私がぼんやりして居たのが惡かつたんでございます。……御親切に有難う存じますが、獨りで歩けない事もございますまい。」と、丁寧に云つて、少しも人を怨む樣子もなく、自ら身を起さうとしたが、痛みが烈しく、迚もわが身を支へる力はなかつた。

女は見かけと姿に似ぬお仙の物ごし云廻はしに妙に心を惹かれながら、

「いゝえ、あなた、私共の不注意から起つた事です。兎に角宅までお連れ申します。すぐそこですから……。」

お仙も女の親切な詞に動かされながら、

「あの、それでは恐れ入りますが、どうか外の俥を一臺お雇ひ下さいまして、私を醫學校病院までお送りを願ひます。私は病院に看病に來て居るものでございますから……。」

「まア、さうですか。でも病院までは大變です。宅は近所ですから、兎も角も手當をして差上げます。どうぞ遠慮せずにこれへお乘りなすつて……。」

「折角奥樣がさう云つて下さるんだから、お手當をして頂くがいゝぢやアねえか。」

俥夫はさう云つて遠慮して居るお仙を輕々抱上げると、俥の上に乘せて了つた。そして松葉杖を拾ひ上げて傍に差入れ、人だかりを掻分けて進む後から、女は靜かについて行つた。

雪子

伸は辻を折れて一町半ほど後に引返すと、小綺麗な勤人向の家の、標札に松宮としてある家の前に止つた。女は伸を一寸門に待たして置いて、急ぎ足に玄關から家の中へ入つたが、來客と思ひ違へて出て來た廿四五の女中が、

「おや、奥様、何かお忘れものでございますか。」

「いゝえ、お松、さうぢやアないの。途中で私の伸が人を轢いて了つてね。幸に怪我もないやうだけれども、足の惡い人で、歩けないやうにさして了つたからね、今私の伸へ乘せて連れて來たところよ。早く四疊半に床を延べておくれ。すぐ連れて來るから。」

女中は驚いて、

「まア、飛んだことでございましたね。どんな人なんでございます。」

「十六七にもなるだらうかね。柄の小さい跛足の女だよ。」

「さうでございますか。……でもお床を延べてやらなければならないんでございますか。どんな服裝の娘でございます。」

「いゝから床をお延べと云つたら……服裝なんかどうだつていゝぢやないの。」と、口疾く云捨てゝ年若い夫人はまた玄關へ引返した。

門前に駐つて居る伸の傍へ來ると、

「あなた、お待たせ申しました。……伸夫さん、抱へて玄關までお連れ申しておくれ。」

「まア、ほんとに恐れ入りましてございます。」と、お仙は何だか氣の毒でたまらないやうな氣がした。

伸夫が玄關まで抱へて行くと、そこに待受けて居た女中に手傳はせ、夫人はお仙を受取つた上、伸夫には近所のK醫師をすぐ迎へに行くやうに命じて、お仙を四疊半に運び、床の上へ寢せようとした。

お仙はあまり優しく扱はれるので、穴へも入りたいほどに思ひながら、

「どうぞもうお布團などはお退け遊ばして頂きます。たゞお疊の上の方が結構でございます。」

お仙が否むのを無理に布團の上に寢せて、

「今すぐ醫者が來て呉れるだらうと思ひます。お痛みなさるのはお足だけですか。骨でも挫いたんぢ

やア有りますまいね。」

「いゝえ、そんなことはあるまいと存じます。私は僂麻質斯が持病でございまして、この頃は幸ひ快くなつて居たんでございますが、その足を轢かれたもんですから……骨などはどうもなつて居ないやうでございますが、……血も何にも出ては居りません。暫らく休息さして頂けば、落ちついて來るだらうと存じます。」

「まア、それだけで濟めばよござんすけれどもね。……ほんとに飛んだ災難でお氣の毒とも何とも……。」

「いゝえ、それは私の方で申上げることでございます。奥様はどこかへお出かけでいらつしつたんでございませう。ほんとに何とも相濟みません。……私は暫らくこちらで休ませて頂きますから、どうぞ私にはお構ひなく……。」

「そんな遠慮なんかなさらずといゝんです。私は何も今日に限つた用ぢやアないんですから……。それはそうと貴女は千葉の方ですか、それとも……。」

「いゝえ、田舍からまゐつたものでございます。……あの、もう痛みはだんだん落ちつきさうでございますから、奥様、どうぞ私にお構ひなく、お出まし遊ばして……。」

「いゝえ、私、今日は止めます。進まないところなんですから……。それはさうと、まアどうしたのか知ら、お醫者さんが遲いわね。」と、傍に居て先刻から主人とお仙の對話を物珍しさうに聞濟まして居る女中の方を見た。

女中は慌てたやうに、

「さうでございますね。……お迎へに行つてまゐりませう。」

女中が迎へに行く前に、醫者が見舞に來た。お仙の轢れた惡い左の足には別に異狀はなかつた。車輪には太輪の護謨が嵌つて居たので、少しの負傷もなく、普通の人ならば、その時多少の痛を感じた位であつたらうが、平生足がわるく、突飛ばされた時に、既に並々ならぬ痛みを感じた上を、車輪に轢かれたので、お仙の神經には骨を挫いたほどにもこたへたのだ。

芥子湯で溫ためた上、塗藥を塗つて暫らく暖たかくして居れば、程なく苦痛が取れて、そのため僂麻質斯を誘發する事もあるまいと、醫師は二三の指圖をした上歸つて行つた。

この未知の若婦人は甲斐々々しく女中を指揮して芥子湯を作つた上、いよ〳〵氣の毒がるお仙の足を暖め、醫者から屆いた塗藥を塗つて繃帶を施し、またお仙を布團の上に休らへさせた。

お仙は涙一杯眼にためて、夫人のするまゝに任し、小兒のやうになつて居たが、家内がひつソりと

して別に人の氣配もせぬので、夫人がまだ新婚間際で小兒もなく、良人も多分不在なのだらう、その外に姑も何もないたゞ二人きりの家庭らしいと、そんな事を想像した。

お仙が夫人に興味を持つよりも、夫人の方がお仙に興味を持つて居た。手當萬端が濟んで、夫人がたゞ一人お仙の枕元に殘ると、

「あなた、少しは痛が取れましたか。」

「はい、お蔭様でよつぽど薄らいでまゐりました。ほんとに飛んだ御厄介をおかけ申しました上、こんなに御親切にして頂きまして、何とお禮の申上げやうもございません。」、とお仙は鼻をつまらせて云つた。

「いゝえ、お禮など云つて頂いちやア困ります。……あなたは醫學校病院に看病に來ていらつしやるんださうでしたね。それはお身内の方ですか。あなたの歸りが遲いので、嘸心配をしてお居でゞせうね。」

「はい、有難う存じます。看病をして居りますのは母でございますが、重い腦溢血で、何にも分らないやうになつて居るんですから、私は歸つても歸らなくても、同じ事なんでございます。」

「おや、さうですか。」と、夫人は訝かしさうにお仙を見て「腦溢血と云つたら卒中でせう。卒中で入院してらつしやるんですか。」

卒中で入院するといふ事は餘り聞かないと夫人は思つたに違ひない。お仙は此親切な優しい人の前に何を包んで置く事があらう、打明ければ罪人の妹として蔑視まれ、不快の感を持たれるかも知れぬが、それを案じて、身分を僞る場合でないと思ふので、思ひきつて、

「あの、實は何でございます。私はお聞及びでもございませうが、先達中世の中を騷がしました翠紅園の殺人事件で、死刑の宣告を受けました田淵吉藏の妹仙と申すものでございます。」と、臆病らしく打明けて、偷むやうに相手の顏を見た。

若夫人は一方ならず驚いたらしく、可愛らしい眼を大きく睜つて、

「まア、あなたなんですか。」と、じツとお仙を見たが、その眼には少しの嫌惡の色も見えないばかりか、却つて同情の光を宿して居るので、お仙はほツと救はれたやうに思つて溜息を吐いた。そして夫人が自分の名まで記憶して居るらしいのが、何となく賴母しく、

「はい……では私の名まで御存知遊ばして居らしつたんでございますか。」

「えゝ、あなたの名はよく知つて居ます。私はあの事件には取分け心を惹かれて居りました。父が裁判の方の係なものですから……。」

お仙は思はず枕を擧げて、

「え？　お父様が裁判のお係りでいらつしやいますつて？」

「えゝ、父があの事件の裁判長でしたから……。」

お仙の眼は燃ゆるやうに輝いて、

「それでは山田康民様はあなたのお父様で？」と、聲を震はせた。

「えゝ、さうです。私は山田の娘の雪子といふものです。」

「まア、あなたがお嬢様で！……ちッとも存知ませんでした。」と、雪子を見上げたお仙の眼から、熱い涙がハラ〳〵と傳はり落ちた。

雪子は、自分の父を山田康民と聞いて、お仙が恐ろしく亢奮した様子を見ると、安からぬ思ひがした。何だかそれは父を怨んで居るための涙とも見られたのだ。で、じッとお仙の顏を見返すと、

「私、實は只今お父様に是非お目にかゝりたいと存じまして、お邸へ伺つたところなんでございます。」

雪子は驚きながら、

「それで父に逢つてらつしつたの？」

「いゝえ、お目にかゝる事が出來ませんでした。」と、お仙は眼を外した。

「父が逢つてくれなかつたんですか。」

「はい……。それにお出かけのところでございました。……書生さんはお父様が被告人の家族のものには、お宅でお逢ひ下さらないと仰しやいました。」

「さア、一概にそんなこともあるまいと存じますが……。そしてあなたは父にどんな御用だつたんですの？　若し差支のない事なら、私に仰しやつて下さいまし。」

「はい……御親切に有難う存じます。私、申上げられる事だけは申上げたうございます。」と、お仙が身を起さうとするので、

「どうなさいます？」

「でも寢て居て申上げるのは失禮ですから……。」

「あら、そんな遠慮なすつちや困ります、あなたは醫者の手當を受けてかうして寢んでる人ぢやアありませんか。そんな無理をしてまたお足を惡くしたらどうします。もうお話が出來るなら、そのまゝでお話なすつて下さい。失禮でも何でもありませんから……。ですけれどもそのお話が若しか長くなりさうなら、お足の痛みがモ少し落ちついてから伺ひませうか。あなたも暫らく休んだ後の方がいゝ

でせうから。」

「いゝえ、足はそんなに痛みはいたしません。すぐお話をしても大丈夫でございます。ですけれども奥様、あなたは嘸御迷惑でございませうね。」

「いゝえ、あなたがお疲れでなかつたらいつでも伺ひますわ。」

「ぢやア只今申上げさして頂きます。失禮でございますが斯うしたまゝで……。あの今朝お父様をお尋ね申しましたのは、實は兄の吉藏が犯人でなく外にほんとの犯人がございますから、それを申上げる考だつたんでございます。」

雪子は驚き顏に、けれども半ば不信の眼を睜つて、

「あなた、死刑に極つた犯人が、ほんとの犯人でなくて、外に犯人があるといふ事は、大變な事ですよ。……その犯人は分つて居るんですの？」

「はい、分つて居ります。」

お仙の言葉がキツパリとして居るので、雪子は怪しみながら、

「ぢやア名も分つて居ますの？　そしてそれには何か確な證據でも……？」

「はい、名も分つて居ります。現在私はその現場を見て居りました。」

「えッ、あなたは兇行の現場を見てらしつたんですか。」と、雪子はいよ〳〵驚いてお仙を見つめた。

「はい。」

「ですけども豫審の調べでもどこでも、あなたは少しもそんな事云はなかつたぢやア有りませんか。第一兇行の現場を見て居たのなら、なぜ死刑の宣告のあるまで默つてらしつたんです。」

「はい……私は犯人が自首するのを待つて居たんでございます。……どうしても私からは云出したくなかつたもんですから。」

雪子はお仙の顏色を讀むやうにして、

「その犯人はあなたとどういふ關係の方ですの？……まア、大變なことぢやア有りませんか。」

「兄は控訴をせずに罪に服さうとして居ますし、今はどうしても私が兄を救はなければならなくなりましたから、いよ〳〵ほんとの犯人をお父様にだけ申上げようとしたんでございます……。」

お仙がいゝ加減の事を云つてるものとは思はれないので、

「ぢやア父にだけその犯人を打明けようとなすつたんですね。……そしてその事は父には通じたんですの？」

「はい、……書生さんから云つて頂きました。さうすると犯人が知れたのなら、警察へ行くがいゝつ

て……。」

「父が警察へ行けと云つたんですの？」

「はい……書生さんのお言傳でございました。私、その時ほど失望した事はございません。……お嬢様の前で何でございますけれども、私は第一回公判の時傍聽に參りまして、大層思ひやりのある裁判長の訊問振だと存じましたところから、今度もあのお優しさうな裁判長に何もかも打明けて了つたら、きツと同情して聞いて下さるだらうと、そればかりを力にお伺ひして見たんでございます。それに……お逢ひ下さらなかつたばかりか、警察へ行けとのお言葉だつたもんですから……。」と、お仙は次第に泣聲になつて「私、警察へ行くのはどう考へてもいやでございますし、全く途方に暮れて病院に歸らうとする途々……ただその事ばかり考へて歩いて居たもんですから、つい自動車の來たのも知らずに居て、あんな事になつたんでございます。」

「まア、さうですか？」と、雪子は吁息を吐いて「まア、お氣の毒でしたわね。……でも父はあなたがきツといゝ加減の事を云つて來たと思つたに違ひありません。よくいろ〳〵の事を申立てゝ來るものがあるさうですから……。」

「さうかも知れないとも思つて居ります。」

「ぢやア、あなたはほんとに犯人も知つて居れば、兇行の現場も見てらつしつたんですね。」

「はい、たしかに見て居りました。」

きつぱりと答へるお仙の詞に、最早疑を容るゝ餘地がないと思ふので、

「それなら私から父に云つてやりませう。父はきツとあなたに逢つてくれるでせうから……。」

「はい、さうして頂いたらこんな嬉しいことはございません。」と、お仙は嬉し涙を流して感謝するのである。

「今、父が居るかどうか、聞きにやつて見ませう。」

「只今はまだお歸りがございますまい。私がお邸から歸つてまゐります時、お父様はお俥でお出ましになりましたから……。」

「さうですか……まア、都合のわるい……ぢやアいつごろ歸るか、近所の電話を借りて聞かして見ませう。」

すぐ女中を聞かせにやつた結果、康民が二時ごろ迄に歸る筈で出かけたことが分つた。

「ぢやア、それまでこゝに休んで居らつしやい、私は二時前に實家へ行つて父の歸りを待つた上、よく話して賴んで見ることにしますから……。」

「はい、何から何迄有難う存じます。どうぞよろしくお願ひ申します。」

お仙の足の痛は次第に薄らいで行つた。裁判長に逢へることになれば、その足の痛位何でもなかつた。災が轉じて福となつたのだと思ふと、今は却つて自分の災難に感謝しなければならなかつた。

その中すぐ正午の時刻になつて、お仙は食事の馳走をまで受けたが、雪子の優しい心が深く自分の胸に刻まれて行くにつれて、何だか一切の事を打明けて、雪子に聞いて貰ひたいやうな氣がしてならなかつた。母親の事は別問題とするにしても、お品と吉藏と自分と三人の間の事柄だけで、雪子に話して見たい事は山ほどあつた。また一通り兄とお品との關係を話して、兄が決してお品を殺す男でないとの信念を、雪子に形作らせることも是非必要だと考へたのだ。

でお仙は雪子が父を實家へ尋ねる前に、吉藏を中心とし、自分とお品をそれへ絡ませた、涙の多い數多のローマンスを雪子に語り聞かせた。そしてそれは多感な性質の雪子の心を動かすには十分であつた。

雪子が父に逢ふべくわが家を立出でた時には、もう吉藏やお仙の無二の味方であつた。

お仙の告白

雪子はお仙の話を聞いた上、お仙をわが家へ殘してすぐ實家を訪づれた。父がまだ歸つて居なかつたので、母に概略の事を語つて聞かせたが、母は自分のやうに容易にお仙を信じなかつた。

「お前は人が好いから、そんな事を云つて欺されるんぢやアないかへ。今日までも犯人を云はないで居るなんて、そんな馬鹿な事があるものぢやアないよ、肝腎の本人がもう罪に服してるんぢやアないかね。」

「それにはよつぽど事情がありさうなんですよ。私は欺されてるんぢやアないと信じますの。話がよく辻褄が合つてますし、なか〳〵兄思ひの感心な女ですもの……。人を欺すやうな性質の悪い娘ぢやアないわ。」

「性質の悪い娘でなくつてもさ、たつた一人の兄が死刑に處せられるといふ場合だもの、後先見ずにどんな事を云出すかも知れない。よくさういふ例があるのだよ。……うか〳〵お父さんにお取次したつてお取上があるものかね、第一そんなものにはお逢ひなさらないやうになつて居るから……。」

「でもそれは場合によるでせう。今度は實際ほんとのやうですし、事情を聞いて見ると、いかにも可愛相なんですもの……。」

「でもお前、犯人の名も云はないのが怪しいぢやアないか。」

「だからそれをお父さんに申上げるつもりで居るんぢやありませんか。またそれは實際他人には滅多に云はれない事でせう。……お母さん、これが若し眞實だとして御覽なさい。全く大變ぢやア有りませんか。そしてこれが外から知れでもして來たら、お父さんの落度にならないと限らない事でせう。」

母は考へて、

「それもさうだね……。ぢやアお父さんにお話して見るもよからう。何と仰しやるか知らないが……。」

雪子が待ちくたびれて居る中に、漸く父の康民が歸つて來た。

雪子は父が衣服を改めるのを待つて、

「お父さん、私は折入つてお願があつて、先刻からお待して居たんでございます。」

「なに、折入つて己に願がある？……云つて見い。」

「はい、外の事ぢやアないんですか、今朝お出かけにお目にかゝりたいと申してまゐつたものがございましたらう。」

「出がけに己に逢ひに來たもの？……そんなものはないが、尤も死刑囚の妹とかいふものが尋ねて來たさうだが……。」

「えゝ、それなんですの。……足が惡くて松葉杖に縋つて歩いてる娘なんです。」

「今朝門前で己の俥を見送つて居たのが、その娘だ。……それでは己が逢はんので、お前を尋ねて賴みに行つたものと見える。なか〳〵考へてるには驚くな。」

「いゝえ、お父さん、さうぢやアないのよ。實はあの娘のために飛んだ災難が起つたんですの。今朝ね、あの娘がお父さんに斷られたので、途方に暮れながら、學校の先の八百屋の辻へ來かゝつた時、後方から不意に自動車が來たので、びつくりして飛退くところへ、生憎ですわね。今度は私の乘つて居た俥が、あの娘を倒してその惡い足を轢いて了つたんですの。」

「何だと、お前の俥があの娘の足を轢いた。そりやア飛んだ事だつたな。そして怪我でもさしたのか。」

「えゝ、一時ほんとに喫驚しましたが、幸に護謨輪で轢いたんですから、別に怪我も無かつたんですけれども、何しろ傴麻質斯で足の惡い娘なんでせう。よつぽど痛がひどいらしく歩く事も何にも出來な

いんです。それで氣の毒ですから、私の俥へ乘せて家へ連れて來ましてね、お醫者を呼んで手當をして貰つたり、何かして、まづ大した事もなく、痛みも收まつた樣子ですから、その方は安心ですの。」

「併しお前もそりやア飛んだ災難だつたな。まづそれだけで濟めば結構だ。怪我でもさしたらどんな云ひがゝりを受けまいものでもないからな。」

「いゝえ、そんな云ひがゝりをするやうな人とは違ひますの、そりやアほんとに氣の毒な、感心な娘ですよ。いろ〳〵話して見たり、今度の事件の事情などを聞きましたが、何だか新聞で見たのとは大變な違ひですわ。」

「それでお前の賴みといふのは、その娘に逢つてくれとでもいふのか。」

「えゝ、さうなんですの。お父さん、あの娘の兄さんは犯人でなくてほんとの犯人が別にあるんださうですよ。それをお父さんに申上げると云つて居るんですから……。」

「さういふ事は今朝も聞いた。女といふものは絕對絕命となると、いゝ加減の事をよくいふものだから、己もいづれそんな事だらうと考へて、今朝は斷つて置いたのだ。一々取上げてゥッかり人に逢つては居られないからな。」

「えゝ、そんなものもあるでせうけれど、あの娘に限つて、そんな事がありさうには思はれません。」

「いや己も今朝出がけで無かつたら逢つて見てもよかつたのだ。門の前で涙ぐみながら己を見送つて居たあの娘を見ると、何だか可哀相な氣がせぬでも無かつた。實はこの事件で吉藏を犯人と極めて了つたけれども、少し腑に落ちぬところはあるのだ。……逢つて見れば事實か嘘か一遍に分るのだから、暇潰しをしたと思つて、一つ逢つてやつてもよい。折角のお前の賴みでもあるから……。」

雪子はぽツとして、父が案外容易く承知してくれた事を喜びながら、

「お父さん、それぢやアお逢ひ下さいますか……。有難うございます。あの娘もどんなにか喜びませう。ぢやアすぐ連れて參りましても構ひませんの！」

「ウム、連れて來るがよい。」

雪子は父の前を辭すると、母に逢つて自分の成功した事を告げ、俥を雇つて貰つて、急ぎお仙を迎れに行つた。

お仙は急がはしく歸つて來た雪子から、康民がすぐ逢つてくれると聞き、望の叶ふ滿足につれ、いよ〳〵母を訴へるのだと思ふと、流石に空恐しく、騷ぐ胸を鎭めながら、雪子に助けられて雇つてくれた俥に乘つた。足の痛は殆ど取れて、松葉杖に縋ればもう歩けるほどになつて居た。

やがて山田方につくと、すぐ父の居室へ通していゝとの事に、雪子はお仙を導き、玄關から父の書

齋へ伴つた。六疊の日本室で、主人の康民は机に向ひ、何か書きものをして居つたが、わが子に連れられておづ〳〵入つて來るお仙を見ると、向直つて言葉を優しく、

「おゝお前か……。此方へ進むがよい。これ、雪、前の方へ坐蒲團を……。」

「さア、あなた、前へお進みなさい。そこぢやアお話が出來ないでせう。」

お仙は遠慮深く少しく進んで、丁寧に手を支へ、

「私は田淵吉藏の妹の仙と申すものでございます。お嬢樣の飛んだ御厄介になりましたばかりか、御無理なお願までも申上げまして……。」

「いや、……聞けばお前は飛んだ災難に逢つたさうだな。もう足の痛みは取れたのか。」

「はい、有難う存じます。いろ〳〵お嬢樣のお宅でお手當を頂きまして、もうすつかり痛みが取れましてございます。ほんとに何とお禮の申しやうもございません。」

「まア、大した怪我がなくなつてよかつたな。さアその布團を敷くがよい。足が惡いのだから遠慮には及ばぬ。」

「さア、あなた、お敷きなさいよ。」と、雪子も勸めた。

お仙は父子が親切にしてくれるので、まづ涙ぐみながら、

「いゝえ、お布團などを頂かなくつても結構でございます、もう痛みは取れましたのですから……。」

「いや、それはいかん、私が布團を敷けと云つたら敷くがよいでは無いか。」

「さア、お父さんがあゝ仰しやるんですからお敷きなさいな。」

「はい……それでは恐れ入りますが、頂戴いたします。」

「雪、それでは早速この娘の話を聞取ることにしよう。」

「さうでございますか。……ぢやアあなた、父に詳しく事情を仰しやいまし何もかもね……。私はお話の濟むまであちらに行つてますから……。」

さう云つて雪子は靜かに書齋を出て行つた。

康民は丸火鉢を前に、身體をねぢ向けて、敷島を一本つけながら、

「さア、それでは聞かうかな、誰も聞くものがないから、何でも話して見るがよい。」

「はい……。」と、お仙は俯むいたが、容易に口を切りかねてもじ〳〵して居た。

「お前の母親は傍聽席で腦溢血を起したまゝ病院へ入つて居るのか。」

「はい、私はその看病にまゐつて居るんでございます。」

「お前も隨分氣の毒な身の上だな。……それでも母親は恢復の見込はあるのか。」

「いゝえ、臀者は難かしいやうに申して居ります。快くなつても口を利けるやうにはならないさうでございます。」

「今はそれでは全く知覺が失くなつたまゝで居るのか。」

「はい、只今は少しも知覺がございません。」

「お前は母親きりで父親がないのだらう。さうすると孤兒になつたも同樣だな。お前自身が獨立の出來ぬ病身なのに、母親もそんなではこの先誰がお前の世話をするのだ。」

お仙は顏を擧げると、きつぱりと、

「兄がございます。」

康民は聞間違へたかのやうな驚愕の表情を浮べて、

「兄がある？　お前には兄が二人あるのか。」

「いゝえ、吉藏がたつた一人の兄でございます。」

「吉藏は死刑の宣告を受けて居るではないか。」

「吉藏は犯人ではございません。外に犯人がございます。」と、お仙は聲を震はした。

康民はそのため少しも動かされた樣子もなく、たゞ冷やかにお仙の樣子を見て居たが、

「犯人が吉藏の外にあるといふ事は容易ならん事だが、お前は證據があつてそれをいふのか。」

「はい、私は現場を見て居ります。」

「さうするとお前は現場を見て居りながら、豫審判事を欺むいて居つたのだな。お前はその晩の事は寢て居つて何も知らぬと云つて居るやうだが……。」

「は……い、私が出過た事をしなくとも、兄が無罪になるか、左なくんばほんとの犯人が名乘つて出るだらうと思つて居ましたから……。」

「さうすると、お前は現場を見て居りながら、その時お品を助けようともしなければ、警告もしなかつた譯だな。」

お仙はどぎまぎしながら、

「私は現場を見て居りましたけれども、どうすることも出來なかつたんでございます。なぜなら第一に私の知つた時はもう遲かつたので、第二に私は……恐ろしさにすぐ氣を失つて了ひましたから……。」

康民はお仙が萬更いゝ加減の事を云つてるものとも思はれないので、始めて一膝乘り出しながら、

「現場を見て居つたのなら兇行の時間を覺えて居るだらう、何時ごろか。」

「はい、七時ごろでございます。」
「七時といふとまだ暮れて間もない頃ではないか。」
「はい、暮れたばかりでございます、お品さんが篠竹を抱へて萱原から家へ歸つて來た時ですから……。」
「お前はお品が篠竹を抱へて翠紅園へ寄つたのを見て居つたといふのだな。」
「いゝえ、……見はしませんが、寢て居てお品さんの聲を聞きました。」と、いくらか曖昧に云つた。
康民はお仙の態度を見免さず、
「聲を聞いただけでは、篠竹を抱へて來た事はわかるまい。」
「は……い、それは……篠竹を抱へて來た事は、私が想像したのでございます。」
「お品の聲を聞いたとすると、誰かと話をした事になるな、話の相手は誰だつた？」
「それは……。」
お仙は蒼青になつて行詰つた。母と答へようとしたその一語が咽喉へ詰つてどうしても出ないのだ。
「誰と話をして居つたのか。」

「はい、あのお品さんの聲だけが聞えて、相手の聲はハツキリ聞えませんでした。」
「それでお前はどうしたのか。」と、康民は靜かに尋ねた。
「すぐにお品さんの話し聲が止んで、お品さんは歸つて行つたやうに思ひましたが、それが間違ひで、暫らくすると何か助けを求めるやうなお品さんの聲が聞えました。」
「どこの方で聞えたのか。」
「納家の方でございます。それで私は何でも常事ではないと思つたもんですから、足の痛も忘れて起出すと、そツと家を拔けて、跣足のまゝ納家の方へ行つて見ました。」
「納家の中へ入つて見たのか。」
「いゝえ……近所まで行つて見たんでございます。」
お仙は話が兎角自分の豫期しない方へ引摺られて行くので、少し狼狽氣味になり、何だか頭が滅茶滅茶になつて行くやうな、恐ろしい不安の氣持に囚はれ出した。
「その日は一面に曇つて居つた闇の晩で、殊に七時と云へば日の短いそのころでは、もうとツぷりと暮れて居る筈だ。……もう、大分暗くなつて居つたらうな。」
お仙は康民がいゝ記憶を持つて居るのに驚きながら、

「はい、暗くなつて居りました。」
「それではお前は納家の中で何を見たのだ。」
「暗くて何にも見えませんでした。その上お品さんの聲ももう聞えませんでしたから、全體何事が納家の中で起つたのだらうと、たまらなく氣がゝりになつて居ります中、程なくお品さんの死骸が納家から運び出されるのを見たんでござります。」
この驚くべき物語を聞いても、康民はすこしも氣乘りのしないやうな、おなじ冷靜な態度をつゞけて、
「それではお前は、お品がどうして殺されたのか、それは見て居た譯ではないな。」
「はい……ですが死骸になつて運び出されるところを見ました。」
お仙が恐ろしく亢奮して居る樣子を見ると、云つて居ることの眞僞は兎に角、犯罪に關聯した何等かの智識を持つて居るやうに思はれるので、康民は內心だん〳〵期待を持ちながら、なほ色にも見せず、
「その夜は黑闇であるのに、お前にはよくそれが分つたな。」
「はい、闇ですけれども、戶外はまだそんなではありませんでした。向ふが隙いて居て、その上いくらか稻村の火事明りがありましたから、輪廓だけはハツキリ見えました。」
「ウム、火事明りで見えた？……それではお前は輪廓だけでそれを知つたのか。」
「はい……。」
「併しお品が殺されて居るのだといふことは、どうして分つたのか。」
「犯人がお品さんを抱へて居ましたが、首がだらりと垂れて、足の方が地べたへ引摺られて居て、どうしても私には死んだ人としか思はれませんでしたから……。」
「犯人もお前は輪廓だけで分つたといふのだな。」
「はい。」
「犯人はお前の知つて居るものか。」
「は……はい。」
「併し犯人は吉藏の仕事着を着て、その上に吉藏の靴を穿いて居るのだ。さうすれば輪廓だけで、吉藏と犯人を區別することは餘程難かしさうに思ふが、お前にはそれが吉藏でないといふ事が、どうして分つたのか。」
「私は兄の姿ならどんな時にも一日見て分ります。」

「ではその時吉藏でないことが一目で分つたのか。」
「はい、分りました。」
「それではその犯人は誰だつたのか。」
「は……それは……。」と、お仙は俯むいたが、唇が痙攣的に震へて、續く言葉が出ないのだ。
「犯人は誰だつたのか。」と、康民は繰返した。併し法延で被告や證人を問詰める時の冷たい口氣はなく、お仙に少しも怖ぢさせまいとする優しい調子だつた。
が、お仙はます〳〵周章たやうに固くなつて、
「は……。」
暫らく間を置いて、
「お前は犯人を私に打明けるために來たのではないか。」
「は……はい。」と、俯むいたお仙の顏は土のやうに蒼かつた。
康民は傍の机の上から雜誌の樣なものを取上げて膝の上にそれを開いた。そして頁を指先で繰りながら、聞いても聞かんでも可といふやうな調子で、
「犯人は誰かな。」

お仙は黙つて了つた。「犯人は母でございます。」と云はうとした詞が、咽喉の底にひツついて了つてどうしても出ないのだ。眼には絶望の光が宿り、身體は震ひをのゝき、唇は乾き、額からはタラタラと油汗が流れた。そして自分を見る母の姿が、幻のやうに浮んだ。
額から目のあたりへかけ、數へきれぬ小皺の寄つた青黄ろい母の顏、自分を小さい時から震ひ上らして居たその恐ろしい眼――が今自分を監視するやうに見て居るのだ。……母は全身痳痺のため、既に恐ろしい罰を受けて、無限の苦痛を包んだ、生きながらの墳墓と何の擇ぶところもない身の上になつて居るではないか。母の身體は最早死骸になつて居るも同樣なのだ。自分は今母の死骸にまで鞭うつやうな事をしなければならないだらうか。
母の姿と同時にお仙は鐵窓の下に呻吟して居る兄の幻影を見た――窶れて見る影もなく衰へ、母の罪を被て屑く死なうと覺悟して居る――あゝ自分にどうして兄を見殺しにすることが出來よう。自分はどんな事をしても兄を救はなければならない。兄の爲に母を犧牲にしなければならない。それは母の意志なのだ。今更何の躊躇するところがあらう。――と思ひ逸る傍から、今まで思出さずに居た獄中の兄の詞が耳元に響き渡る――「己、自分が活きてお母さんを殺す事出來ねえだ。……お母さんを無事に終らしてくれろ、それが己の最後の頼みだ。」「己を殺すつもりなら五郎助を出すがいゝ……お

前も禍にそんな事さしたら、もう兄妹でねえだぞ。」

自分が母を訴へたら、兄は決して自分を許さないだらう……。

が、自分などはどうなつてもいゝのだ。兄に許されても許されなくてもそんな事は問題ではない。自分は兄を助けさへすればいゝのだ。兄を助けることが出來なかつたら、兄を殺すばかりか、同時に母をも殺す事になるのだ、自分は二人を助けなければならない。

「犯人は母でございます。」と、お仙はまた思切つて云はうとしたが、そこにそれを沮む自分自身よりも強い何ものかゞあつた。

恐ろしい混亂に陷つたお仙の頭に、突然或考へが稲妻のやうに走つた。母を訴へ、兄を助けた上で死なうと覺悟して居た自分は、なぜ母を訴へる前に死ぬ事が出來ないだらう。自分の死が母と兄を救へるなら、それほど望ましい、また自分に取つてはそれほど崇高な死はないのだ。

自分は生きて居つてもたゞ人の厄介にばかりなつて居る。全く無用の人間なのだ。人に養はれて行かなければ獨立の出來ない人間なのだ。自分が此上生きて居れば、一生兄の繫累にならなければならない。自分といふ足手纏ひがあれば、兄はよし無罪になつても、此末思ふまゝの活動も出來ないのだ。殊に萬々一兄が許されなかつた場合にどうなるだらう。全身不隨の母と不具の自分とが殘つて、どうして活きて行ける筈があらう。二人はそのまゝ餓死をしなければならないではないか。

自分が死んで、精神的にも物質的にも、母と兄を救ふ事が出來れば、自分には始めてこの世に生れて來た意義があるのだ。自分は無益にこの世に生れては來なかつたのだ。自分の死には始めて光明があり、自分の犧牲には貴い値があるのだ。

さうだ自分は母の罪を引受けて死ねばいゝのだ。

咄嗟にこの考への浮んだお仙は、最早深く思案して見る餘裕もなく、恐ろしい虚僞の自白を試みようとして、決心した顏に康民を見上げた。

康民はお仙を忘れたやうに雜誌に眼をさらして居たが、ふと顏を見合せると、

「どうしたかな。」

「はい、お品さんを殺した犯人は――。」

「誰だな。」

「私でございます。」

「なに、お前だ？」

康民の顏には刹那の感動の色が浮んだが、すぐ肩を聳やかせると、憐れむやうにじッとお仙

を見た。

お仙はひどく激したまゝ、

「はい、私でございます。かうなれば何もかも包まず申上ます。……私でございます。お品さんを殺しましたのは……。なぜ私が今まで默つてたか、その譯が今お分りになりましたでせう。……私は兄さんが證據不十分で許されること〻ばかり思つて居りました。兄さんが許されさへすれば、私は自分から訴へて出るには及ばないと考へて居りました。……私は最後まで待つて居たんでございます。……その兄がとう〳〵許されずに罪に落されて了ひましたので、私はこの上待つて居る事が出來なくなつたんでございます。私が自首して出なければ、兄は死刑に處せられて了ひます。……私はたつた一人の兄を――自分を可愛がつてくれた兄を見殺しにすることは出來ません。……寃罪の兄を助けなければならないと漸く覺悟して、かうして自首にあがつたんでございます。……今までは心が後れて、ほんとの事を申上げかねて居りましたけれども、これが實際の事でございます。……お品さんを殺したのは私です。……どうぞ今から私を牢に入れて、無實の罪に苦しんで居る兄さんを救ひ出して頂きます。……私は人殺しの大罪を犯したのでございます。」

お仙が激昂するほど、康民は靜かに落ちつき拂つて、

「ウム、お前のいふことは丸で小説のやうだな。なか〳〵いゝ趣向だ。……私も決して感動されんとは云はん。併し裁判官といふものは、いくら趣向がよくても小説を取上げることは出來ないのだ。お前は相手を考へて物を云はなければいかん。」

お仙は康民が容易に自分を信じさうもないのを見ると、狼狽氣味で、一生懸命、

「いゝえ、小説でも何でもございません。事實を有のまゝに申上げるんでございます。その晩納家でお品さんを殺しましたのは、全く私に相違ありません。それを始めに他人のやうに申上げて居ましたのは、私の決心が足らなかつたからでございます。……もはや何もかも包まず白白いたします。……私は全くお品さんを殺しました。それに違ひございません。どうぞこのまゝ私を警察へお引渡下さいまして、妹の罪を引受けて居る兄を、一日も早くお救ひを願ひます。全く私がお品さんを殺しましたので……。」

康民は雜誌を膝の上に伏せると、父が子に對するやうな慈愛の態度を取つて、

「これ、よく聞くがよい。お前が兄の罪を引受けて身代りにならうとする、その美しい獻身的の覺悟は、實に見上げたものだ。……併し天下の法規といふものは、お前が美しい覺悟をしたからと云つて、そのためには枉げられぬ。六尺の男もお前のその立派な、犧牲的の決心に

は動かされるだらう。併し法律はそれでは動かされない。法律を動かすに無くて叶はぬものは證據だ。お前がいくら犯人だと自首して出ても、證據がない以上は、兄の代りにお前を罪することは出來ないのだ。身代りになつて兄を救はうとするお前のその覺悟は實に見上げたものだが、兄は天下の法規で罰せられるのだから、これは誰の力でもどうする事も出來ない。お前も强てさういふことを云張つてお上を欺かうとすれば、志は感心な事でも、その行はやはり咎められなければならない。……お前の力ではどうすることも出來ないのだから、屑く諦らめて今日は歸るがよからう。」

お仙はなほ絶望の勇氣を揮ひながら、

「ですけれども犯人が自白するほど確な證據がないではございませんか。……私はお品さんを殺したに相違ございません。憎くて〳〵仕様がないので、お品さんを殺しました。……お品さんを殺したのは私です。兄さんは何にも知りません。何にも知らずに、私の罪を被て恐ろしい死刑の宣告を受けて了つたのです。……どうぞ私を牢に入れて兄さんを助けて頂きます。私は天にも地にも許されない大罪人でございます。どうぞ私を牢に入れて……兄さんを助けて頂きます。」と、お仙は次第に激して、果はそこに泣き伏した。

康民は持餘したやうに、暫らくお仙を泣かして置いたが、やゝあつて、

「さア、私も用のある身體で、いつまでもお前の相手をしても居られぬ。お前には氣の毒だけれども、私はどうすることも出來ぬのだ。斷念めて歸るがよからう。……夫でもたつてお前が犯人だと云張るなら證據を示すがよい。今もいふ通り證據がなければ法律は取合はぬのだから。……」

お仙は僅かに顏を擧げると、

「ですけれども、私がお品さんを殺したに相違ございません。」

「それならば尋ねるが、お前は何のためにお品を殺したのだ。お品を殺さなければならない事情がどこにあるのだ。」

「はい、私はお品さんが憎くて〳〵なりませんでしたから……。」

「なぜお品が憎くてならなかつたのか。」

「はい……。それを申上るには兄と私との事を少しお話申さなければなりません。私が弱い身體ながらも今日まで斯うして育つて來ましたのは、全く兄のためなんでございます。母はちツとも私を可愛がつてくれませんので、私は今日まで兄一人を頼りにして育つてまゐりました。また兄もほんとに私を可愛がつてくれました。小兒の時から私の身の廻りの世話はみんな兄がして居りましたのでございます。私は此の世の中に兄の愛より外は、何にも知らずに育つて來ましたので、兄もまた私の外には

ほんとに可愛がつて居たものは無かつたんでございます。……私はたゞもうそれに滿足して、夢のやうにうか〳〵過して居りますところへ、あのお品さんが弟子入をしてまゐりました。お品さんは優しい好い人でございますけれども敵同志になつて生れて來たとでも申すんでございませう。私は一目見た時からお品さんが憎くて〳〵なりませんでした。それは私はこの通り醜く、不具で人交際も出來ないのにお品さんが美しく、誰にも騷がれるほどの縹緻であつたためにも相違ありません。ですけれども私がお品さんを憎む心は兄さんがお品さんを愛し出してから、自分でも制へることが出來ないほどになつて了ひました。今まで私だけを可愛がつて居た兄は、もう私に構つてくれないやうになり、私を邪魔ものにして、お品さんの傍へばかり行つて居ようとするんでございます。私にはどうしてそれが見て居られませう。私は恐ろしい嫉妬の鬼になつて了ひました。……私はどうかして二人の仲を裂きたいと考へました、元宿の緣切地藏の石の粉を二人に食さして見たこともございますが、何の効能もないんでございます。……それでもう此上はどうしてもお品さんを亡ものにするより外はないと、恐ろしい考へを浮べまして、機會を待つて居ました……さうかうする中に、兇行の晩がまゐりました、稻村の火事で近所のものは大抵その方へ行つて了ひ、家には母が勝手元で働いて居るだけで、園丁の常吉も實家へ歸つて居ります。もう暗くはなつて來て居ますし、私に取つて、こんないゝ機會は全く無かつたんでございます。」

お仙は康民の顏を見ずに俯むきながら云つて居るのであつたが、萬更作り事でもないらしい響があり、さういふ女の嫉妬も決して珍しい例ではないので、康民はお仙の陳述に興味を持始めたらしく、

「それではお前が納家でお品を殺したといふ段取はどうなのか。お品をどうして納家へ連れ出したのか。」

「はい、七時ごろに私が仕事小舍の方へ出て、稻村の火事を見て居るところへ、お品さんが篠竹を抱へて門を入つて來ました。お品さんは兄さんが萱原からすぐ稻村の火事場へ行つた事を家へ知らせに來たので、序に篠竹を私に渡して行つたんでございます。……その時もう暗くはなつて來て居ますし、四邊に誰も居ませんし、今日を置いてお品さんを殺す日はないと、その時に思つたんでございます。」

「ウム、それでどうしたのか。」

「はい……お品さんを殺すにしても、仕事小舍の前では母室に近く、お母さんに知れては大變だと思ひましたから、お品さんを納家へ連れ出しましたので……。」

「どういふ風に納家へ連れ出したのか。」

「私はお品さんに、納家には常吉が急病で寢て居るから、見舞つてやつてくれと申したんでございます。その實常吉は二三日前から親の病氣で實家へ歸つて居たので、それはお品さんも知つてるんでございます。それで常吉は先刻歸つて來たが、急に加減が惡くなつて納家に寢て居るんだと嘘を云ひますと、お品さんはほんとにして、納家の方へ一人で出かけて行きました。それで私は後からそッとついて行つて、不意にお品さんを殺して了つたんでございます。」

「どんな兇器を用ひて、お前はお品を殺したのか。」

「は……。」と、お仙は慌てゝ俯むいた。

「これ、兇器は何を用ひたのか。」

「はい……それは……仕事小舍に鳶口の折れたのがありましたので、それを持つてまゐりました。」

お仙は母がどんなものでお品を殺したのか、今以て判斷がつかないので、多分鳶口のやうなものを打込んだのだらうと、紫山と話し合つた事を思ひ出して、鳶口と答へたのだ。

「なに、鳶口で殺した。鳶口をどうしたのか。」

「お品さんが何にも知らないで、納家へ入つた後から、鳶口を力一杯打込みました。」

康民の緊張して居た顔が、また弛んで來た。

「併し豫審の調書によると、鳶口を打込んだ傷ではない。もつと細い小さなものを打込んだ傷といふ事になつて居る。」

「それでも鳶口を打込んだに相違ございません。」と、お仙は俯むいて云つた。

「よし、それならば鳶口を打込んだでもよい、兇行後その鳶口をどうしたのか。」

「は……い、捨てゝ了ひました。」

「どこへ捨てたのか。」

「夢中になつて居ましたから、どこへ捨てたか、丸で覺えがございません。」

「夢中になつて居たから覺えがない？……さうだらう。兇器はそれでよい、お品の死骸はどうしたのか。」

お仙は臆病らしい顔を擧げると、

「それは御存知の通でございます。牧場の納屋へ持つて行つて隱しました。」

「翠紅園からその牧場まではどの位の距離があるか。」

「はい……五六町でございます。」と、お仙は次第に自分の陳述の破綻を感じながら、なるべく距離を縮めて云つた。

「いや、五六町ではあるまい。十町あまりあるだらう。……假に五六町としてもよい。お前のやうな小柄な、足の惡い女が、自分よりも遙かに大きい女の死骸を、よし一町でも抱へて行く事は困難だらう。それに死骸を萱原の方まで持歩き、小川までも徒渉し、鐵條網も跨ぎ越して、牧場へ運んで居る。それで居て途中は死骸を二三度ほか下して休息して居ないのだ。お前にどうしてそんな事が出來たか。」

お仙はもうしどろもどろになつて了つた。もう迚も康民に信じさせる事は出來ないと思ふと、何とも云知れぬ絶望に打たれながら、

「自分でもどうしてお品さんの死骸が運べたかと不思議でならないんでございます。恐ろしいと思ふ一心に、そんな力が出たのかと存じます。」

康民は極めて物靜かな、情の籠つた調子で、

「恐しい一念に不思議の力が出たのなら出たでもよい。併し吉藏の仕事着はどうしたのか、お前があれを着たら長袴のやうに引摺るだらう。それから靴はどうして穿いたのか、お前の二つの足がゆつくりあの靴には入るだらう。どれ、お前の足を出して見い……。出せまいが。……出さずともよい。もう一切分つて居る。お前はほんとに感心な娘だ。私もお前には泣かされた。泣かされたがまだお前には欺されない。……氣の毒だけれども、お前には斷念めて歸つて貰ふ外はないのだ。」

お仙は血を吐くやうな思ひの、自分の折角の陳述が、反古一枚の値打もなく、滅茶々々になつて了つた事を感ずると、張りつめた氣も一時に弛んで、われ知らずそこへ泣き伏して了つた。

絶望

康民の宅から俥で送られて病院へ歸つて來たお仙は、云知れぬ悔恨を以て今日の出來事を追憶した。

折角雪子の同情を得、情深い康民と相見るの機會を得ながら、自分の淺墓な心から後先も考へず、母の罪を引受けようとしたため、却つて繕ろふ事の出來ぬ破綻を來し、その結果は只雪子の同情に反き、康民を欺むき損ねただけで、兄のため何の利するところもなく終つて了つた。

お仙は自分の虛僞がすべて康民に看破されて了つた時、飜づて極めて自然に一切を自白して了へばよかつたのだと思つた。併しお仙にはその時それが出來なかつた。お仙はたゞ自分の失敗に狼狽して取繕ろふ餘裕を持つて居なかつたばかりか、すぐその場で母を訴へて了はうとする最後の決心を固める氣になれなかつたのだ。ぐづ〳〵して居る中に機會は過去つて了つた。

その時康民はすぐ雪子を呼んで、お仙を病院へ送り屆けさせる事を命じたのだ。お仙は雪子が送つて來ようとするのを斷つて、康民の邸から、俥で一人病院へ歸つて來たのである。

お仙は病院へ歸つて來てから、折角の苦心がすべて水の泡に歸した事をいよいよ痛切に思つた。自分が母の罪を被る事も出來ず、兄を救ふ望は外にいよいよなくなつたとすれば、實際母を訴へる以外に如何なる手段もないことはます〳〵明かである。自分が折角の機會を逸し、雪子の同情を無にし、康民に眞實の告白をなさずに歸つて來た事が何としても悔まれ出した。

此上自分に殘つて居る手段は、空しく母の恢復を待つか、母を訴へるか、二ツに一ツの外はない。……病床の母を顧みれば、昏々として不覺の眠を貪ぼつて居る。母が果して恢復するだらうか、せめて知覺だけでも恢復すればと思ふそれさへも覺束ない。

お仙は今更自分の出處に迷うて、たゞ絶望の溜息を漏すばかりである。

翌日の朝、院長と主治醫とが巡回して來たが、その結果お源の經過がよく、最早明日にも動かして差支ない事を告げられた。それはお仙に多少の希望を持たしたけれども、お源は到底口を利く見込のない事と、いつ再發するかも知れず、今度再發すれば命に係はる事を告げられて、その希望もすぐ打捨てなければならなかつた。

お仙は一日も早く母親を連れて歸らなければならないと思ふので、その日早速紫山に手紙を出して置いた。

母の經過が如何によくても、口を利く見込のない事を、改めて院長から告げられると、お仙はいよいよ母の口から自首させる望みの永遠にない事が確まると共に、今度こそ自分が母を訴へるため一刻も躊躇する場合でない、いよ〳〵最後の日は來たのだといふことを明かに感ずるのだ。……けれども今度はどうして母を訴へればよいだらう？　再び雪子にも賴みにくければ、康民に逢つて、今度こそ眞實を告白するのだとはどうして云出せよう。また康民がそれを信じて自分に快よく逢つてくれようとは思はれない。……つまり康民に逢ふ望みは絶えて了つたのだ。

康民に逢へなければ、警察へ訴へ出る外途がないであらうか？

忽ちお仙の頭に浮んだのはM檢事の事である。お仙は同檢事が極力吉藏の罪を主張し、その主張の通つた事を知つて居るが、併しそれも職權の爲で吉藏に對する個人として何等の憎惡のない事はよく了解して居る。……のみならず兇行の翌日翠紅園でお仙を調べたのはM檢事で、檢事がこの時お仙に同情を持ち、優しい訊問をしてくれた事は、お仙の忘れ得ぬところであつた。

お仙はどう考へて見ても、M檢事に訴へるより外、自分の得心し得る何等の方法も無かつた。明日は紫山が出て來るのを待つて、いよ〳〵母を鄕里に連れ歸るのだとすると、自分が檢事を尋ね得る日は今日の外ないのだ。——さう思ふとお仙は最早時機を失する事は出來なかつた。今日の退廳の時間を待つて是非とも檢事に逢はうと決心した。

お仙は前にM檢事の宅を聞いて置いたので、四時前に病院を出ると、その町へ出かけた。すぐに知れたので、向ひ側の日當のよい板塀に身體をもたせながら、檢事の歸宅を待つて居た。近所の子供等が往來に線を引いて遊んで居るので、お仙はそれを見て居るやうに紛らして居た。

四時に退けて歸つて來るならば、もうその刻限と思はれるが、ひよツと係りの事件でも長びくやうな事があつて、遲くなりはせぬかと、案じながら心配して待つて居る中、向ふの辻から鬚を生やした洋服出立の人が表はれて來た。お仙はそれがM檢事に違ひないと感じたので、今度は檢事方の門前に位置を換へて待構へて居た。

だん〳〵近づいて來る姿は、紛れもないその人であつた。やがて何心なく門前まで來て、檢事はふとそこに立つて居るお仙と顏を見合はした。お仙が丁寧に會釋したので、檢事は立留つと不思議さうにモ一度お仙を見たが、

「おゝ、お前は……。」と、檢事の顏には、思ひ出した色が浮んだ。

「はい、私は田淵吉藏の妹でございます。……是非お目にかゝりたいと存じまして、厚かましうございますけれど、かうしてお歸りをお待申して居りました。お暇は取らせませんでございますから、一

寸お逢ひ下さる譯にはまゐりませんでございませうか。」

檢事は何か點頭きながら、

「なに己に逢ひたくつて待つて居た。……己は人と夕飯を食ふ筈になつて居て、ゆつくり話は聞けぬが、五分か十分で濟むことなら逢つてやらう。入るがいゝ。」

檢事も案外いやな顏をせず、容易に逢つてくれるといふので、お仙は少からず滿足しながら、主人について門を入つた。

出迎に出た女中に命じて、檢事はお仙を玄關に隣つた應接室へ導かせた。そこは日本室を折衷風にしたので、卓子と數脚の椅子が置いてあり、床には緞通が敷かれてあつた。そこへ通されたお仙は、遑に胸を騷がせながら待つて居ると、程なく檢事は洋服姿のまゝそこに表れた。

お仙は立上つて改めて會釋した上、

「早速お逢ひ下さいまして、ほんとに有難う存じます。」

「今もいふ通り己はこれから人と會食する事になつて居るから、ゆつくりは逢つて居られぬ。」と、懷中時計を出して見ながら「まだ十分間位はお前の話を聞けるだらう。併しどんな用向で來たのだ。己は今日山田からお前の話を聞いて居る。何か兄の罪を引受けようとしたさうだな。山田はお前に感心をして居つた。己に逢ひに來たのもその事ではないか。」

お仙はハツと思つて俯いた。どうせ知れる事とは思つて居たけれども、昨日康民に逢つた事が、もう檢事に知れて居たかと思ふと少し面食つた。知れて居ない方が大變に都合がよかつたので、檢事に話をするにも、知れて居ると大變にし難くなる。裁判長を欺した云譯までした上で話に取かゝらなければならないかと思ふと、云ひ出さぬ先から鋒先を挫かれたやうな氣がした。

「あの、それではもう山田様からお聞になつたのでございますか。」と、お仙は失望しながら相手の顏色を窺つた。

「ウム、聞いたよ。いや全く感心だ。己も山田と同感だよ。」

「……でも若しあなたが事實を御存知になりましたら……。」

「いや、すツかり知つてるよ。山田から聞いたから……。併し何だらうな、己にも同じ事を云ひに來たんぢやアあるまいな。」

「はい、さうではございません。全く違ひましたことを……。」

「違つたことか、それなら聞いてやらう。お前もあんな大罪を犯すやうな兄を持つて飛んだ苦勞をするな。もう兄の事は見限るがいゝぞ。」

「いゝえ、兄は決してそんな大罪を犯すやうな恐しい男ではございません。」
「これ〳〵」と、檢事は不快な顏を見せ「お前はやつぱり己のところへもそれを云ひに來たのか。」
「でございますけれども、お品さんを殺したのは決して兄ではございません。」
「加害者はお前だといふのだらう。」
「いゝえ、さうではございません。昨日は全く淺墓な心から、私が犯人の身代りになれるものならと、ふと出來心であんな事を山田樣に申上げまして、何とも申譯がございません。……ですけれども犯人は全く外にあるのでございます、今日はほんとの犯人の事を申上げたいと存じまして……。」
「ほんとの犯人の事をいふ？……また小說ではないか。山田は昨日お前に小說としては實にいゝ趣向だと云つたさうだが、また己に小說を持込むのではないか。」
「いゝえ、今日はほんとの事を申上げるんでございます。私はほんとの犯人を存じて居りながら、なぜ山田樣にそれを申上げずに僞を申上げたかと、全く後悔して居りますので……。實はお詫旁山田樣をモ一度お尋ねしようかと考へたんでございますけれども、迚もお逢ひ下さらないと存じまして……。」
「それで己に逢つて云はうといふのはどんな事か、手ッ取早いがいゝぞ。」
「はい、申上げます。……ですけれども、私の申上げます事は、全く意外の事ですから容易にお信じ下さるまいかと、それがまた案じられます。……それを申上げるまでにはよく〳〵決心いたしましたので……。ほんとの犯人を知つて居るのは、私と兄とだけなのでございます。」
「なに、お前の兄も犯人を知つて居る？」と、笑ひながら「犯人を知つて居るのに、その犯人を云はずに罪に落される馬鹿ものは、どこにも無い筈ぢやアないか。」
「いゝえ、それは兄には申されないんでございます、なぜなら……。」
「犯人はわが妹だからといふのだらう。」
「いゝえ、さうではございません。」
「それでは誰だ。」
「はい、それは……お母さんでございます！」
「なに、お母さんだ！」と、檢事は呆氣に取られてお仙を見たが、俄に惡感を催したやうに「お前が兄を救ふために、自分から加害者と名乘つて出たのは、それは如何にも見上げた立派な事だ、崇高な犧牲的精神の發露で法律こそそれを受けることは出來なかつたが、道義の方面から見れば、お前は全く人を感動させるに十分な行をしたのだ。お前はそのためどれだけ器量を上げたか知れんのだが、今日はまたどうした事だ。如何にお前の目的が達せられなかつたためとは云へ、わが母に罪を被せると

は何事か。折角の昨日の壯烈の覺悟や行爲は、全く打壞されて了ふではないか。山田が聞いたら何といふだらう。お前は自分で淺ましいとは思はんのか。お前には道義の觀念といふものがないのか。母を訴へるといふやうな事は極重惡人の始めてする事だぞ。」

お仙は聲を震はせて、

「はい、それはよく存じて居ります。ですけれども私は決して母に罪を被せるのではございません。恐しい事實を有のまゝに申上げるんでございます。母の事なので、今までは存じて居ても訴へる事が出來なかつたんでございます。ですけれども兄を救ふためには、最早母を訴へる外に手段がないと存じまして……。」

「それでは兄を救ふ手段に母を訴へるのだな。全體お前は母と兄とどちらが大事と思つて居るか。」

と、檢事は聲を勵ました。

お仙はハツと氣後れして、

「はい、それは……。」

「兄の方がお前には大事か。」

「さうではございませんけれども……。」

「母は死刑に處せられても、兄が助かればそれでいゝと、お前は思つて居るのだな。」

お仙はおろ〳〵しながら、

「いゝえ、さうではございませんが、母は實際の犯人でございますし、それに腦溢血で重體に陷つて居りまして……。」

「そんな重體の母親で、いつ死ぬか分らぬ位ならば、尙更その短い間に孝養を盡さうと考へなければならんではないか。……はゝア何だな、どうせ死ぬ母ならば、母に罪を着せても仔細あるまいと、お前は斯う判斷したのだな。」

お仙は餘りに慘酷な邪推だと思ふと、云知れぬ苦痛と物悲しさに襲はれながら、

「それではあなたには、私をお信じなさらないんでございますか。」

「山田が信じなかつた通り、己もお前を信ずる事は出來ない。己はもうそんな話をいつまでも聞いて居られんのだ。」と、檢事は時計を取出して見た。

お仙の顏には恐ろしい絕望の色が浮んで、

「ですけれども實際母が犯人であつたに相違ございません。兄も母が犯人だと知つたために、一切辯解をせずに、母の罪を引受けようと覺悟して了つたんでございます。兄がその爲にどれほど苦しんで

居るか、どんなに煩悶して居るか、それを知つて居るのは私の外にはございません。母も言渡しの日には、自分から名乗つて出るつもりで、傍聽にまゐつたんでございます。言渡しのあつた時に、母がわれを忘れて、犯人は外にあると申した事を、あなたもお聞きになつた事と存じます。それは自分が犯人だと名乗つて出ようとしたんでございます。母はそれを名乗りきらない中に、腦溢血で卒倒して了ひまして、兄はとう〳〵そのまゝ無實の罪を受ける事になつて了ひました。私は此上は自分が母に代つて、兄を救ふ外ないと存じまして、恐ろしい事とは知りながら、母を訴へ出ましたのでございます。」

檢事は驚き顏にお仙を見つめたが、

「お前は實際驚くべき事を想像する女だな。母親が名乗つて出るつもりだといふことがどうして分つたのか。」

「それは私に想像が出來ます。」

「お前は何でも想像で行くんだな。母親の犯罪もお前が想像ででッち上げたに相違あるまい。」

「いゝえ、私は兇行の現場を見て居たんでございます。」

「お前が見て居たといふだけでは何の證據にもならんぞ。」

「見て居たのでは證據にならないんでございますか。」と、お仙は悲痛の聲を絞つて云つた。

「さういふ譯ではない。それがわれ〳〵の心證を覆へすに足るだけの合理的の陳述であつて、また今まで提供されたものよりも更に有力な證據物件か、或はそれを否定するに足るだけの反證が擧がらぬ以上は、誰もお前の詞を信ずることが出來ないのだ。」

「それでは見て居ただけでは證據にならないんでございますね。」と、お仙は土手の禍の事を絶望的に考へながらまた尋ねた。

「證據にはならん。……第一お前の母親がお品を殺す理由が無いではないか。」

「お母さんはお品さんを憎んで居ました。」

「なぜ憎んで居たか。」

「それは……嫉妬のためだらうと存じます。」

「息子の戀女に嫉妬をしたといふのだな。それは嫉妬といふ事はあるかも知れんが、女を殺すといふやうな事が常識で考へて有得ると思ふか。お前の母親がお品を殺したとして、只嫉妬のためといふだけでは解釋が出來んではないか。」

お仙が疾に答へ兼ねて居ると、

「嫁に對して嫉妬をする姑はよくあるが、まだそれ迄の關係になつて居らんではないか。殊にお前の母親は慾にかけては拔目のない方で、お品には一町歩あまりの土地の外に、三千圓といふ持參金がついて居るのだから、大抵の嫉妬ならば制へて嫁にする筈だらう。嫁にした上ならば或はどんな事をせんとも限らぬ。けれども如何に嫉妬のためとは云へ、今の中に殺して了つて元も子もなくすといふ、そんな馬鹿な事をする筈がないではないか。」

「はい、……それは私にもお母さんの心持は分らないんでございます。ですけれどもお品さんを殺したには相違ございません。」

「お前が現場を見て居つたといふならば、現場の模樣を話して見い。」と、檢事は試さうとするやうに云つた。

「はい、その日私は僂麻質斯が起つて居ましたので、晝の中から居室に臥つて居ましたが、日が暮れてから仕事小舍でお母さんとお品さんの話聲がするんでございます。そしてお母さんが先刻常吉が歸つたが急病で納家に寢て居るから見舞つてやつてくれと申すんでございます。私は常吉も歸らないのに何でそんな事を云つて、お品さんを納家へ連れ込むのかと思つて、心配になるもんですから、そッと痛い足をこらへて後から行つて見たんでございます。」

檢事の顏には明かに反感が浮んで、

「これ〳〵、お前は自分の事にして山田に云つた通りの事を、今度は母親の事にして己に云はうとするのだな。」

お仙の熱した頭が水をかけられたやうにぞッと冷返つた。お仙に取つてこれほど冷酷な言葉は無かつた。お仙は二の句が次げずに涙ぐみながら檢事を見上げると、檢事は重ねて、

「お品が納家へ入つた後から、母親が折れた嶌口でお品の頭へ打込んだのだらう。」

お仙は俯むいて齒を嚙しばつた。何もかも自分の康民を欺いた事が累をなして居るのだと悔んで見てももう追つかない。何だかこの調子では檢事も自分を信じないかも知れぬ。事實を語つても信じられぬ自分は、よく〳〵運命の神に見放されたのだと思つた。

「い〻え、私、決して作り事を申すのではございません。山田樣にはお母さんがほんとにした事を私がしたやうに申上げたまでゞございます。たゞ嶌口だけは全く私が想像いたしましたので、お母さんが何を用ひてお品さんを殺したか、そればかりはまだ分らずに居るんでございます。」

「現場を見て居つても、何で殺したか分らないのでは、證據にも何にもならんではないか。」

「それでももう暗くなつて居りましたから……。」

「それではお前は母がお品を殺した上、わが子の靴を穿き、仕事衣を着て死骸を運び出したといふのだな。」

「はい。」

「さうすれば母親がわが子の仕事衣や靴を使用した目的は、わが子に罪を被せる爲と解釋するほかない事になる。それでなくてわが子の靴まで穿いて出るといふ譯はあるまい。如何に無情の母親でも、わが子に人殺しの大罪をなすりつけようとするものはない筈だぞ。お前の母親は吉藏には平生愛がなかつたのか。いや、吉藏の情婦を殺し、その罪を吉藏になすりつけようとするほど、吉藏に冷酷であつか。」

お仙はアツと行詰つた。母親が兄の靴まで穿いて出た事は、どうしても解釋の出來ぬ奇怪の謎であつたのだ。

お仙がおど〳〵して居ると、

「どうだ、母親は吉藏までも憎んで居たのか。」

「い〻え、お母さんは兄さんを……可愛がつて居りました。」

吉はお母に目のないほど可愛がられて居たといふ評判だぞ。その通りなのだらう。」

「はいその通りでございます。」

「それ見ろ……。さうすればそこにも大變な矛盾があるぢやアないか。……もう己はお前の相手をして居られぬ。」と、三たび懐中時計を取出して見て、

「もう二十分以上になる。約束の時間が來た。お前もい〻加減にして歸るがよからう。」

さう云つて檢事は立上つた。

お仙は死人のやうに蒼ざめて、全身苦悶のためにわな〻きながら、

「それでは私が實際の事を申上げましてもお取上げはないんでございますか。」

「勿論。……お前の目的はもう明かに分つて居る。お前が昨日裁判長を尋ねて、自分から兄の罪を引受けようとしたまでは大出來だつた。併し裁判長に看破されて兄が救へぬところから、今日はお母を持出したのだ。お前の肚ではもうお母は重い腦溢血にか〻つて、醫師から不治の宣告を受けて見る死人も同樣で、よし母がほんとの罪人と認められても、法律の手はもう不治の母の上には及ぶまい、さうすれば母を訴へても、母は收監される氣遣もなく至つて安全だ。そして兄が救はれ〻ば一擧兩得だからと、かう考へたに相違ない。なるほどお前に相應しい上手な考へだ。併しそんな手ではまだま

だ人は欺されんぞ。」

かく云捨てゝそのまゝ檢事は應接室を出ようとするので、お仙は慌てゝ立上り、憑へるやうにその顏を見上げ、

「それでは私がどれほど申上げましても……。」

「もうお前のいふ事は取上げて居られぬ。……さア、歸るがよからう。」と、冷やかに云放つて、檢事はお仙に脊を向け、扉に手をかけた。

萬事休す！　と思つたお仙は、其瞬間最後の絶望に打たれ、哀れにも氣を失つてよろ〳〵とそこに倒れて了つた。

福の奇禍

お仙はすぐに正氣づき、手當を受けた上、俥で病院へ送られた。

病院へ歸つて來たお仙は、自分は氣でも違ひはせぬかと思ふほどに、頭も身體も恐しい打擊を受けて居た。母を訴へるといふ最後の手段は脆くも失敗に終つた事を思ふと、もう根氣も精力も盡果てたやうな氣がした。自分が一度忍んで母の事を訴へさへすれば、何もかも眞相が明白になつて、兄は直に許されるものと思つて居たのは、一場の空想に過ぎなかつた。事實が一も二もなく否定されて、過誤が――而も無辜のものが殺人罪と認定されるやうな過誤が法律の名によつて行はれるとすると、こんな恐しい世の中はないとまで思はれた。……それでもお仙はまだ絶望はしなかつた。自分で盡す手段は盡きたにしても、自分の外にまだ母の犯罪を知つて居る土手の福といふものがある。自分は兄を救ふ事が出來なくても、福なら多分兄を救ふ事が出來るだらうと思はれた。今は福が唯一の頼みの綱なのだ。而し自分の證言が兄を救ふに足らなかつた事を考へると、福の證言とても必ずしも或功するものとは信じられなかつた。只自分の失敗は一度裁判長を欺いた後であるためだとも取れるので、そこに福に對する强味があるやうに思はれた。兎も角大きな懸念は前に横はつて居るけれども、お仙が

なほ希望を持つ事の出來たのは、福のあるためであつた。

翌日お仙は紫山を心待して居たが、紫山は來ずに手紙が屆いた。紫山はこの二三日また持病が起つて寢て居るので、今日はそれでも寢たり起きたりする迄になつたが、明日はまだ迎も出られさうもない、明後日ごろ多分千葉へ行けるだらう。それまで待つてくれとの事がその手紙にあつた。

お仙は失望したが、併し一二日の事はもうどうでもよかつた。

お仙は母親の枕元に附切りながら、せめて知覺の幽かな曙光でも見えたらそれを見兎すまいと、一心に注意するのであつたが、母は依然として只死せるが如く横はるのみであつた。次の日はお信も來て半日ほどお仙の相手をして居た。お仙はお信には裁判長や檢事を訪問した事は話さなかつた。新聞にその記事でも出るやうなことがあつてはと案じながら、毎朝の新聞に注意したが、幸に新聞紙は何も知らなかつた。

お仙は只雪子に對しては、何とも濟まない氣がしてならなかつた。始め雪子が病院にも見舞に來てくれるやうに云つて居ながら、その後一度も來てくれないのを見ると、雪子が自分に愛想を盡して居る事は明かだつた。無論檢事が自分の訪問した次第を裁判長に話したに相違なく、裁判長もそれを聞いては檢事が自分を爪彈したやうに、爪彈する氣になつたのだらう。實際誰にしても母を誣告した女と思へば、爪彈するのは當然である。雪子も父からまたその事を聞いたので、自分のやうな親不孝の人非人に同情の涙を濺いだ事を今ごろは後悔して居るのだらう。……さう思ふと、お仙は胸を抉られるやうに辛かつた。……けれども雪子はいつか自分を知つてくれるだらう。その時雪子が一言でも自分を慰めてくれたら遺憾はないと、たゞそれだけの望に滿足するほかなかつた。

紫山の手紙が屆いてから三日目の朝早く紫山が出て來た。で、その日すぐお源を連れて歸る事になり、その打合せを濟ました上、お仙は紫山と連立つて監獄に吉藏を尋ねた。

お仙は多くを云はずに、只母の經過がよく、もう動かせるので今日故郷へ連歸る手順をつけた次第を語り、暇乞のため來た事を告げたに過ぎなかつた。無論自分が吉藏を救ふための運動をして居る事は素振にも見せなかつた。吉藏も多くを語らず、只いつ刑の執行命令が下つても平然たる覺悟をして居る事を仄かしただけで、自分の事については何も云はなかつたけれども、お仙の身の上については紫山の來たのを幸ひ、母も到底恢復の見込がないとすれば、母を見送た後翠紅園を賣拂ひ、その金をお仙の將來に對する保證として、後見をして貰ひたいとくれ〴〵も紫山に賴むのであつた。死の運命の刻々迫りつゝある間際まで、自分の事は思はずに、妹の事のみを思ふ彼の眞心に妹は只感泣しなが

ら、事實を告げる事もならず、看守にせき立てられ、泣く泣く監獄を辭する外なかつた。吉藏もその瞬間には遺にこれが最後の訣別と思ふので、われにもあらず男泣きに泣崩れるのであつた。

お仙は病院へ歸ると、係りの醫員や、看護婦に挨拶して廻り、醫員からは看護上の注意などをいろいろ聞取つた。やがて病院用の吊臺にお源は移し乘せられ、お信夫婦と紫山も附添ひ、靜に病院の門を出て停車場にと向つた。

かくてお源は途中何等の異狀もなく、夕方にはわが住む町に到着し、無事に翠紅園に運び込まれた。お仙は二週間あまりでわが家に歸つたのだが、紫山が賴んで置いてくれた女が手傳ひに來て居るので、家の中は綺麗に片づいて居り、少しも荒れて居るところは無かつた。

お仙は今迄紫山には多少それと想像させながらも、まだ進んで事實を打明けては居なかつたが、この上包む必要もなければ、またいつまでも包んで置くのは恩人に對する道でもないと思つた。それに千葉における計畫の齟齬以來、自分ではどうする事も出來なくなつたので、一つは紫山の智惠を借りる必要もあり旁〳〵お仙は翌日改めて紫山に一切の事を打明けた。

紫山は察して居た事ではあるが、お仙の甲斐々々しい覺悟と、その奮鬪の健氣さを思ふと、自から涙が催された。

お仙はM檢事に親を誣告する人非人のやうに取られて、冷酷に追返されたことを話した上、

「先生、私が子として親を訴へたのはやつぱり人非人の仕業なんでせうか。私にはいくら考へて見ても分らないんです。どうか腹藏なくあなたの御意見を仰しやつて下さい。」と、心に思ひ餘つて居た間を持出した。

「それは場合によるだらう。昔の道德から見たら、どんな場合にも母を訴へるといふ事は罪惡だらうが、併しお母さんが悔悟して自首しようとしながら、腦溢血のために妨げられて、それが出來なかつた場合なんだから、ちつとも構はないぢやないか。母親を訴へるといふと語弊があるが、事實を告白するまでで、殊にそれがお母さんの意志である以上、ちつとも遠慮するには當るまい。親不孝にも何にもならないと己は信じるよ。」

「さうでせうか。私もさう思つて居たんですけれども……それを伺つて安心しました。」と、お仙はほツと重荷を下したやうに思つた。

土手の福の事がすぐ二人の間の話題に上つた。

「福も己に明らさまには云はないが、いよ〳〵の時にはきツと吉つアんを助けて見せると云つてるんだ。福が一切の事を知つてるんなら、この上は福の力を借りるが一番善かアないかと己は思ふよ。」

「えゝ、私もさう思ふんです。では今福を呼んで相談して見ませうか。福は居るでせうね。常吉をやつて探させませう。」

「ウム、さうだね。それぢや常吉をやつて見るか。」

紫山は常吉の働いて居るところへ出て來て、

「常吉、今から町へ行つて土手の福を見つけて來てくれ。己が一寸用があつて翠紅園に待つてると云つて……。」

常吉はおゝと答へて、そのまゝ町へ出かけて行つたが、丼分ばかりすると土手の福と一緒に入つて來た。福は仕事小舍に出て居た紫山を見つけると、

「おゝ若旦那、己、まだ知らねえで居たら、お母さんを千葉から連れて來たさうだね。どうだね。容態は。」

「まづ惡くならないから快方に向つてるのだらうかね。」

「そりやア結構だね。正氣づいたかね。」

「まだからきし駄目さ。福、あちらへ廻つて貰ふべえ。お仙さんが待つてるから……。」

「さうけ……。お仙さんもえかい苦勞をして來たゞんべえ。」

福は庭の方へ廻つて行つた。

お仙は座敷に寢かせてあるお源の枕元に坐つて居たが、福が庭から聲をかけるので、すぐ母の傍を離れ、福を迎へて、

「おゝ福、昨日お母さんを連れて歸つて來たのよ。」

「ウム、さうだつてね。……まだ正氣づかねえさうだな。迚も駄目だんべえ。」

「えゝ……。私の部屋の方へ來ておくれ。少し話があるんだから……。」

福はお仙の部屋へ廻つて來て腰を下した。紫山も入つて來て三人になるとお仙はまづ一通り千葉であつた事を話して聞かした。

福は無造作に、

「檢事がお仙さんを信用しなかつたのは無理もねえだ。併しお前は己が何もかも知つてるとなぜ云はなかつたゞね。それを云へば檢事も考へるに違なかつたゞよ。」

「えゝ、それを云はうと思つたんですけれども、時計を見ては私をせき立てるんだし、私の方でも頭が滅茶々々になつちやつて、とう〳〵云ふ間がなかつたんだわ。」

「まア、いゝだよ。そんなら己がいよ〳〵出るとしべえ。吉つアんの生命はきツと助けて見せるから

安心して居ろよ。」

「ちやア、福は千葉へ行つて、檢事に逢つてくれるの？」

「誰にでも逢ふだが、何も千葉まで行かねえでもいゝだよ。まづこゝの署長に逢つて何もかも云つて置くとしべえ。署長にほんとの事が分れば、放つて置く氣遣ひねえだ。なア、若旦那それがいゝでねえか。」

「ウム、それがよささうだね。福なら信用があるんだから大丈夫だらう。何ならお仙ちやんも一緒に署長に逢つた方がいゝかも知れないね。」

「いや、別の方がよかんべえ。打合はして來たやうに取られねえ方がいゝでねえか。」

「なるほど、それもさうだね。」

「己が何もかも署長に云つて了へば、署長がお仙さんを呼出して聞くに違ねえから、その時何もかもいふがいゝだ。」

「さうね。ちやア福はいつ署長さんに逢つてくれる？　早い方がいゝわ。」

「何だか刑の執行も近々に迫つてるらしいから、今日にも逢つて貰つた方がよからう。」

「いや、今日は駄目だ。なぜなら昨夕署長は千葉さ行つたゞから、何でも今日署長會議があるださうだよ。多分明日でなければ歸らなかんべえよ。」

「それちやア署長さんの歸りを待つ外ないわね。」

「併し安心して居ろよ。心配する事はねえだ。」

打合せが濟むと煙草をふかして雜談を二ツ三ツした上福は歸つて行つた。

翠紅園の門を出た福は、袂を探つて例のビヤボンを取出すと、口に啣へてそれを搔鳴し始めた。するとどこからともなく、禽笛による小雀のやうに、馴染の子供等が山から里から二人より三人より、やがて十人ばかりの子供が福を取卷いた。

子供等がいゝやうに福を玩具物にして遊ばうとすると、福はまた好なやうにさせながら、子供等を相手に、面白さうに踊り興じて町盡頭の方へ出て行つた。

福は子供を連れて町を淋しい方へ降ると、霜枯の野良道へ出て、だん〳〵鐵道線路の方へ近づいて行つた。程なく堤防になつて居る線路の下へ來かゝつた時、忽ち凄じい汽笛の音が聞えて、つい向ひの雜木林を拔ける汽罐車の先頭が見えた。と同時に福は目の前の線路の上に、汽車の來るのも知らず餘念なく遊んで居る二人の小兒の姿を見た。堤防の下に二軒ほどの茅屋があるので、そこに住むものゝ兒等と思はれた。一人は六ツばかりの男の子と、一人はやつと四ツになるやならずの妹らしい女

の兒だつた。と見た福は驚いて大聲を擧げ、

「これ、危ねえだ！　危ねえだ！　汽車が來たゞ！」と、堤防の下から呼ばはつたが、遊戯に氣を取られた頑是ない兒等は、少しも氣づかずに遊んで居るのだ。汽車の方でも運轉手が見つけたので、けたゝましく汽笛を鳴しながら近づいた。大きい方の小兒が氣づいた時には、汽罐車はもう目の前に來て居た。福は自分の危險も忘れて、線路へ駈上ると、大きい方の兒を力一杯線路の向ふへ突き落し、幼い方を抱へて線路の外へ出ようとする刹那、運轉手がブレーキをかけたに係らず、惰力で進んで來る汽車のために、福は線路の外へ刎飛ばされた。

福が歸つた後で、町へ使に出た常吉が、暫らくすると飛んで歸つて來た。今しも翠紅園を辭してわが家へ歸らうとする紫山と、門のところで出逢頭、

「おゝ、若旦那、えらい事が出來た。土手の福が汽車に轢れたゞよ。」

紫山はあッと驚いて、

「なに、土手の福が汽車に轢れた？　福が轢れたつて、そんな筈はあるまい。それともお前、見て來たのか。」

「ウンにや、見て來ねえだが、みんな今駈けつけて行くだ。己も行つて見るべえと思つたが、知らせに歸つて來たゞよ。」

「さうか、それぢやア今の先の下りで轢れたんだな。……轢れてどうしたんだ。死んだんぢやアあるまい。」

「死にはしねえだが、何でも生命が難しいちう仕掛だね。さういふ話だよ。」

「難しいさうだ？　また福が汽車で轢れるつて、何でそんな頓間な事をしたのかなア。」

「福がうつかりして居て轢れたと違ふだよ。何でも六兵衛どんの子兒が家の前のレールの上で遊んで居て、今轢れようツちうところへ福が通り合して、線路へ飛込んで助けたが、自分が轢れつちまつたんださうだよ。」

「ウム、さうか、そんな事で轢れたのか。……何にしても飛んだ事が出來つちやつたな。誰か醫者は駈けつけた樣子なか。」

「ウム、臺の本間先生が俥で駈けつけるところを己見て來たゞよ。」

「さうか、それぢやア手當の方は心配あるまい。どれ、己もお仙さんに話してからすぐ行つて見べえ。」

「さうけ。それぢや己、すぐ行つて見て來るだ。」と、常吉はそのまゝ飛んで行つた。

紫山は顏色を變へて、慌しく引返しく來ると、その樣子で何か變つた事があつたと察したお仙は、すぐ兄の身の上ではないかとまづ案じられながら、

「おや、先生、どうなさいましたの？」

紫山はこの報告がどれほどお仙を落膽させるかと思ふと、俄かに暗い心になつて、

「なに、今常吉が飛んで歸るところにそこで逢つたんだが、土手の福が飛んだ大怪我をしたさうだよ。」

兄の事ではなかつたが、福の怪我といふのにまた驚いて、

「えッ！　どうして大怪我をしたんですの？」

「まだ怪我の程度は分らないんだが、こゝから歸りに土手の六兵衛の小兒が、汽車で轢れようとするところへ通り合して、福が飛込んで助けたはいゝが、自分が汽車に觸れちまつたらしいんだよ。」

「まア！　でも生命は大丈夫なんでせうか。」

「轢れつちまつた譯ぢやアないらしいから、生命に仔細はあるまいと思ふんだ。」と、なるべく輕く云つて「兎に角、己は今行つて見舞つて來るが、お前に知らせに引返して來たんだよ。すぐまた歸つて來て樣子を知らせるから、あまり案じずに待つて居るがいゝ。きッと大した事もあるまいと思ふよ。」

「それだとよどさんすが、生命にでもかゝはるやうな事があつたら、それこそ大變ぢやアありませんか。」

福に萬一の事があつたら、兄を救ふ望は全く絶えるのだと思ふと、お仙は有るにもあらぬやうな氣がした。

「まさか神樣のある世の中だから、福を殺しはしまいよ。」と、云捨てゝ紫山は急がはしく翠紅園を出て行つた。

紫山が出て行つた後で、お仙は何とも知れぬ懸念に襲はれながら、福の怪我の輕くて濟むやうと、一心に祈つて居たが、四五十分ほどすると紫山が常吉と連立つて歸つて來た。

二人が口も利かず、默つて入つて來て、殊に紫山の全く失望したらしい、萎れ切つた姿を認めると、お仙はまづト胸を突かれ、ひよッとすると福が無殘の最期を遂げたのではないかと思つた。

紫山は常吉に何か云つて立去らせ、自分一人がお仙の立つて出迎へた母屋の緣先へ近づいて行つた。

「どうでしたの？」

お仙はその問を發するさへ恐怖に堪へぬやうに見えた。

紫山は事實を話す外はないと思ふので、

「實に困つた事になつた。汽車に轢れた譯ぢやアないが、餘程の重傷だよ。」

死んでは居なかつたのだと思ふと、いくらかほッとしながら、

「ぢやア、生命は無事だつたんですね。」

「どうもそこが分らんのだよ。明日になつて見なければ、全く見當がつかんさうだ。」

「どんな怪我ですの？」

「機關車で刎飛ばされたんだね。後頭部と肩と腕に重傷を負つたんだよ。取敢ず六兵衛の家へ擔ぎ込んでね、そこで本間さんが食鹽注射をしたり、何かしてまづ落ちついて居るんだが、腦震盪を起しかけてるさうだから難かしいらしいんだ。」

「まア、さうですか。」と、お仙は色を變へて「でも正氣づいて居ますの？」

「どうして正氣づくどころの騒ぎぢやアない。ずッと人事不省なんだが、意識を恢復しても、口を利く迄にはどうしても四五日はかゝるだらうといふ事だよ。」

「大變ですね。……マア、どうしませう。」と、お仙は恐ろしい懸念に囚はれた。

「それでも恢復してくれゝばいゝと思つて居るんだが……。」

「さうですわね。そして吉さんの執行命令がそれまで來ないで居れば……。」

「それまでは大丈夫らしいと思ふが……。何にしても飛んだ事が出來つちまつたね。」

二人の間に暫らく沈默が落ちて居たが、

「まア、仕方がありませんわね、福が快くなるのを待つより外は……。」と、お仙は淋しく云つて「でも福はえらい働きをして、そんな怪我をしたんですね。」

「いづれ、人命救助で、善行表彰の御褒美が出るだらう。そりやア全くえらい働きをしたんだね。助けた小兒は一人かと思つたら二人なんだよ。」

「まア、二人も一遍に！　一人は六兵衛どんの子とモ一人は？」

「二人共六兵衛の子供だよ。兄が六ツで妹が四ツになつたばかりださうだ。二人で知らない間に、線路に出て遊んでるところへ汽車が來たんで……小兒のことだから、遊びに夢中になつて汽車が來ても知らないで居たんだね。丁度堤防に來かゝつた福が、それと見てびつくりしながら線路へ飛込んだ時には、もう汽車が眼の前に來つちまつたんで、六ツの兒をいきなり線路の向ふへ突落して、四ツの兒を抱くより早く、逃退かうとしたんだが、もう間に合はずにやられちまつたんだね。抱いて居た兒は

不思議に擦過傷一ツ負はなかつたさうだよ。」

「まア、感心な働きをしたんですね。……六兵衛どんの子供等こそ、何といふ仕合せものなんでせう。」

「全くだよ。それで六兵衛夫婦も泣いて喜んでるんだが、二人の子の生命の親だから、自分の家でゆつくり療治させて、一生懸命介抱すると云つてるんだよ。どうせ動かすと危險ださうだから、多分さうする外あるまいが……。」

「さうですか、六兵衛どんもほんとにどんなにか嬉しいでせうね。福も療治する家が出來て仕合せですわね。……でも先生、福は快くなるでせうか。」

「なアに、福の頑丈なあの身體なら、きツと快くなるだらうよ。本間さんも不死身のやうな身體を持つてる福だからこそ助かつたんで、外のものならこれだけの怪我をすれば、十人が十人生命があるまいと云つて居たよ。だから死なずに濟めば恢復も早いだらう。死ぬ事はないらしいから……。」

「さうでせうか。快くなつてくれるとよゞざんすが……。でも早く口が利けるやうになつてくれないと困りますわね。四五日はどうしても利けないといふんでせう。」

「さういふ事なんだが……。併し明朝になれば大抵見當がつくだらうから、己は今夜も見舞に行

明日の朝も早く尋ねた上知らせに來るとしよう。その上でまた相談の仕様もあるから……。」

「えゝ、どうぞさう願ひます。……先生、私は何だか明日にも兄さんの刑の執行があるやうな氣がしてならないんですの。」

「なアに、そんな事があるもんか。大丈夫だよ。」

「さうでせうか。」と、お仙は淋しい笑顔を浮べた。

紫山とお仙

翌日の朝お仙は起出すとまづ千葉の新聞を取つて目をさらした。地方の出來事や、市井の雜事などがお仙の興味を惹くのではない。何だか兄に關する消息が有りはせぬかと氣遣はれるためであつた。するとお仙は――やつぱり蟲が知らせるのだと思つた――果して兄に關する一個の雜報を發見した。

見る〳〵お仙の顏色は土のやうに蒼ざめて新聞を持つ手はぶる〳〵と震ひ始めた。雜報は『死刑一束』として前日二件ほどの死刑の執行された事を報じ、更に記者の臆測かあらぬか、翠紅園事件の犯人も二三日中に執行される模樣だといふ意味の事を付加へてあるのだ。

お仙は自分の恐れて居た日が遂に來たと思つた。それは單に新聞記者の臆測に過ぎないとして見ても、何だかその臆測には根據があつて、實際二三日中に兄は絞首臺上に登されるのではあるまいかと思はれた。假に三日の後に行はれるとすると中二日の餘裕ほかないのだ。兄の運命を雙肩に擔つて居る福が、今日明日の中に快よくならなければ、兄の運命もそれきりらしく思はれて、お仙はもう立つても居ても居られなかつた。

こんな時に母が正氣づいてくれたらと、急いで母の枕元へ行つて見たが、母は相變らずうと〳〵とその永久の眠をつゞけて居るばかりである。お仙はたまらず身を投げかけて母を搖ぶりながら、

「お母さん、兄さんのお處刑日がもう二三日になつたやうです。兄さんは今日か明日きりの生命です。兄さんを助ける筈の福は、大怪我をしてお母さん同樣正氣づかずに居るんです。もう誰も兄さんを助けてくれる人は有りません。お母さん！　あなたがさうして眠つて居る間に、兄さんが殺されて了つたらどうします。早く正氣づいて下さい！　それでないともう兄さんの生命はありません。正氣づいて下さい！　お母さん！……。」

けれども母は昏々として眠つて居る。その顏には何の奇蹟も表れない。やつぱり福が快復しなければ兄は救はれないのだ……と思ふと福の容態が知りたくつてたまらなくなつた。今朝は早く紫山が福の消息を齎して來る筈にはなつて居るけれども、お仙はそれを待つて居られなかつた。早速常吉を呼んで、福の樣子を尋ねるため六兵衞のところへ走らせた。併し常吉が歸つて來ぬ中に紫山の姿が見えた。

お仙は急がはしく紫山を迎へると、

「先生、今朝の千葉の新聞を御覽になりましたか。死刑一束といふ雜報があつたでせう。」

「ウム、あれを見た時はどきッとしたが、併し外のものなので安心したよ。」

「ですけれども兄の處刑の事が附加へてあるでせう。」

「ウム、併し己は考へたんだが、死刑の執行はその時までは絶對に秘密にする事になつて居るさうだから、分る筈がどうしてもないんだ。あれは只新聞記者がいゝ加減に臆測したものだらうと思ふよ。」

「さうでせうか。でも私には何だかそれが事實になりさうに思はれてならないんですの。檢事からでもそんな口振が漏れたんぢやアないでせうか。」

「さア、そんな事はある筈がないと思ふが……。併し兎に角こつちの運動は一刻も油斷が出來ない事になつたね。」と、紫山は心配さうな顏に溜息を吐いた。

「そして福の樣子はどうでせう？」

「今寄つて來たが、どうもあてになりさうもない。今朝本間さんが見た上でなければ何とも分らないが、己が今寄つて見て來たところでは、今日明日に口を利く見込はまづ無ささうだよ。」

お仙は絶望しながら、

「それではまだ正氣づかないんですの？」

「たゞうと〳〵として居るんだね。全くお母さんと同じ事だ。……それで己の思ふには、刑の執行が迫つて居るとすりやア、迚も福の恢復を待つ事が出來ないから——尤も後程本間さんの意見を聞いてきた上の事だが——まづ福はあてにならないとして、此上は己とお仙ちやんと二人で署長に逢つた上、すべてを告白して見たらどうかと思ふんだよ。」

「さうですね。それよか途がないかも知れませんね。……それでは先生、私と一緒に署長さんに逢つて下さいますか。」

「そりやア無論の事だ。吉さんを救ふ事が出來るなら、己はどんな事でもするよ。……署長は己を知つてる、まさか己が嘘をつくとは思ふまいから、己達のいふことを信じてくれるだらうと思ふよ。さうすれば占めたもんだから……。」

「さうですね。私ばかりでは信じて下さらないでせうけども……。」と、お仙はいくらか希望を持ちながら云つた。

「それでは兎に角己は今から朝食を食つて、なほ本間さんの意見も聞いた上出て來るから……。それ迄に常吉を警察へやつて、それとなしに署長が今朝歸つて來たかどうか聞かして置くがいゝね。」

「えゝ、さうしませう。では先生、この上ともによろしく、先生ばかりがたよりですから……。」と、お仙はほろりとした。

「お仙ちやん、お前はほんとに苦勞するね。」と、紫山もつい涙が催された。

紫山が歸つた後、お仙は自分と紫山とだけの陳述で、果して署長を信じさせる事が出來るかどうかとひどく危まれたが、併し今はそれを唯一の頼とする外無かつた。

その朝福を見舞つた本間先生の診斷によると、福が意識を恢復することも今日明日には到底難かしく、口を利いて差支ないやうになるのは、どうしても一週間の後である。併し危機は經過したから、生命だけは大丈夫取留られるといふのだ。これを聞いた紫山は、福によつて吉藏を救はうとする望みを全然捨てゝかゝらなければならぬ事を明かにする事が出來た。

署長は午前中に歸る筈だといふので、午の食事を取るとすぐに紫山は、翠紅園に來て、お仙を伴れ警察署に出かけた。二人が連立つて町を通る姿を見ると、店の中や往來のものが、目引き袖引き、妙な笑顏を浮べて私語き合つた。二人の事は前から兎角の批評に上つて居たので、殊に今度の事件以來、紫山が始終お仙の家へ來て居るため、噂はます〳〵高くなるのであつた。紫山はよくそれを知て居るが、素より人の噂などに構つては居られなかつた。別して今日はそんなことはまるで二人の問題にもならなかつたのだ。

警察へ行くと二人はすぐ署長室へ通され、椅子を與へられた。署長は愛想よく、

「島田さん、このごろ健康はどうです。」と、言葉遣ひも紫山に對しては、いつもの通り丁寧だつた。

「寒い中はどうもハキ〳〵しませんが、それでも今年は無事の方です。……ところで我々がお尋ねしましたのは、田淵吉藏の殺人事件について、容易ならぬ事實を申上げる爲なのですが、暫らくお聞取りを願ひたいと存じます。」

「あゝ、さうですか。」と、署長は俄に苦い顏をして「私は今朝千葉から歸つて來たのですが、あちらでM檢事に逢つてその話を聞いて來たのです……。同じ話ぢやないですかな。」

署長もまた聞いて來て居たのかと思ふと、お仙はうんざりするやうに思つた。けれども紫山は少しもひるまず、

「さうでしたか。どうせ共事も申上げなければならんのですから、却て好都合かも知れません。併し檢事は非常に誤解してお居でらしいのです。お仙さんの辯明をよく聞かない中に、頭ごなしに虛僞の陳述と極めて了はれた樣子で、お仙さんは女の事なり旁、強てそれを言解く事も出來ずに、涙を呑んで歸つて來たといふやうな次第なんです。」

「それぢやア君は虛僞の陳述ではないと保證するのですか。」

「さうです。立派に保證します。……全體お仙さんは肝腎な事を檢事に云漏らしたので、――いや檢事がそれをいふ暇を與へなかつたのです。それを聞けば檢事の考へもきッと變つたに相違なかつたの

です。」

「それはどんな事ですか。」と、署長は冷やかに云つた。

「土手の福が犯罪の顚末をすつかり知つて居るといふ事です。」

「えッ！」と、署長は驚き顏に「土手の福が知つて居る！　どうして福が知つて居るので？」

「福もお仙さんと同じに犯罪の現場を見て居たのです。」

「福が現場を見て居つた？　そんな事はないでせう。」

「いやたしかに見て居つたのです。それで實は今日土手の福が、千葉からあなたのお歸になるのを待つて、一切を告白する筈になつて居ましたところ、お聞及びだと思ひますが、昨日福は小兒を助けるため汽車に觸れて重傷を負つた始末なんです。……一方にはまた吉藏の處刑がいよ〳〵迫つた樣子ですから、福の恢復を待つ事が出來ずに、かうしてお尋ねしました譯で……。詳しい仔細は、なほ私も申上げますが、お仙さんからお聞取りを願ひたいと存じます。」

署長はなほ信じ得ぬ顏をして、

「どうも容易ならん話ですが、福が居らんと一寸困るですな。……全體福の容體はどうです、話はさつき聞きましたが……。」

「恢復はするらしいですが、餘程重體です。まだ意識を恢復しないのですから、口を利けるやうになるのはどうしても一週間後だらうといふのです。口が利けても當分談話は禁じなければならんだらうと、そんな事も云つて居ました。」

「そりやア困りましたな。肝腎の證人だといふ土手の福がそれでは……これは伺つたところで……。」

と、署長は煮え切らない顏をして紫山とお仙を見た。

福が人事不省になり、口が利けないのを利用して、一時免れにそんな事をいふのではないかと、署長は疑つて居るらしく、もしお仙一人が來て同じ事を云つたのなら、檢事同樣相手にならずに追返したかも知れなかつたのだ。

「土手の福が人事不省になつた事は、實に打擊です。福は私達に口癖のやうに吉つアんが明日死刑に處せられるといふ時でも、きッと己が助けて見せると、自信を以て話して居た位ですから……。」

「ところでどうです、此話は……現場を見て居たといふ肝腎の福が、死人も同樣では、伺つても仕方がないと思ふのですから暫らく辛棒して、福が正氣づくまで待つといふ事にしては……。」

「それは、その時まで吉藏が死刑に處せられないといふ保證さへあれば無論待ちます。併し今朝の新聞記事によると、二三日中に刑の執行があるやうに書いてありますから……。」

「併し死刑の執行といふやうな事が、前以て新聞に知れる筈がないですよ。司法大臣から執行命令が下つても、檢事の外には知るものがなく、刑は絶對秘密に執行されるものですから……。」と、署長は事もなげにそれを否定するやうに云つた。

「さうでせうか。……併し絶對秘密に執行される以上は、却つて二三日どころか、明日にも執行されるかも知れぬといふ懸念があるでは有りませんか。」

「それは明日執行されるかも知れんです。……併しまアそんな事も無からうと思ふので……。」

「兎に角死刑囚となると、いつ刑を執行されるか分らん地位に置かれてある譯なのですな。……さうすれば無罪と分れば、一日でも打捨てゝ置く事は出來ない筈でせう。一方には假令臆測にもせよ、二三日中に刑の執行があるやうに新聞に出て居る際ですから……。」

署長は苦い顏をしながら、

「それでは福が犯罪の現場を見て居つたといふ事は、何かそれを證明する材料があるのですか。」

紫山は正面に署長の顏を見詰めて、

「それは私だつて責任のある事は知つてます。福が事實を知つて居らんものを知つて居るやうには申しません。福が恢復すればすぐ分る事ぢやア有りませんか。これが福が横死を遂げたといふ場合なら、こんな事を云出してどういふお疑を受けても止むを得ませんが、一週間もすれば、必ず證明の出來る事なのですから。」

「いや、君は誤解して居る……。福の知りもせん事を知つてるやうに、君が云つてるかと、私が疑つてるのではないですよ。福が自分から現場を見て居ると云つてる事が、事實かどうかといふのです。ここれまでも福はよくさういふ事をいふ男ですから……。」と、署長は訂正した。

「さうですか。……併し福がさういふ事をいふ場合には、いつも事實なのでは有りませんか。」

「兎に角その次第を伺つて見ませう。」

紫山はお仙の顏を見たが、お仙が紫山に話してくれとの意を目顏に愬へるので、

「それでは私からまづ申上げて見ませう。併し私も實は最近まで深くは知らなかつたのです。只多少疑つて居つただけですが、ほんとの犯人が誰であるかといふ事を、明らさまにお仙さんから聞いたのは、今度お仙さんがお母さんを千葉から連れて歸つてからで、土手の福から一切を聞知つたのは昨日の事です。お仙さんにしてはお母さんの事なので、云難い事と思ひますから、私の聞知つた限りの事を在のまゝに申上げて見ませう。その上で詳細の事はお仙さんにお尋ねを願へば、虚僞か眞實か、容易に御判斷がつく事と思ひます。」と、冒頭して紫山は次の通りに語り始めた。

「お品さんが弟子入の時、吉藏の母親がまづ納得したといふ事は、たしかに事實ですが、併しお品さんが來るとすぐお品さんを憎み出したのも母親なのです。殊に吉藏とお品さんの間柄が親密になるにつれて、非常にお品さんを憎み出したので、それは私には病的嫉妬とほか解釋が出來ません、全く尋常の嫉妬と違つたよほど猛烈な嫉妬で、その嫉妬のためにはお品さんを殺し兼ないといふ事は、これからだん〳〵お話し申上げようとする事實から容易に推測する事が出來ると信ずるのです。私はあなた方が第一その點について少しも立入つたお詮議をなさらなかつた事が不思議に思はれてなりません。一つは翠紅園が一軒家になつて居つて、また他とも交際のない家であるため、一家の事情が他に知れなかつたためもありませうが、要するにこの點に着眼してお調べになつたならば、この事件は必ず違つた方面に展開したに相違なかつたと信ずるのです。

「どうも私には檢事を始め、あなた方や、裁判官の頭に、先入主となつた思想があつたやうに思はれます。それはお品さんに三千圓の持參金と一町歩の土地がついて居るから、それを目的として居る母親に、嫌疑をかけて見る理由は何もないといふ豫斷的の意識が絶えず働いて居つたと思はれる事で、なるほどそれは誰にしてもさう考へて見る事です。私共にしても今以て母親の心理を解釋しかねて居る位ですが、併し行爲に表れた事實は柱げる事が出來ません。また母親がなるほどお品さんを殺すとこまで行かなければ結着がつくまいと、何人をも首肯しむるに足ると信ずるだけの材料は多々あります。私はその重なる事實を申上げて見ませう。

「一度母親は吉藏の机からお品さんの寫眞を發見して、それを燒火箸で滅茶々々に突刺した上、引破つて塵芥溜へ捨てゝ了つた事があります。その時一悶着起つた末、母親はとう〳〵お品さんに暇をやつて了ひました。その時お品さんが永久に別れて了へばこんな事にならなかつたのですが、吉藏はそれから間もなく腸窒扶斯に襲はれましたので、それは御承知の通りです。ところが別に誰も看護の出來るものがなく、吉藏はまた囈語にお品さんの名ばかり呼んでをる始末ですから、母親も背に腹はかへられず。無給の看護婦でも雇つたつもりで、お品さんを呼返したのです。

「その時のお品さんの看護婦ぶりは誰でも感心せぬものがないほどで、吉藏の病氣が早く癒つたのも全くそのためと思はれますが、さて病氣が癒つて見ると、母親も遂にお品さんを追返す事も出來ず、お品さんはそれからずる〳〵に翠紅園に通つて居たのですが、其間に吉藏は度々お品さんとの結婚話を持出したのです。尤も今迄にその話は吉藏の方から二三度持出した事があるので、その都度母親が何かと口實を設けて許さなかつたのですが、今度は吉藏の生命を助けたいといふ事もあり、母親の方にもそれを妨げる口實がないと見て、吉藏の方からは大分强腰で母親に迫つたのです。吉藏がさうし

て母親に迫る一方、もし今度許されなかつたら、新嘉坡に居るお品さんの兄を頼つて駈落しようといふ相談が二人の間に熟して居たので、それを母親が知つたところから、二人の結婚を妨げ、吉藏を手元へ置くにはお品さんを殺す外はないといふ覺悟を極めたらしいのです。」

署長は口を挿んで、

「併し母親が結婚を妨げるため、お品を殺すといふ意味が徹底しませんね。なぜお品を殺してまで結婚を妨げなければならんのですか。お品には三千圓の持參金と土地までついて居るのでせう。」

「さうです。……今も申上げた通り母親の心理は解釋が出來ませんが、嫉妬のためすべての打算を忘れたと見るのが適當でせう。」

「併し兇行のあつた前日、母親は二人の結婚を許しとるではありませんか。それは吉藏も承認して居るですよ。」

「そこです。肝腎のところは……。母親が二人の結婚を許したといふ背景には、聖天山の丑の時まゐりといふ物凄い一齣があるのです。それを御存知になれば、なぜ母親が容易に二人の結婚を許すと云つたか、またそれを許した翌日にお品さんを殺したか、一切の事が明瞭になるのです。」

署長は次第に紫山の談話に惹きつけられる様子で、それをまた先程からなるべく顏に表すまいと勉めて居る様子だつたが、

「丑の時まゐりといふのは母親がしたといふのですか。」

「さうです。」

「それがどうして分つたのです。」

「土手の福が毎夜それを見て居ました。」

「フーム……。」

「尤も母親が三日許りつゞけて毎晩眞夜中過に、そツと家を脱出す事を知つて居たのはお仙さんです。まさか丑の時まゐりをするものとも思はずに居ましたところが、土手の福がそツと吉藏に知らして來たのです。而もその場所は奥の院の三本杉で、藁人形を打込んであると云ふので、吉藏は驚きながら畫の中にそツと三本杉へ行つて見ると、果して藁人形に三本も五寸釘が打込んである始末です。拔取つて見ると二十一歳の女としてあるので、吉藏は母の執念の恐しさに舌を卷いて戰慄したのですが、その時ふと思ひついたのは、今夜母を驚かした上、何とかして心を改めさせたいものといふ考へです。それで藁人形は舊の通りに打込んで置いて、その夜母親が拔出して行く後から、そツと聖天山まで跟けて行たのです。すると母親は三本杉へ辿りついて、蠟燭をつけた上、件の藁人形に四本

目の五寸釘を打込まうとするので、隠れて居た吉藏が飛んで出て、利腕をしツかと押へたさうです。此時の母親の驚愕は想像するに餘ありませう。そこで吉藏が涙と共に諄々と母を責立たところから、遺の母親もモウ度膽はぬかれて居るし、自分の方に理窟は少しもないので、全くまゐつて了つたんです。それで今夜といふ今夜は始めて夢が醒めたやうに悔悟したから、この上は潔く二人の結婚を許さうと云出した上、聖天の前で誓を立てるからと、息子と一緒に聖天の社の前へ來て、藁人形をバラバラに解きほぐした上、誓言を立てゝ見せたのです。——この光景は母子二人の外に誰も知るまいと思つて居たのですが、土手の福が傍で逐一に見て居つたのです。……で、吉藏は最初母の詞を信じなかつたのですが、聖天の前でその通り誓言を立てられて見ると、母親の心は今度こそ全く折れたのだらうと考へ直し、正直な男の事ですから、それに滿足してその夜は引取つた譯です。兇行のあつたのはその翌日の事で……母親は聖天の前で吉藏を欺いた上、お品さんを無きものにしなければ、わが子の心を奪ふ事は出來ないと決心の臍を固めたらしく、その翌日にその恐るべき決心を斷行したのです。」

紫山は一息入れて、自分の陳述がどんな結果を來したかを知らうとした。署長は自分の混亂した感情をもう包む事が出來なかつた。もし吉藏が眞の犯人でなかつたら、自分は職務上由々しき過誤をなした責を免れぬとの懸念が、鋭く自分の神經を刺激し始めたらしく見えた。

「そしてお品を殺した時の模樣はどうです。その時も土手の福が見て居たといふのですね。」と、慌しく尋ねた。

「さうです。併し福の見たのは、母親がお品さんの死骸を抱へて出る時で、福は萱原までちやんと母親の後をつけて行つたのです。」

「それでは犯罪の現行を見て居たのではないですな。」

「現場は見なくても死骸を持出すところから萱原を引摺り廻るところを見たのですから、詰りどちらでも同じ事でせう。福が其朝誰よりも早く納家に死骸の隱してある事を知つて居たのも、萱原の中で死骸をどう持廻つたか、どこの草が倒れて居て、どこに血が染つて居たか、どんな遺留品がどこに落ちて居たか、そんな事を詳しく知つて居て、あなた方を驚かしたのも、福がちやんと前夜の心覺えで、その朝早く見屆けて置いたからです。血を嗅分けて遺留品を見つけたといふやうな事を福が云つたさうですが、それは自分にさういふ不思議な能力があるからと思はせて、あなた方を眩惑すためだつたのです。そしてそれはいつもの福の手段なのです。」

「ウーム……。」と、署長は呻きながら考へ込んだ。土手の福が何か知つてるに相違ないと、其時睨んだのは署長だつた。署長はその時の事を思ひ出すにつけて、紫山のいふところがだん〴〵僞りとは思

へなくなつて來たのだ。

「若しこれが外の家に起つた出來事であるなら、福は直に事實を告白したのです。けれども福は吉藏と不思議にうまが合つてる間柄で、母親にも愛されて居たのです。それで母親に對しても直に告白するに忍びない情誼があり、よし告發して吉藏を救つたとしても、吉藏との友誼はそれきり破れると見拔いたのです。そこでいよ〳〵の場合にはさうする外ないと覺悟はしながらも、それまでにどうか他の方法で吉藏を救ひたい、それには母親に自白させる外途がないと考へて、その手段を取つたのです。私には母親が最後の言渡しの日に告白する決心を持つて、千葉へ出かけたのは福の力が預つて多きに居ると信ずる理由があります。これは檢事が信じなかつたやうです。けれども母親が一切を告白する決心で出かけた事は、私やお仙さんにはよく推測することが出來るので。……要するに福が事實を知つて居ながら、それをあなた方に包んで置いた理由は十分御了解が出來たと思ひます。」

「吉藏はそれを知つてるのですか。」

「はい。……尤も最初拘留處分を受けた當時は、何も知らなかつたのです。證據物件として自分の靴と園藝服を示された時に、始めて恐ろしい疑が起つたらしく、母親と留置場で面會した時に、いよ〳〵それを確めた樣子です。その後でお仙さんが面會した時には、吉藏は犯人の母親である事を、明かに悟つて居たさうです。……で犯人が母であることを突留めてから、吉藏の態度がどんなに變つたかは、お思ひ當りになる事と信じます。あなた方は却つてそれを免れぬ證據が出たため、屈服したものと御解釋になつたらしいですが、吉藏は母親の罪は、よし自分が殺されても明言は出來ぬと深く心に覺悟をしたため、結果は甘んじてその罪を引受ける事になつたのです。」

紫山のいふところは對手の耳に、いよ〳〵義理明白のやうに受取られ出した。だん〴〵に顏色が緊張して、一種の不安に襲はれ始めた署長は、詞を和らげてお仙に向ひ、當夜の模樣を尋ね始めた。

お仙は檢事に話した事實を更に詳しく說き出した。今日はその時と違つて少しも臆するところがなければ、氣もよく沈着いて居る上、署長の紫山に動かされて行く樣子が明かに看取されるにつけて、自分にも勇氣と自信が加はり、陳述はいかにもすら〳〵と自然に出て行つたのだ。

お仙の物語りは全く紫山の陳述を裏書するものであつた。

署長は更に紫山とお仙の陳述を代る〴〵聞取つた上、次のやうに云つた。

「なるほどあなた方の陳述を聞いて見ると、或は吉藏が犯人でなかつたかとも思はれます。兎に角容易ならぬ事件ですから、これから早速巡査部長を千葉へやることにしませう。私が行けるといゝのですが、差支がありますから……。」

紫山とお傭は満足して、警察署を引取つた。

執行命令

署長は時を移さず、巡査部長に旨を含めて千葉へ出張させたが、汽車の都合がよかつたので、M検事の退廳前に裁判所に到着する事が出來た。

千葉新聞の記事は何を根據とした臆測であつたか分らぬにせよ、その臆測は偶然にも適中して居た。その日巡査部長の訪問を受ける前に、検事は可なり長い辯論を續けて、自分の部室に歸つて來た時、司法大臣の命令の屆いて居る事を知つた。それは田淵吉藏に對する死刑の執行命令書であつた。

死刑は命令書が到達してから、三日以内に執行される規定であるが、多くの場合に慣例として命令書到達の翌日に執行の事となつて居るのだ。検事はやはり慣例通り翌日午前中に執行の手順が出來るかどうかと部室の時計を仰いで見た。この時は四時に十分を餘すのみであつた。その同じ時刻である、巡査部長が至急に面會を求めたいと刺を通じて來たのは。

検事の頭には此訪問が翠紅園の殺人事件に關係するものと直ぐ響いたに違なかつた。吉藏の犯罪は今更動かすべからざる事實で、從つて本人の死刑も確定した事實である。如何なる事があらうとも、

既定の事實は動かすべからざるものであると、檢事はその時も心に思つた。翠紅園の事件ならば最早巡査部長に逢ふ必要はないのだ。よし逢ふにしても執行命令とは何の係りあつた事がない譯なのだ。それで勝手に手順をつけて了へばいゝのである。……けれども物事は何のせゐといふ事もなしに、遠つた方角に導いて行かれる事がある、この場合もそれであつた。檢事は死刑の手順をつけるよりも、巡査部長に逢ふ事を先にして了つた。

檢事は簡單に要領だけをいふがいゝといふのを冒頭に、巡査部長から說明を聞取つた。部長は一つは檢事の前でせき立てられるほどなほ氣後れもしたし、また一つは署長自身のやうに直接紫山とお仙の陳述を聞いた譯でもなく、半信半疑で聞いて來た事なので、自分の陳述にも十分氣乘のしなかつたのは、爭ふべからざる事であつた。――容易ならぬ重大事件と信じたなら、署長自身檢事にぶツかれば一番よかつたのだ。――で檢事はその話を聞取つたけれども、そのためにこの事件に對する自分の心證は少しも覆されなかつた。つまり大事な場合に無駄な時間を潰して了まつたといふ結果になつた。

たゞそれにも拘らず、まだ手順をつける餘裕のあつたに拘らず、明日の死刑執行は明後日に延ばしておかうと檢事は肚の中で極めて了つたのだ。

巡査部長の話を切上げさせると、最後の斷案を下して檢事は云つた。

「この話は少しも取るに足らん。土手の福が見て居たといふ、その土手の福は人事不省に陷つて居るし、殺した犯人だといふお源は、知覺喪失の狀態にあるのだ。人事不省と知覺喪失――この二つの事實が凡てを說明して居る。多分田園詩人だといふ男が想像に任せて作り上げた小說だらう。……尤も土手の福が署長に告白する筈だと云つた事は、或は事實であつたかも知れぬ。それならば多分どんな手段を取つても吉藏を助けようといふ計畫が三人の間に企てられ、母親が不治の重態で口も利けず、身體も動かず、先も知れてるといふところから、母親に罪を被せて息子を救はうとするお仙の意見に同意したに違ない。何一ツ證據といふものがない以上少しも信用するに足らぬ。さういふ重大事件を持つて來るなら、まづ動かすべからざる確證を提供するのが第一だ。決して輕率な申出をしてはならぬと、署長にきツと云ふがよい。」

檢事に叱りつけられて、恐縮しながら退席する巡査部長を、檢事は急に呼止めてまた云つた。

「歸つたら署長に確證が擧れば出直して來い、それも明日中でなければ遲いと、さういふのだ。……いいかね。」と、念を押した。

部長は勝手が違つたやうに呆氣に取られて退いたが、どう考へても檢事の言葉が腑に落ちなかつた。

巡査部長が千葉から歸つて來れば、早速紫山の許に通知がある筈なので、紫山は案じながら心待をして居る中、その夜の九時ごろ署長の宅から通知があつて自宅へ來てくれとの事に、吉凶を案じながら急がはしく紫山は出かけて行つた。

署長の顏を一目見た時に、紫山は一切を讀む事が出來た。署長は左も氣の毒に堪へぬやうに。

「どうも檢事はやはり信用せぬのです。さういふ重大な事を申出るなら、確な證據を提供した上でなければ、信用する事が出來ぬといふのです。」

紫山は失望の溜息を吐いて、

「さうですか、檢事はやつぱり信じて下さらんのですか。」

署長に愚痴交りの議論を吹きかけて見たけれども、それは何の役にも立つ事では無かつた。紫山が悄然として引取る時に署長は云つた。

「巡査部長が檢事の前を引退る時に、何か確證が擧れば出直して來い、それも明日中でなければ遲いと云つたさうです。ひよツとすると死刑は今明日に迫つて居るかも知れません。」

署長室を出た紫山は、そのまゝ翠紅園に寄らずに歸らうとしたが、お仙が寢ずにも待つて居るだらうと思ふと、それも出來ずに、翠紅園に惹かれて行つた。

お仙は母の枕元に附添ひ、案じながら紫山からの便りを待つて居るところへ、紫山が尋ねて來た。

お仙は早速紫山に病室へ通つて貰つて、

「警察から知らせがありましたか。」

「實は署長の宅から使があつたので、今行つて來たのだが……。」

紫山の萎れて居る姿を見ると、お仙は心も心ならず、

「どうでしたの？　やつぱり駄目ですか？」

「いけない、檢事の頭はよつぽどどうかしてるね。人を見れば盜賊と思へといふその諺通りの頭になつてるんだね。土手の福が人事不省に陷つたのと、お母さんが口が利けずに居るのを利用して、巧く事實を捏造したに違ひないといふんださうだ。」

「まアー……どうしませう。それぢやアもう兄さんは死刑になるほかないぢやア有りませんか。」

「さうなれば世の中には正義も何もないのだ。神も佛もない世の中なんだ。」

「でも檢事のやうに云はれゝば福がよくなつて證人に出ても信じられない事になるでせう。」

「併し福が出て喋舌るとなれば、そんな事もあるまい。訊問して行けば眞僞はすぐ分るんだから。……」

「それぢや福が快くくなるのを待つより外ありませんの？」

「ところが檢事が巡査部長に云つたさうだよ、確な證據が擧つたら出直して來い、併し明日中でなければもう遲いつて……。何だか刑の執行が明後日あたりに極つてるらしい口振りだつたさうだよ。」

「えッ、明後日ごろ！」と、お仙の顏色は土のやうに蒼ざめて「やつぱりさうなんですか。」

「お母さんでも突然口が利けるやうになつてくれないかなア。」と、紫山は傍のお源を見成つた。

失神したやうに茫乎となつたお仙の耳に、この詞は警鐘のやうに響いた。

「さうだ、もうかうなればお母さんの外に兄さんを助けるものはない！。」

けれどもどうして？……

お仙は搖搖られるやうな胸を抱いてモ一度母を見た。何だか母の顏にはいつもと違つた徵候が表はれて居るやうに思はれた。

お仙はそのまゝ母に取縋ると、

「お母さん……あなた、正氣づいて下さい。口を利いて下さい……もうお母さんの外に、兄さんを助ける人はありません……兄さんを明日中に助けなければ、兄さんは生命を取られて了ひます。お母さん……正氣づいて下さい。」

けれどもやはり母の知覺は恢復しては來なかつた。母はうと〳〵として半醒半眠の狀態をつゞけて居るのだ。

「お母さん！　お母さん！」

母はいつ正氣づくとも思はれない。なんだか知覺を喪失したまゝ、永遠の眠に入つて了ひさうにさへ思はれる。

「先生、どうしませう。兄さんはどうしても救はれません！」

お仙はたまらず泣入るのであつた。

紫山は慰める術もなく俯むいて居たが、

「已は明日裁判長に逢つて來よう。署長が動いたのだから裁判長もきッと動くだらうと思ふ。なアに至誠は鬼神を動かすさ。お前の話の樣子でも、裁判長が一番よく理解してくれさうだから、一ッ已がぶつかつて見ようと思ふ。」

さう云つて紫山はお仙に力をつけながら、わが家へ歸つて行つた。

その夜眞夜中に手傳女のお末は井戸端で誰やら水がかりをして居るらしい物音を聞きつけて不思議に思ひながら、そッと起出して勝手元の窓から覗かうとすると、意外にも勝手元の戸が開いて居るの

だ。まさか盜賊が入つた譯でもあるまいと、こは〳〵戸外を窺くと、片割月が低くかゝつて居て、斜に井戸端を照して居たが、そこに女が腰卷一ツになつて頭から水を浴びて居るのだ。霜が冴えて地面は一面に白く凍てゝ居り刄のやうな風が冷やかに窓を掃めて渡つた。

お末はそれがお仙であると知ると、自分は寢衣一ツのまゝ、飛んで出た。

「これ、お仙さん、何するだ。この寒いに水を浴びて、病身なお前の身體が堪んねえでねえか。」

お仙は一心不亂、お末の詞も耳に入らぬ樣子で、また危い足元を蹈みしめ釣瓶を取上げながら、覺束なくも水を汲上げて頭からザアと浴びるのである。

「この寒いによくそんな事が出來るだな。俺ア見たばかりで身體が震ひ上るだ。」と、お末はがた〳〵身體を震はせながら「これ、もうよかんべえ、さア、早く家さ入れよ。」

お仙もがた〳〵身體を震はせながら手早く井戸桁にかけてあるタオルを取上て身體を拭取るのをお末が手傳ひ、同じ井戸桁にかけてあつた衣服を取つて着せかけると、そのまゝ抱へるやうにして、お仙を勝手元へ連込んだが、途端にお仙は氣を失つたやうに、バツタリ上り框へ倒れて了つた。

「それ見ろ、飛んだ事になつちまつたゞ。お仙さん！　氣を確にしろよ、これお仙さん！」

お仙は答へがなく、くひしばつた口の中で、かち〳〵と合ふ齒の音が寂寞を破つて聞えた。

お末は慌てながらお仙を抱へて座敷へ連込むと、敷いてあつたお仙の床の中に寢かせ、上からその邊にあるだけのものを着せかけた。そして自分も寒さに震へて居るので、わが寢床の中から搔卷を取出してそれを被つた上またお仙の傍へ來て、

「これ、お仙さん、氣がついたゞか、これ、お仙さんよ。」

さういひながらお末は手拭でお仙の濡れた髮を拭取つた。

齒のかち合ふ音が止んでお仙は目を睜らくと、

「お末さん、有難う……もう大丈夫よ、身體が暖まつて來たから……。」

「お仙さん、お前、ほんとに飛んでもねえ事するでねえか。僂麻質斯が一遍に惡くなつたらどうするだね。お母さんが寢て居る上に……。」

「だけどもね、お末さん、私の身體なんかどうなつても構つて居られないのよ。……兄さんは明日にもお處刑になるかも知れないんだし、それにお母さんがちツともよくなつてくれないんだから……。」

「それでお前、水垢離取つたゞね。……俺もさうだんべえと思つたゞけんど身體にはかへられねえだよ。……どうだね、暖もつて來たゞかね、ほんとに病氣でも出たら、俺困つちまふでねえか……。」

「もう大丈夫よ、今ぢやアぽか〳〵暖たまつて來たから……。お末さんに寒い思ひさして濟まなかつ

たわね。お前、もう寢んでおくれ、私、大丈夫だから……。」

「さうけ。……そんなら俺寢るとしべえ。ほんとによく暖もるがいゝだよ。何かもつと掛けてやるべえか。」

「いゝえ。もう澤山。……」

文字板

翌る朝はお末が案じたにも拘らず、お仙は何の障るところもなく、いつもの通りに起出した。起出すとまづ氣になる母の容態を見たけれども、やはり昨日の通りで、何の變化も起りさうにも思はれなかつた。

お仙は失望しながら、土手の福の事を考へた。ひよツとして福が口を利けるやうになつてくれはしないだらうか。紫山が今朝は早く福を尋ねた上立寄る筈なので、それを心待にして居た。何にしても今日が大事な日であると思ふと、居ても立つても居られないやうな氣がした。そこ〳〵に食事を濟したところへ紫山が來た。紫山は土手の福を見舞つて來たのだが、福はまだ昏睡狀態をつゞけて居るので、福をあてにする事は到底出來ない事がいよ〳〵明らかであつた。

この上はもう何も施すべき手段が無いから、昨夜話したやうに今から千葉へ行つて裁判長に逢つて見るつもりだと紫山は云出した。お仙は氣の毒でならないけれども、今はその外に策がないと思ふので、それに同意した。

時間がまだ小一時間あるからと、紫山は一先づ家に歸り、仕度して出直す事にして、翠紅園を辭し去つた。

紫山が歸つてから二十分ばかりすると、お仙は母の病室で呻聲を聞いた。これまでとても時々輕い呻は發するが、今度は聲が高かつたので、お仙は飛んで行つて見た。お源は眼を閉ぢたまゝ繼續的の呻聲を發して居るのだ。

「お母さん！　お母さん！」と、お仙は力の限り母を搖ぶつて見た。

呻吟はまだ續いて居たが、暫らくすると呻吟が止んで母が眼を開いた。今迄は眼を開いても只機械的に僅に細く開くだけであつたが、今日は初めてほんとに開いたやうに見えた。いつもの樣子と違つて居るので、お仙は胸を騷がせながら、もしやと一生懸命母の眼を見つめた。同じやうにお仙を見詰めた母の眼には、たしかに知覺の光が宿つて居た。

「おゝ、お母さん！　私が分りますか。」

じッとお仙を見返して居る母の眼からだん〳〵涙が滾れ始めた。

母は知覺を恢復したのだ！　お仙は飛立つやうに思ひながら、

「お母さん、私が分るんですね。分れば何とか知らして下さい。口はやつぱり利けませんか。」

母は何か云はうとするらしく、唇が痙攣的に動いたが、只呻くやうな聲が僅に出るだけだつた。

「やつぱり口は利けませんのね。でも何もかも分るんですね。」

母の眼には首肯くやうな色が見えてその邊を見廻さうとするらしいのだ。お仙は母に一切の事を思ひ起させる必要があると思つたので、

「お母さん、あなたはどうしてこんな病氣になつたか覺えてゐますか。お母さんは兄さんの云渡しの日に千葉へ行つて、公判廷で卒中を起して了つたんです。それから病院へ擔ぎ込まれてだん〳〵よくなつて家へ連れて歸るまで……それからまた今日までの長い間――お母さんは何にも知らずに居たんですが、その長い間にはほんとに恐ろしい事ばかりが續いて居たんです。兄さんは云渡しがあつてからは、いよ〳〵お母さんの罪を引受る覺悟をして了つて、控訴も何もしないもんですから、いよ〳〵死刑を執行される事に極つて了つたんです。それも警察署長のお話では、明日あたりにお處刑になる樣子で、今日中に兄さんを助ける事が出來なければ、兄さんはきッと殺されて了ひます。お母さん！あなたの外にはもう誰も兄さんを助ける人がありません。お母さんが今日正氣づいて下すつたのは、きッと、神樣が兄さんを助けて下さる思召なんです。お母さん、あなたが明日正氣づいて下すつても、もう遲かつたんですよ。」

母の顏には恐ろしい苦悶の色が表れて、何か云はうとしては云へないためなほ煩悶を加へるらしく、見て居る中に額からは油汗がにじんで來るのであつた。

「お母さん、あなたは何もかも分つて、口を利かうとしてもそれが出來ないんですね。手足も動かず、口も利けず、それぢやアお母さんが正氣づいても何にもなりやアしない！」と、折角喜んだお仙の顏にまた暗い影が浮んで來てお仙は泣きさうになつた。

「お仙さん、一寸。」と、此時緣先から聲をかけるものがある。

「誰？」と、お仙は耳を立てたが、

「己だよ、」と、紫山の聲なので、

「おう、先生！」と、轉ぶやうに室を出て、緣先の障子を明けると、マントを着て、中折帽を被つた紫山が立つて居て、

「一寸また打合せたい事があつて寄つたんだが……。」

「先生、いゝところへ入らつしやいました。千葉へ行らつしやるのは待つて下さい。お母さんが正氣づきましたから。……」

紫山は驚いて目を丸くし、

「なに、お母さんが正氣づいた！　そして口も利けるのかへ。」

「こつちでいふ事はよく分るんですけれどもね、只口だけが利けないんですの。それに手足も動かないんでせう。折角正氣づいてもどうしたらいゝかと思つて、途方に暮れてるんですの。」

「さうかね。」と、紫山は太い息を吐いたが「併し正氣づいたといふことが、大變な事實ぢやアないか。こつちのいふ事が分るんなら、何とか話をする工夫がつくだらう。」

「兎に角先生、來て見て下さい。」

紫山はマントを脫捨てると、急いで座敷へ上つて來た。なるほどお源がちやんと眼を睜いて居て、その眼には知覺の閃きが見えて居るのだ。

「お母さん、先生よ。……分るでせう。」

「お母さん、正氣がつきましたか。」と、紫山はお源の顏を覗き込んだ。

母の紫山を見た眼にはまた涙が浮んだ。お源が知覺を恢復した事は紫山の眼にも疑ふところは無かつた。

「ウム、ちやんともう分るやうになつたんだね。何とか話をする工夫がないかなア。」

「何かないもんでせうか。」

紫山は腕を拱いてお源の顏をじッと眺めて居る傍から、お仙も涙ぐんだまゝ母の顏を戍つて居た。

ふと紫山に或考へが浮んだ。

「お仙さん、お母さんは片ッ方の眼で眼たゝきをして居るが、瞼だけは勝手に動くのぢやアないかしらん。」

お仙もその事實を認めると、

「さうね、お母さんは片眼で眼たゝきをしてゐるわね。お母さんに聞いて見ませう。お母さん、あなた、またゝきは自由に出來るんですか。」

母の顏には首肯くやうな色が浮んだばかりか、續けさまに右の眼の眼たゝきをして見せたのは、眼たゝきの自由に出來る事を知らせるやうに見えた。

「先生、お母さんの片眼は眼たゝきが自由に出來るのよ。……お母さん、それぢやアね、眼たゝきを二ッして御覽なさい。」

母はすぐ眼たゝきを二ッして見せた。お仙は息も繼がず重ねて、

「ぢや今度は三ッ。」

母はすぐまた三ッ眼たゝきをした。普通の人の樣には早く出來なくても、明かに續けさまに三ッしたのであつた。

それを見た二人の顏は忽ち明るく輝き渡つた。母親と話が出來る！　と思ふと何とも云はれぬ嬉しさと希望の光が二人の眼に宿つた。

「お仙ちやん、それぢやア何だね、お母さんは云ふ事は出來なくつても、返事だけは出來る譯だ。兄さんはきッと救はれるよ。何かお母さんに云つて御覽……。」

「えゝ……。お母さん、兄さんを助けることが出來るのはお母さんばかりですよ。お母さんは兄さんを助けて下さいますか。助けて下さるつもりなら、眼たゝきを二ッして下さい。」

母は前の通り眼たゝきを二ッした。

「でゝ兄さんを助けるにはお母さんが自首しなければならないのです。……云渡しの日にお母さんが千葉へ行つたのは、きッと自首して出るつもりだつたんでせう。」

母はまた眼たゝきをして見せた。

「ぢやアお品さんを殺したのはお母さんだとお上へ云つて下さるんですね。」

お源の顏には恐ろしい苦悶の色が表れて、同時に同じ眼たゝきが繰返された。

「お仙ちやん、さういふ風にすれば或程度まで話が出來るぢやアないか。已はもう千葉へ行かずとも

よささうだ。その代りに今から警察へ行つて署長を連れて來よう。」
「えゝ、さうですわね。署長さんに來て貰ひませうか。」
「併しお母さんにモ一度念を押して貰はう、署長を連れて來てもいゝかどうか……。」
二人の話が分るので、お源は問はれぬ先に、二ツ眼たゝきをして見せた。
「ウム、お母さんが承知だ。それぢやア己は署長を呼んで來るから……。」
紫山は勇みながら、大急ぎに翠紅園を出て行つた。
程なく警察署長は一人の刑事を連れて、緊張した顏色をしながら、紫山の案内で翠紅園へ入つて來た。と見たお仙は、
「お母さん、署長さんがおいでになりましたよ。」と、母の傍を離れて緣に來て署長を迎へた。
「お母さんが正氣づいたさうだね。話が分ればしめたものだが……。」
「どうぞお上りなすつて頂きます。此方の云ふ事はよく通ずるやうになりました。」
署長は急がはしく靴を脫いで、紫山や刑事と共に病室へ入つて來たが、お源の枕頭へ突膝をすると、その顏を見て、
「ウム、なるほど分りさうな樣子をして居る。お前は私が分るかな。」

「署長さん、お母さんの返事は片眼の眼たゝき二ツなんです。今のところそれだけより外出來ませんから。」
「ウム、なるほど今二ツ眼たゝきをした。……これ、お前はお品殺しの犯人だといふが本當か。……ウム、本當か……成程……吉藏の罪を身に引受けようとしてそんな事をいふのではないか。どうだ。」
お源は眼たゝきをせぬばかりか、何か云はうとして煩悶しながら、二言三言わからぬ事を呻くやうに云ひ出した。署長はその樣子を見て滿足し、
「それでは全くお前が犯人に相違ないのだな。」
お源の顏色は舊に復つて、例の眼たゝきを二ツ繰返す。
「よし／＼、それではお前はどこでお品を殺したのだ。」
お源は呻くだけで、もとより何にも云へなかつた。お仙が口を添へて、
「お母さん、家の納家の中ですね。」
母はまた眼たゝきの合圖をする。
署長はお仙と紫山に向つて、
「いや、分りました。私には母親が犯人である事は最早一點の疑もないやうです。たゞ困るのは口供

を取る事の出來ない點です。何か確證が擧らなければ採用せぬといふ檢事の意見ですから、只母親が承認したといふだけでは、やはり檢事を動かす事が出來まいと思ふのです。」

お仙はおろ〳〵しながら、

「まア、どうしたらいゝんでございませう。署長さんはもうお母さんが犯人だと認めて下さるのに……。」

此時母が呻き出したので、お仙はすぐ母の顏を見ると、何か唇を動かしては物を云はうとしながら、何とも知れぬ煩悶の樣子を顏に見せて居るのだ。

「お母さん、署長さんはお母さんが只犯人だと眼たゝきをして見せたゞけでは、檢事さんが本當にして下さらないと仰しやるんです。何か證據の品を持出さなければ、お取上がないんださうです。まア、どうしたらいゝでせうね、お母さん。」

母の煩悶はます〳〵募つて眼には異樣の光が浮び、額からは油汗が流れ、唇が痙攣的に動いて、啞のやうな叫びが續けさまに漏れるのだ。

「お母さんは何か云はうとしても云へないので、此樣に苦んで居るんです。お母さんはきッと證據の品があると云はうとすると相違ありません。」

「さうらしいね。どうかしてそれを知る工夫はあるまいかねえ。」と、紫山は腕を組んだ。

署長も首をひねつて、

「さア、何か工夫があればよいが……。」

お仙はふと何か思ひついたらしく、紫山を呼びかけて、

「先生、いろはを皆な書いたものをお母さんに見せて置いて、こつちで順々に字をさしながら、お母さんに文句を綴らして書取つて見たらどうでせう。」

紫山の眼は輝いて、

「ウム、そいつアいゝ工夫だ。一々指して行つてお母さんが眼たゝき二ツした字を書取るんだね。なるほどさうすれば文句が綴れる譯だ。」

署長も同意して、

「暇が取れるかも知れんが、それなら口供が取れさうです。」

早速お仙が一枚の白紙と筆硯を持つて來たので、紫山が筆太に四十八文字の平假名を認めた。紫山は筆を擱くとまた考へて、

「どうだらう、いろはだけでは容易に埒が明くまいから、『私』とか、『お品』とか、『吉藏』とか、

『一二三』の數字とか、そんな必要に思はれさうな字を別に書足して置いては……。」

「さうですね、さうしたらいゝかも知れませんね。」

署長は口を入れて、

「併しまづ試驗にいろはだけでやつて見たらどうです。」

「それではさうしませう。お仙さん、それを板か何かに貼つけないと指し難いだらう。」

「何か見つけて來ませう。」

お仙は室を出て行つたが、すぐに手ごろの箱の蓋を見つけて來たので、いろはをそれへ貼りつけると、早速の文字板が出來上つた。

お仙はそれを左手に持つて母親に示した上、火箸を取つて指さしながら、

「お母さん、私が斯うして一字々々指して行きますから、お母さんが云はうと思ふ字のところへ來たら、眼たゝきを二ツして下さい。それを先生に書取つて頂きますから……。」

母は承知の旨を示した。

「それぢやア、お母さん、始めますよ。」

お仙は早速火箸で文字を指さし始めると、署長始め一同固唾を呑んで待構へた。

文字板の工夫は此際人間の智恵で考へ得る最上の方法に相違なかつたが、併し容易に進捗しない事は殆ど人々を失望せしむるばかりだつた。一字指さしては母親の目を見つめ、合圖がないと見て、次の文字へ移つて行くその道行には、前途意想外の時間が費えさうに思はれた。現に可なりの時間をつぶして漸く二十番目位の文字迄順々に指さして行つたけれども、母親はまだ何の合圖もしないのだ。この調子で進むならば、よし母親が手早く合圖をするにしても、一通りの口供書が出來上るほどの文句をつゞるには、今日中かゝつても難かしさうに思はれた。人々の顏には次第にまた暗い影が表れて來たが、お仙はなほ失望せず、だん〳〵指さして行つて漸く「え」の文字に至つた時、お源は始めて眼たゝきを二ツした。

「先生、えですよ！」と、お仙は叫んで、また母に向ひ「お母さん、此字ですね。」

再び念を押して「え」の字を指すと、母親はすぐまた合圖の眼たゝき二ツして見せた。これで文字が綴れると自信の出來た事が、人々の頭に勇氣と希望を蘇生らせた。

お仙が熱心に文字を指して行く中、いろは文字は一順終つてまた繰返され「り」の文字へ來て、またお源の合圖が表はれた。

「えり」の文字が綴られた時、人々はまた不可解の眼を見合せた。けれどもだん〳〵に次の八文字が

綴られた時には、誰の胸も一度に高く波打つた。

「えりにてかみある」

「手紙があるといふのぢやないか。」と、署長は叫んだ。

「衣服の襟に手紙があるんでせうか。」と、お仙は不思議さうに云つた。

「お仙さん、お母さんの襟を改めて見たらどうだね。」

お仙は母に向つて、

「お母さん、あなたの衣服の襟に手紙があるんですの？」

合圖の眼たゝきをした母の顏には、始めて重荷を卸した樣な色が見えた。

母の着て居る衣服は、吉藏が最後の言渡しの日に千葉まで着て行つたその時の紬の綿入だつた。

お仙はすぐ母の襟に觸つて見た。なるほど縫ごみに手紙でも入れてあるやうな手觸りがする。

「はい、あります！」と、お仙は飛立つやうに叫んだ。

早速剪刀を取出して來て、縫ごみを切取つて見ると、果して一封のもめくちやになつた手紙が出た。

期せずして人々は呀！　と叫んだ。

「はい、こんな手紙が出ました。」と、お仙は震へる手にそれを署長に差出した。

署長が手に取つて見ると、

「さいばん長樣」と、宛名を書いて裏には日付と田淵源の名が記されてある。

「ウム、これは裁判長に宛てたものだ。この日付は……？」

「言渡しの日でございます。」と、お仙は口を挿んだ。

「それではあの日にこれを裁判長に差出すつもりで持つて行つたものと見える。」と、云ひながら署長は急はしく開封して見た。

手紙は可なり長いもので、かの篠竹の發見があつてから言渡しの日迄、三日ほどの間に書いたものらしく、その時はもう中風の徵候が表はれて居たので左なきだに、金釘流の文字のよほど亂れて、惱ましい筆の運び振であつたが、要領は可なりよく盡されてあつた。

お源は其時自分からも中風の兆だと自覺して居たのだ。自分の母親も同じ病氣で全身不隨となり、口も利けなくなつて、慘めな最後を遂げた事を、目前に見て來た事とて、きツと自分もその通りになるに相違ない、いつどんな折にさうなるかも知れないと思ふので、萬一の場合を慮かり、一切の事を書綴つた上、それを襟に縫込んで裁判所に出かけたのであつた。

それは何事も包まぬお源の過去の懺悔であつた。無論お品の父重藏との關係をも書漏さなかつた。

お品の父重藏に裏切られた恨は深く骨髓に徹し、放火殺人未遂の大罪を犯してもなほ慊らず、必ず怨を報いんと誓つたその重藏の子が、お品であると知つては、その父に對する舊怨むら〳〵と燃え立つと共に、面ざしさへ瓜二つのその子に復讐せんとの念新たに生じ、その犧牲としてまづお品の弟子入を喜び迎へながら、思はぬ吉藏とお品の戀に、嫉妬の火の手は新たに煽られ、肉を啖ひ骨を刻んでもなほ飽足らぬ仇敵の子が、その父と同じく再び自分の手から最愛の我子を奪つて行くかと思ふと、胸は嗔恚の焰に燒盡され、とう〳〵夢中に兇行を遂ぐるに至つた次第を、可なりハッキリ認めてあつた。

その自訴狀は始め署長が讀みかけたが、どうしてもよく讀めないので、紫山が代つて讀上げたのだ。それにより一切の事情が始めて明かになつた。人々はお源の執念の恐ろしさに驚愕の眼を睜つた。わけてもお仙は今迄胸に抱いて居たすべての疑團が氷釋するにつけ、兄とお品の惡因緣を悲しまずには居られなかつた。

更にこの手紙には自分がお品を殺したために享けた滿足は束の間で、一方には我子の心が永久に自分を離れた事を知つた苦痛と、一方にはその最愛の子が自分の罪のため牢獄に投ぜられて居る現在の事實に、嘗て覺えぬ煩悶呵責の囚となり、いッそ名乘つて出ようかと幾度か心に思ひ立ちながら、名乘つて出ずとも吉藏が助かるものならばと、未練の心に驅られて居る中、吉藏はいよ〳〵自分の罪を引受けて刑を受ける覺悟をした事も察せられ、最後の言渡しに死刑の宣告を受る事も免れぬやうに思はれて來たので、最早絕對絕命いよ〳〵名乘つて出る覺悟を極め千葉へ出かけた事が書いてあり、なほ犯罪の當夜吉藏の靴を穿いて出たのは、自分の草履の緒が切れたため、園藝服を着たのも自分の着物に血のつくのを避けるため、いづれも狼狽のあまり何心なく身につけて出た事や、お品を殺した兇器――除草器は、納屋の傍の池に投入れてある事、お品の櫛の折れたのを納家の中に埋てある事まで書添へてあつた。

すべての疑問は殘る方なく解釋された。最早一刻の躊躇も許さない。署長は少からず亢奮した樣子で、

「われ〳〵は法律の名によつて、實に戰慄すべき大罪を犯すところでした。今からすぐ裁判長と檢事に同文の至急電報を打つて千葉へ出張します。それではお仙……お前も證人として連れて行きたいと思ふがどうか。」

「はい、お伴を致します。」と、お仙は逡巡ふところもなく答へた。

「それでは何は置いても池の中と納家を搜索しなければなりません。私はこの手紙の外に是非證據品を持つて行きたいと思ひます。」と、署長は時計を出して見て「次の汽車まで五十分の餘裕があります

ら、その間に捜査が出來ませう。」

署長はまたお源に向つて、

「よく自白をしたな、これさへあれば吉藏は助けてやるぞ。」

お源はさも滿足らしく、眼をつむつた。

署長を始め、刑事と紫山はお仙を殘して慌たゞしく庭へ下りて行つた。そこにのツそり立つて樣子を知らうとして居た常吉を認めると、紫山は署長を顧みて、

「一ツ常吉に池の中を捜させませう。……おい、常吉、池の中にお品さんを殺した除草器が投込んであるさうだから、一ツお前入つて捜して見てくれんか。」

「ウム、入つて捜して見べえ。」と、好奇心に驅られた常吉はすぐに承知した。

納家の中からレーキを持出して池の傍へ來た常吉は、何の逡巡ふところもなく尻端折になり、昨夜の氷がやツと解けたばかりの池の中へ入つて行つた。それを見ると刑事も働き振を見せようとして、ヅボンと足袋を脱捨て、常吉の後から入つて行つた。刑事は足先で、常吉はレーキで池の底の泥を攪廻して居る中に、忽ち除草器は常吉のレーキにかゝつて上つて來た。

「あつた！　あつた！」と、叫びながら、常吉はその除草器を手に取つて見せたが、泥まみれになつて居るので、無造作にそれを池で洗はうとすると、

「洗つちやアいかん、こつちへ出せ。」と、刑事は受取つて、そのまゝ持つて池を出ると、署長は待構へて、

「ウム、果してあつたな。これでやつたのか。……何か毛らしいものが絡んで居るやうだな。そツと洗つて見ろ。」

刑事がその除草器を靜かに、がは〳〵滌いで見ると、果して十筋ばかりの髪の毛が、ソツクリと根を揃へてからまりついて居た。

「いや、立派な證據品です。」と、刑事は云つたが、紫山はそれを見るとぞツと身震ひが出た。

「その除草器は親方が特別に打たして作らしたゞよ。お品さんはそれで殺されたゞね。」と、常吉も恐怖に打たれた顏色をして云つた。

特別に打たしたといふその除草器は五本爪の、普通の除草器よりよほど長い。十分に鍛へられた鐵の爪に、一尺ばかりの柄をすげたもので、誰が見てもそれを腦天へ打込まれては、一たまりもあるまいと思はれた。

「さア、今度は梯だ。」

除草器が出たのに勇み立ちながら、署長はまた刑事と常吉を督して、納家の中を掘起させて見た。それも一坪あまりの場所を掘返すに多くの暇はかゝらなかつた。果して髏甲の櫛の二ツに折れたのが中から出た。

證據物件も悉く揃つたので、署長は紫山に向ひ、

「これで吉藏が助かります。安心して下さい。」

「何分よろしく……。」と、紫山は滿面喜びを見せて「それではすぐ千葉へお出になりますか。」

「署へ歸らずにこのまゝ行きます。お仙はどうしました。」

「見て來ませう。」と、紫山は立去る。

署長は急がはしく手帳の端に裁判長と檢事に當た電文を認めて刑事に渡し、

「お前はすぐこの至急電報を打つた上、署に歸つてこの事を報告してくれ。」

紫山の方は急いで母屋へ引返して來ると、今お仙の仕度が出來上つたところだつた。

「お仙ちやん、證據の品が出たよ、池から除草器と納家から櫛の折れたのが……。」

「まア、さうですか。……それぢやア今度こそ大丈夫ですわね。」

「あゝ大丈夫だとも、吉さんは助かつた。」

「先生、私こんなに嬉しいことはありません。」と、お仙の眼には熱い涙が漲つた。

「己もどんなに嬉しいか知れない。お仙ちやん、お前も苦勞の仕甲斐があつたね。」

「えゝ」と、涙のひまに莞爾して「これもみんな先生のお方添のお蔭ですわ。」

そこへ署長が證據物件を手にして表れた。

「さア、仕度が出來たかな。すぐ出かけるとしよう。一寸これを包むのに新聞かなにかを貰ひたい。」

お仙が取出す新聞紙に除草器と櫛を別々に包み、櫛はポケットに入れ、除草器は紐でくゝつて携へ、お仙を急がして翠紅園を出た。

終篇

警察署長とお仙が千葉へ着いたのは三時過であつた。早速俥で裁判所へかけつけると、丁度裁判長も檢事も、手がすいて居て二人揃つた一室に案内された。

二人の顏には署長を待設けて居たやうな引締つた色が見え、一緒に入つて來たお仙を見た檢事の眼には、以前に變る同情の光が宿つて居た。

檢事は署長の會釋するのを待つて、

「犯人は矢張り母親であつたさうですね。今度は間違はありませんな。」

「間違はありません、電報でも申上げましたやうに、母親は言渡の日に自白するつもりで、裁判長殿にあてた自訴狀を衣服の襟に縫込んで出かけたのです。その手紙がかの卒倒の日以來着て居つたまゝの着衣の襟から出ましたので、その本文によつて、お品を殺害した兇器の所在も知れ、納家に埋めた被害者の櫛も發見された次第です。お源の裁判長殿に當た手紙はこれで……。」と、まづポケットからお源の手紙を取出して、二人の前に差置いた。

「なるほど。」と、檢事は首肯いて「それでは裁判長とこれを讀んだ上、詳しい說明を聞きませう。お仙にも椅子を與へて下さい。」

お仙は與へられた椅子に小さくなつて腰を卸した。

手紙は二人の間に讀まれた。署長の說明もよく徹底し、證據物件さへ具つて居るので、犯罪の眞相は間然するところなく明白になつた。

「今一日のところで恐るべき結果を來たすところだつた。」

「われ〳〵の名も救はれた譯です。」

裁判長と檢事は相顧みて滿足の微笑を漏らした。山田はすぐお仙の方を見て、

「お前は母親の犯罪を始めから知つて居つたのだな。……今日までえらい苦勞をしたの。」と、優しいふ後から、檢事が、

「お前を信ぜんで濟んかつた。許してくれ。吉藏の方はこれからすぐ手續をして、明日中に假出獄をさせてやる。その上モ一度公判を開いて無罪の言渡しをせんければならんのだ。」

お仙は面目を施しながら、

「どうぞよろしくお願ひ申します。」と、云つたが、それも口の中に消えて、嬉し泣に泣入るのであ

る。

「併しお仙。」と、檢事は改めて「いづれお前を參考人として訊問せんければならんのだから、今日來たのを幸ひ、この席で一應取調べ、それで濟してやらうと思ふ。母親の犯罪に關する一切の事をこゝで申述るがよい。」

お仙は母の犯罪を語る事は苦痛であるけれども、今更包むべき事ではないので、詳細の事實を檢事と裁判長の問に應じて語り出した。

今日はお仙の陳述に一點の僞りもないことが、明かに二人の法官に了解された。

訊問が終ると、

「それではもう歸つてもよろしい。明日は吉藏に假出獄の手つゞきをしてやるが、お前が兄を引取つて歸るがよからう。」

「はい、さうして頂けばこんな嬉しい事はございません。」

「お前は今夜泊るところはあるのか。」

「はい、從兄の家で泊めて貰ひます。」

「假出獄の手續が出來れば、そこへ通知するから住所を知らして行くがよい。」

お仙は從兄の住所を書殘し、二人の法官と署長に厚く禮を述べ、涙ながら裁判所を辭し去つた。

翌る朝お仙は裁判所から通知を受取つた。吉藏は今日の午後一時に假出獄を許されるといふのである。それまでにまだ時間があるので、お仙はその間に山田の娘雪子を尋ねて、過日の禮を云はなければならないと考へた。さうしてお仙は一度失つた雪子の溫たかい同情の言葉を、モ一度雪子の口から聞きたかつたのである。

早速雪子を尋ねると、雪子は喜んでお仙を迎へ入れた。昨夜もう父から一切の事を聞いて居たので、さま〳〵お仙を勞はり慰め、厚く待遇をするのである。お仙はこゝでも云知れぬ滿足を覺えて辭し去つた。

今朝裁判所の方から通知を受取ると、お仙は早速紫山の方へ電報を打つて假出獄の事を知らしたので、紫山は取るものも取あへずすぐ汽車で千葉へ出て來た。それは丁度お仙が從兄夫婦と連立つて、從兄の宅を出ようとする間際だつた。

お仙は紫山が來たので喜びながら、

「まア、先生、よく來て下さいました。」

「一時では間に合ふまいかと思つたが、すぐ出る汽車があつたので、翠紅園から着の身着のまゝで飛

んで來たのだよ。吉さんが出獄するといふのに、じツとしてゐられないぢやアないか。」

「ほんとに間に合つてよござんした。私、何だか昨日からまるで夢でも見て居るやうで……。」と、ま

たしても涙が先に立つ。

「それはお互だよ。全く夢のやうだ。今朝電報を受取つた時は常吉までも泣いたよ。」と、紫山の眼に

も涙が浮んだ。

「そしてお母さんは？」

「ウム、お母さんか。じツくり落ちついて居るがね、今朝電報の事を知らせると、やつぱり喜んでお

母さんの眼からもひツきりなしに涙が滾れて居たよ。併し身體は大分衰弱して來たやうだね。昨日か

らお母さん何にも取らないんだ。どうせ長い事はないね。」

「さうですかねえ。」と、お仙は溜息を吐いた。

一同はすぐ打連れて監獄へ出かけた。いよ〳〵假出獄の時刻になると、紫山の發議でめい〳〵は待

合所に殘り、お仙だけがまづ吉藏に逢ふ事にした。

お仙と吉藏と逢つた時の光景は實際感動的であつた。吉藏は今朝になつて始めて典獄から假出獄の

事を告げられたので、其時は只夢のやうに思つた。すべてが母の自白のためであると知ると、只何事

も止むを得ぬ成行であると觀念する外なかつた。自分には母の罪を引受けて死刑を受けた方が幸福か

も知れぬと思はれたが、自分の明りが立つたといふ事も、強ち望ましからぬ事では無かつた。只自分

の前途に何等の光明も認め得ぬ彼は、この假出獄を悲しいとも思はぬ代りに、嬉しいとも思はなかつ

た。

けれども自分を喜び迎へる妹の、嘗て見ぬ輝やき渡つた顏を見ると、われにもあらず吉藏の心は昂

ぶり、その刹那眼には一杯の涙が浮んだ。

「お〳〵、お仙か！」

「兄さん！」

二人は只何も云はず抱合つた。暫らくして双方の手が弛むと、

「兄さん、お目出度うございます。」

吉藏は涙を拂ひながら、溜息を吐いて、

「折角お前は喜んでくれてるが、己には目出度くも何ともない。いつそお母さんの罪を引受けて、お

品の後を追つた方がよかつたんだ。」

「兄さん、尤もですけれどもね。……そんな事を云はないで、どうぞ機嫌よく家へ歸つて下さい。み

んなが待つて居ますから……。」

「誰が待つてるだ？」

お仙はハツと思ひながら、

「お母さん始め私だつて　謙さんだつて、常吉だつて、みんな待つてるぢやア有りませんか。」

「ウム、さうだな。お母さんは嘸己を待つてべえ。……どうしてるだ、病氣はよくなつて來たゞか。」

「えゝ、まだ口が利けませんけれども、こつちでいふ事はよく分るやうになりました。兄さんが助かると聞いて涙を流して喜んで居ます。無事な兄さんの顏をお母さんに見せてあげて下さい。どうせお母さんは長い事はありますまいから……。」

「さうか、よし〳〵、それぢやア機嫌よくお母さんの顏を見に歸るべえ。」と、ほろりと泣笑ひをした。

そこへ紫山が入つて來た。

「おゝ謙さん！」

「吉さん、お目出度う！」

二人はまた手を取合つて泣いた。

「吉さん、世の中は奮鬪だよ。一ッまた生れ變つたつもりでやつてくれ。」

「兎も角　緒に歸るべえ。謙さんにはひどく厄介になつたゞな。己には全くお禮の云樣もねえだ。」

「何をいふんだ。當然ぢやアないか。さあ行かう。あつちにお信さん夫婦が待つて居るよ。」

「みんなに來て貰つて濟まねえだな。」

吉藏は一先づ從兄の宅に落ちついた。そこでお仙と紫山から詳細の事を聞取つたが、今更に自分とお品の惡因緣を悲しむと共に、母の執念の恐ろしさに戰慄するのであつた。再び翠紅園に歸る事は進まぬながらも、萬事は紫山とお仙のいふに任せ、湯にも入れば髭も剃つた上、三人共々汽車に乘込み、夕方には翠紅園へ歸つて來た。

お源は吉藏が今日許されて歸ると聞かされてから、ひどく亢奮して、それを待受ける樣子であつたが、いよ〳〵吉藏が歸つて來たと聞いた時には、全身木の葉のやうに震へ始めた。

吉藏はわが家の閾を跨ぐと、かけ込むやうに母の居間へ通つて、

「お母さん！　今歸つて來たゞぞ。」

母の手を取ると、母は何か言はうとするが、只呻くやうな聲が出るだけで、唇も顏の筋肉も痙攣的に震ひ、そして眼からは嬉し涙が瀧のやうに流れた。吉藏はじッと母を見つめて、

「お母さん、お前は己が許されて歸つて來たのが、そんなに嬉しいだか。……そんならなぜお品……、あゝ云ふめえ、こんな愚痴いふでなかつた。お母さん、勘辨してくろ。己、もうお前に怨もなにもねえだ。今こそお前に……。」

云ふ中母の顏色が變つて來たので、

「おゝ、お母さんが――」

「お母さんがどうしました。」と、泣いて居たお仙がすり寄つた。

吉藏は慌しく母を抱起したが、その時母はウーと一聲長く呻いたまゝ、眼を閉ぢて後へ仰反つて了つた。

「もしやお母さんは……お母さん！　お母さん！」

呼んで見たがもう答へがない。お源はわが子に抱かれて永遠の旅路へ上つたのである。

「お母さん！　お母さん！」と、お仙も母に取縋つて搖動かして見たけれども、もう生の徵候は何一つ殘つて居なかつた。

「常吉、常吉！」と、吉藏は急ぎ常吉を呼んで「誰でもいゝから大急ぎで醫者を呼んで來てくろ。お母さんの容體が怪しいだから……。」

常吉は走つて出た。

紫山は深い溜息をついて、

「お母さんは息を引取つたらしいね。……腦溢血が再發したのだらう。もう駄目だ。それがお母さんの幸だよ。無情のやうだが、己はお母さんの蘇生せぬ事を祈る。わが家の疊の上で吉さんとお仙さんに介抱されて死ねば、これほど結構な事はない。」

實際殺人の大罪を犯しながら、安らかに愛兒等の介抱を受けて死ぬお源は、この世の稀有な仕合せものに相違なかつた。

醫者はすぐに駈けつけて來たけれども、最早策の施すところは無かつた。紫山の察した通り、深い感激のため腦溢血が再發したので、今度は一遍に息の根が止つたのだ。

吉藏は翌日土手の福を六兵衛方に見舞つたが、福は前日の夕方から正氣づいて居た。まだ口を利く氣力はなかつたが、吉藏の假出獄の事を聞くと、ひどく滿足して喜ぶ樣子が見えた。

お源の葬式は極めて質素に行はれた。

程なく公判は開かれて、吉藏は改めて無罪の宣告を受け、こゝに始めて晴天白日の身となつた。

吉藏には多くの同情が集つたにも拘らず、何事も思出の種なる翠紅園の事業を續けて行く氣にはな

れなかつた。紫山とお仙の諫むるも聞かず、翠紅園を人手に渡して、その金を資本に米國の堂本を頼つて渡航し、彼方で一ぱしの花屋になる覺悟を極めたのだ。

二ケ月の後吉藏の唯一の心がかりのお仙が、快よく紫山に引取られる事になると、吉藏は何の思ひ殘すところもなく、故國を後に淋しく亞米利加に旅立つた。

土手の福が舊の身體になると、彼の人氣はいよ〳〵加はつた　相變らずぽろ〳〵の襤褸を身につけ、ビヤボンを搖鳴しながら、子供等を集めては踊り興ずる彼の姿は、いつまでもこの土地の名物として殘つた。

幽芳全集第七卷終

幽芳全集
第七卷

大正十三年九月十五日印刷
大正十三年九月十八日發行

（非賣品）

著者　菊池清
發行者　東京市麹町區内幸町一丁目六番地　中塚榮次郎
印刷者　東京市京橋區木挽町二丁目十三番地　長谷川美麿
印刷所　東京市京橋區木挽町二丁目十三番地　株式會社尚文社

發行所　東京市麹町區内幸町一丁目六番地
國民圖書株式會社
電話銀座七八三番・二一八八番
振替東京五二二九八番

終